

第2節 土器類

今回の調査では繩文土器、古墳時代から平安時代にかけての土師器・須恵器・土師質土器、中世に属する土師質の皿・土製鏡・陶器などが出土した。そのほとんどは破片で完形品は少ないが、総量は破片も含めてプラスチックコンテナーパット273個分となる。そのトレンチ・調査次毎の出土量の内訳をみると、表16のようになる。

表16

トレンチ 次	個	トレンチ 次	個	トレンチ 次	個	トレンチ 次	個	トレンチ 次	個
1	2.5	8		15	17	22	17	29	7
2	1.5	9	4	16	9	23	11	30	19.5
3	1	10	2	17	9.5	24	4	31	24
4	1	11	1	18	7.5	25	14	32	3
5	16	12	4	19	11	26	7	33	23
6	1.5	13	1	20	11	27	28	34	4
7	1	14	1	21	1	28	1.5	35	6.5

出土量の全体の傾向をみると、第27・30・31次調査が20個前後と多いが、これらは竪穴式住居跡が多数検出されており、それに伴うものである。第33次調査も23個と多いが、これはSK103から多量の土師質の皿が出土したことによる。それに次いで多い第5・15トレンチ・第22次調査は、竪穴式住居跡と土壤、瓦溜からのもので、第20・25次調査は主に中世以降の遺物である。このことからも分かるように土器類は竪穴式住居跡からの出土が目立つが、SK33・103などの土壤からは集中的な出土がみられた。金堂跡・塔跡からの出土も少なくないが、これらの大部分は後世の搅乱層や盛土中に含まれているものであり、直接遺構に伴うものはほとんどみられなかった。

次に時代的な区分をみてみる。繩文時代の土器類は中期に属するものが第27・29・30次調査区と寺城南半部でみられた。これらは国分寺の造成盛土である黒色粘質土中に包含される小破片がほとんどで、この層中からは打製石斧・石簇も出土している。同様な状況はこの南側に接する寺城南外側である第31次調査区でもみられた。この区域ではこの時期に該当する遺構として第30次調査区で円形の竪穴式住居跡S J 29、第27次調査で円形小土壤SK63・64が検出されたが、これから土器類の出土は僅かであった。これ以外には明確な遺構は検出されず、遺構に伴う顯著な遺物はなかった。金堂跡南側の第29次調査区では、竪穴式住居S J 28に伴う石組の炉跡が検出され、その中に埋設された小形の甕1個がほぼ完形で出土した。この住居跡はほぼ完全に削平を受けており、炉以外は残っていない状態であった。繩文土器で全形を明かにできるものはこの1個のみである。こうした状況からみて国分寺城の南半部には、この時期に竪穴式住居が散在して造られていたことが分かるが、これらは国分寺が建立される時期には搅乱を受けており、それに伴う遺物を含んだ土が整地用に使われたものとみられる。

古墳時代の土器類は第22・31次調査区のSK09・10・11・35・41などの竪穴式住居跡から出土している。これらは床面直上からのものはさ程多くはないが、竈の構築用として使われた甕、そこで使用された壺などの破片の散布が目立った。器種は土師器甕・甕がほとんどで、それ以外には土師器甕・甕、須恵器蓋・提瓶が少数みられるのみである。いずれ

出土量の傾向

時代的区分
繩文時代

古墳時代

も時期は6世紀代のものである。この時期の遺物は、これらの土器類以外には出土が確認されていない。遺構も古墳・溝・土壙といった竪穴式住居以外のものは検出されなかった。また弥生時代から古墳時代前期にかけての遺物の出土は全くみられず、この時期の遺構も検出されなかった。

- 奈良～平安時代** 出土した土器類の主体は奈良時代から平安時代に属するもので、その多くは竪穴式住居跡に伴って出土している。その時期区分を世紀単位でみると7世紀代のものがS J 16・17・18・32・33・45など、8世紀代のものがS J 01・05・06・24・25・26・30など、9世紀代のものがS J 08・14・15・23など、10世紀代のものがS J 03・13・37・38・39・40など、11世紀代のものがS J 20・21・22などであるが、最も新しいのは11世紀中期のものである。これらの内の7・8世紀前期に属するものは一般的な竪穴式住居であり、それに伴う土器類は土師器壺・甕が多く、それに土師器壺・塊、須恵器壺などが少数みられる。それに対して国分寺建立以後に造られたS J 06・08・13・21・23などは、甕の構築材として瓦が使われているのが特徴的であり、出土する遺物も土器類よりも瓦片が多い傾向がある。またS J 13のように床面に完形の瓦が置かれていたり、S J 06のように坩埚・模型石製品といった道具類を伴うものもあり、これらは修造に関連する施設ないしはそのための仮設住居である可能性が考えられる。これに関連する工作場の遺構としては9世紀から10世紀にかけてのS K 85・86など検出されている。これらからは土器類とともに坩埚・羽口それに高熱を受けた痕跡をもつ大形の瓦片など工作中に使われた道具類が多く出土しており、鍛冶作業跡であることが明かである。その内のS K 85の炉近くから出土した須恵器壺の中に、体部外面に「造仏」と墨書きされたものがあったが、これは寺域内に設けられたこうした施設が持つ役割の一端を示す資料である。これららの他に、第12トレンチで検出された9世紀代のS A 01の柱穴埋土と第26次調査区で検出された11世紀代のS K 33埋土からは、完形品を含む多数の土器器壺・甕、須恵器壺・蓋、土師質の壺・塊・皿などが集中して出土した。前者は造り替えの際に何等かの目的をもって埋納された可能性が考えられ、後者は不要となった土器類が廃棄されたものと見なされる。また後者の中には鉄製の釦具2個が含まれていた。今回の調査では多數の土壤が検出されているが、こうした性格を示すものはこの2つのみである。以上の遺構に伴うもの以外に、第17次調査区の瓦敷布面の下層、第15トレンチの瓦溜からも土師器壺・甕、須恵器壺、土師質の皿などがかなりまとまって出土している。ただし後者はその内容から中世に形成されたものと判断される。
- これらの土器類は大部分が当時の一般的な生活用具であり、この時代の集落跡などから多量に出土するものである。国分寺の寺域内は当然のことながら一般的な住居が造られることはなく、またその縁辺も一定の規制を受けていたと見なされる。従って今回の調査で出土した国分寺存続期に属する生活用具としての土器類は、集落跡の調査に比べて出土量、器種ともにはるかに少なかったものと想像される。これに対して国分寺を特徴づける出土遺物の1つとして、奈良三彩陶を上げることができる。これは塔跡、南辯天塼近辺、金堂跡付近から出土しており、ほとんどが小破片であるが全部で18片ある。器種としては大形の薬壺、小形の薬壺、盤など数種類が混在してあるようである。現在まで群馬県内では8ヶの遺跡から奈良三彩陶の出土が知られている。その代表的な例としては、佐野郡衙跡に

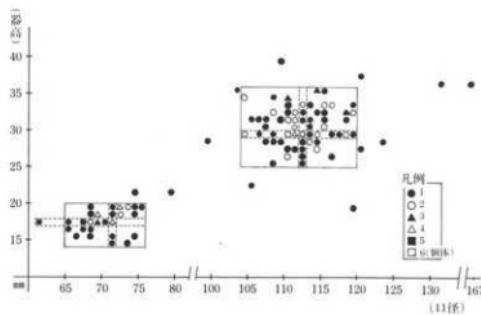
十三宝塚遺跡

想定されている佐波郡境町の十三宝塚遺跡のものがある。ここからは火舎の体部と獸脚・鉢・壺・壺など儀器を含めた数種類が出土しているが、これ以外の寺院跡と集落跡から出土したものは小形の薬壺、器種不明の小破片など単品での出土が多い。それらに比べて国分寺跡出土のものは、器種の多さは十三宝塚遺跡のものに並び、また製品の質の良さは群を抜いていると言える。さらに国分寺跡の東側の僧寺・尼寺中間地域で行われた調査で検出されたG区22号住居跡からも小形の壺の体部の破片が出土している。

国分寺が廃絶した後かっての寺域内は、南半部が墓域、北半部が居住域として使われた時期があったことが遺構の上で確認されたが、これに関連する土器類も多数出土している。それらは第25次調査区の金堂基壇上やその周辺の第18・29次調査区、そして塔跡南側の第30次調査区などで検出された墓壙に伴う土師質の皿、北半部の第20・26・33次調査区などで検出された井戸跡や土壤の埋土に含まれる土師質の皿、内耳鍋、擂鉢、さらに第20次調査区などの攪乱面に散布していたり攪乱層中にふくまれていた破片とに大別される。墓壙に伴う土師質の皿は、1基当たり1~6個と出土数にばらつきがみられたが、これは後世の攪乱により散逸したものがあるためであろう。これらとともに銅鏡が出土する場合があるが、その中で初鋲年の最も新しいものは1411年の永樂通宝であることから、これらの土器は15世紀前期頃に使われていたものもあることが分かる。また後述する石造物の紀年銘から宝篋印塔は14世紀後期には建てられており、15世紀代には多数の宝篋印塔・五輪塔が建立されたことが分かる。墓壙もこの時期に多く造られた可能性が強く、従ってそれに伴う土器類も15世紀を中心としたものと推定される。寺域北東隅の第33次調査区で検出されたSK103の埋土から完形品多数を含む多量の土師質の皿が出土した。これらは口径の大きさと高さによって、口径7cm前後・高さ1.8cm前後の小形のもの、口径11cm前後・高さ3cm前後の中形のもの、それ以上の大形のものとに区分することができる。それを計測可能な147個によって口径と器高の分布状況を表したのが下図である。こうした傾向が確認されたことから本書では、小形のものを小皿、中型のものを中皿、大型のものを大皿と呼称する。同様な皿は小形の円形土壤SK108や小形の方形柱穴の中からも少數であるが出土がみられた。これらには油煙の付着はみられず灯明皿として使われた痕跡がないこと、小形のも

中世

墓壙に伴う皿



SK103出土：土師質土器皿法量分布

のが多く実用性に乏しいこと、また墨書きもつものがあることから、墓葬などの祭儀あるいは供獻用具であった可能性が強い。

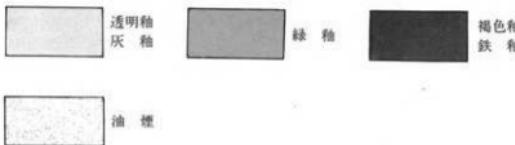
これ以外に中世の土器類には第20・26次調査区で検出されたS E 05・10・11・12・15などから出土した内耳鍋がある。これは埋土中に他の土器類、石造物、瓦片などと一緒に含まれていたもので、埋め戻しに際して土砂と一緒に投棄されたものであろう。

近世以降 近世以降の土器類としては、江戸時代から近年まで墓地として使われていた寺城北西隅の第21次調査区、金堂基壇上の第25次調査区から出土した陶器類がある。これらは墓に埋葬されたものが新たな墓を造るのに伴って掘り起されたか、墓前に供えられていたものが散乱したものであろう。出土位置はほぼこの2ヶ所に限られており、量も少ない。

以上が出土した土器類の概要である。本節ではこれに即して縄文時代・古墳時代・奈良～平安時代・中世の時代順に大別し、各時代の中は遺構あるいは調査区を単位として観察表と実測図を組み合わせる形式で掲載している。ただし記載の都合により土器類以外の石器や道具類を併せて掲載している部分がある。

凡例

- (1) 本書では平安時代～中世の土器類を土師器・須恵器・土師質土器に区分して呼称しているが、これは本遺跡近辺で先行して行われた大規模な発掘調査の報告書でこの呼び方が採用されているため、それに従ったものである。ただし本書では記述の中で、例えば土師質土器小皿と表記すべきところを、土師質小皿のように略称している場合がある。
- (2) 今回の調査では、土器類を伴う遺構の数が比較的少なく、またそれらの重複関係もほとんどみられなかった。そのため本遺跡から出土した資料によって、独自に器種ごとの編年を検討することはできなかった。これについては本史跡の近接地での調査の成果を参考にした。
- (3) 上の(1)・(2)については、財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『昭和53年度県営畠地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 清里・陣場遺跡』(1979年3月)、同『関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 上野国分僧寺・尼寺中間地域』(1987年2月)、同『同第20集 上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』(1988年3月)を参照されたい。
- (4) 本書では土器類は原則として縮尺して掲載している。ただし一部ではこれと異なる縮尺としている部分がある。縮尺率については各図の下部に明記してある。
- (5) 掲載した実測図で、釉が掛かっている部分および油煙が付着している部分は、次のスクリーントーンにより表示した。



1 繩文時代の土器と石器

表17 繩文時代土器（図120）

番号	種別 器形	出土 位置	遺存 率	法筋(口径×底径× 高さ)	胎土	焼成 色調	縦形・技法等の特徴	P L 番号
	繩文 土器 (勝 坂式 末期)	S J 28炉	29次	ほぼ 完形 8.6 × 23.6	15.0 × 粗。 石英 ・雪 母等 を多 く含 む。	良好 赤褐色	理燒炉の散設土器として 使用されたもの。輪積成 形後全体を撫でて調整 し、上部の裝飾を施した 後、R-Lの繩文を上→ 下へ施す。2次焼成 を受けて艶くなっている。	126 -1

表18 繩文時代石器（図121）

番号	種別 器形	出土 位置	遺存 率	法筋(口径×底径× 高さ)	重さ g	材質	縦形・技法等の特徴	P L 番号
①	打製 石斧	27次	12.2 × 4.5 × 1.5	105.	安山 岩			126 -2
②	磨製 石斧	27次 S J 20櫻 土 欠損	刃部 基 部を 2.6	11.1 × 5.3 × 2.6	277. 0	安山 岩		126 -3
③	打製 石鏨	27次 黒褐 色粘 質土	2.9 × 2.2 × 4.0	1.47	黒曜 石			126 -4

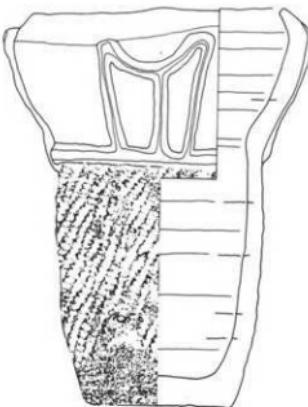


図120 繩文時代土器 SJ28出土 1/3

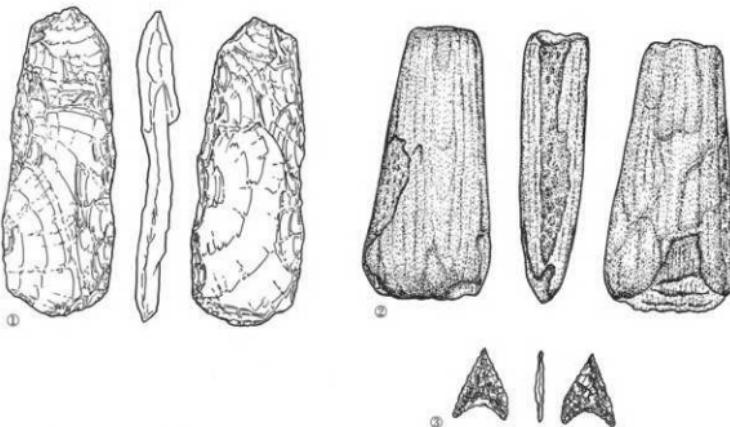


図121 繩文時代石器 1/2

2 古墳時代の土器類

S J 09出土土器 (位置・図41、遺構・図42、PL. 126)

調査次・位置: 第22次調査、S 46~53・E 34~41

出土状況: 全体に遺物の量は少ない。床面の中央部から竈手前にかけて土師器壊・甕片が散乱していた。竈焚口の袖は甕を倒立させて造っている。

表19 S J 09出土土器 (図122)

番号	種別 器形	出土位置	遺存量 部位	法 葉 (cm)	新 土 色	焼 成 色	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 器 壊	床面上	口縁の劣 欠失	10.7×—×3.7	やや密 細砂粒を 含む	やや硬。 化赤褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁は直し口唇部が外反し て開く。口縁～底部内面横ナデ。底部内面に蛇の目 状の凹みあり。	126-5
②	土 師 器 壊	覆土	劣弱	(9.9)×—×(4.0)	密。砂粒 少ない	やや硬。 化明橙色	丸底、手持ヘラ削り。口縁はわずかに外反しながら 開く。口縁と底部の境に棱を成す。口縁～底部内面 横ナデ。	126-6
③	土 師 器 壊	覆土	劣	(11.0)×—×3.9	密。黑色 粒子を含 む	良好。酸化 赤褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁は短かく外反しがら 開く。口縁と底部の境に棱を成す。口縁～底部内面 横ナデ。	126-7
④	土 師 器 壊	床面上	口縁劣欠 失	11.0×—×3.6	粗。細砂 粒多し	良好。酸化 褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁は短かく内湾しつ内傾。 口縁～内面横ナデ。底部外面黒斑あり。	
⑤	土 師 器 壊	覆土	口縁～底 部上半劣	(13.8)×—×(4. 8)	細砂粒を 含む	良好。酸化 褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁外側、底部との境の2ヶ 所に棱をつくり、次棱が遡る。口唇部はわずかに外 反し開く器形。口縁～底部内面横ナデ。	126-9
⑥	土 師 器 壊	覆土	劣	13.5×—×5.8	細砂粒を 含む	良好。酸化 赤褐色	深い丸底、手持ヘラ削り。口縁は短かく直立。口縁 ～内面横ナデ。	
⑦	土 師 器 甕	カマド	%。底部 欠失	23.1×—×(33.5)	粗。砂粒 黑色鉱物 多く含む	硬質。酸化 灰褐色	胴部の最大径が上半にある長胴甕。口縁は厚く、外 反しつつ大きく開く。胴部外面縦ヘラ削り。口縁部 横ナデ。胴部内面横ヘラナデ。	126-10

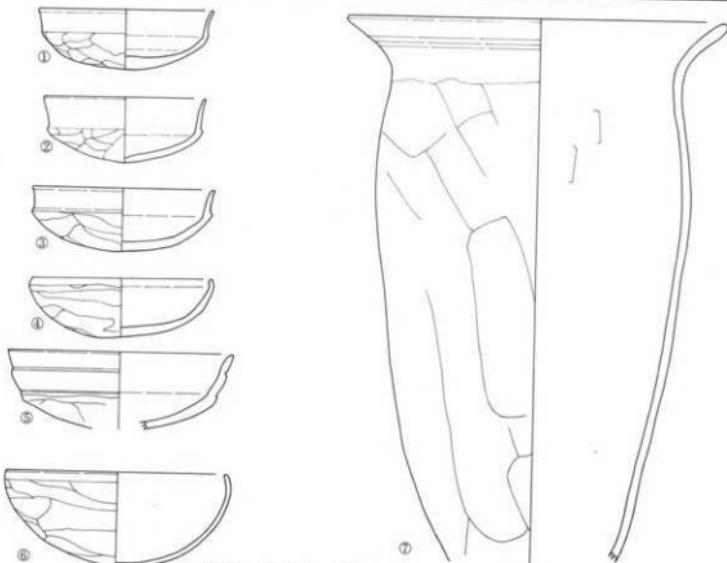


図122 SJ09出土土器 1/3

S J 10出土土器 (位置・図41、遺構・図43、PL. 127)

調査次・位置：第22次調査、S 53～57・E 28～34

出土状態：床面には竈手前などに土師器坏片などが少量散布しており、また拳～人頭大の細長い自然石が数個と砂岩切石片などが在った。後者は竈の構築材とみられる。覆土中からは復元が可能な土師器坏・甕が出士している。

表20 S J 10出土土器 (図123)

番号	種別 器形	出土位置	遺存部位	法量 (cm) 口徑×底径×高さ	胎土	焼成 色調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師器 坏	覆土	口縁～体 部のみ	(12.2) ×—×—	密。砂粒 を含む	良好。酸化 明褐色	口縁部は外反しながら開いて、端部を外に折り曲げ、 底部との境には棱をつくる。	
②	土師器 坏	覆土	ほぼ完形	10.0 ×—×3.2	砂粒を含 む	良好。酸化 丸底、手持ヘラ削り	丸底、手持ヘラ削り。口縁はやや内湾しつわづか に内傾。口縁部～内面ナデ。	127-1
③	土師器 坏	覆土	口縁～体 部少欠	(12.5) ×—×4.6	砂粒を含 む	良好。酸化 赤褐色	深い丸底、手持ヘラ削り。口縁はきわめて短く内傾。 口縁部～内面ナデ。	127-2
④	土師器 瓶	覆土	%	15.3 ×3.4 ×12.3	粗。砂粒 を含む	良好。酸化 赤褐色	胴部丸く、最大径が口縁ぎわにあり、底部がすぼま る。底部ヘラ削り後に丸い穴を穿孔。胴部斜めヘラ 削り、口縁と胴部内面横ナデ。胴部内面に縦ヘラナ デ。輪積模様が残る。外腹に黒斑あり。	127-3
⑤	土師器 甕	覆土	%	(21.0) ×—×26.8	密。砂粒 を少し含 む	良好。酸化 褐色	胴部が張り、上半に最大径を持つ。胴部外面縦ヘラ 削り。丸底。わずかに外反する「く」の字状口縁。 胴部内面下半に縦ヘラナデ。	127-4

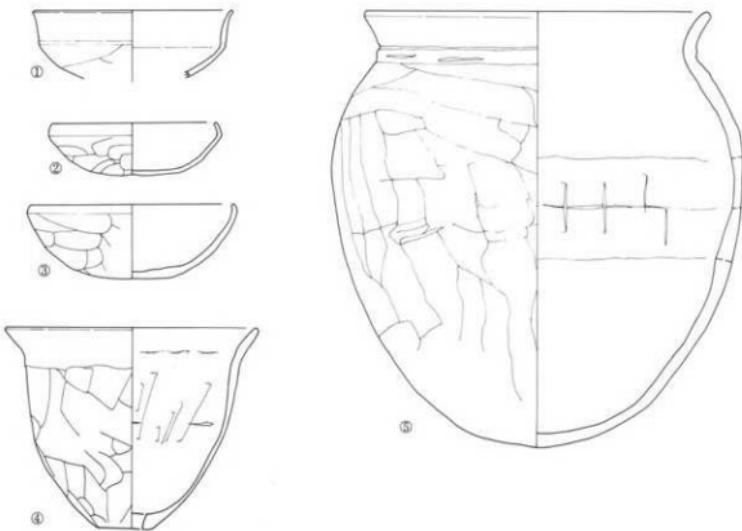


図123 SJ 10出土土器 1/3

第VII章 出土した遺物

S J 11出土土器 (位置・図41、遺構・図44、PL. 127)

調査次・位置：第22次調査、S 38～45・E 53～63

出土状態：竈の南側には長甕1個が立つようにして在り、その付近の床面には甕の破片が散乱していた。南壁・西壁の立ち上がりに接する床面上に土師器壺の完形品・須恵器提瓶の破片などが在り、またこのやや内側には、長さ約15cmの細長い自然石が4～6個を単位として3ヶ所に分かれて在るが確認された。

表21 S J 11出土土器 (図124)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法量 (cm) 口径×底径×器高	胎土	焼成 色調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師器 壺	覆土	少弱	9.8×—×3.8	密。わずかに砂粒	良好。酸化 赤褐色	丸底、手持へラ削り。口縁部はゆるく外反しながら開く。体部内面へ口縁ナデ。口縁と底部の境は棱を成す。	
②	土師器 壺	床面上	完形	11.5×—×4.0	密	硬質。酸化 赤褐色	口唇部外反。底部に黒斑あり。他は①と同じ。	
③	土師器 手捏ね土器	覆土		(8.2)×(3.3)×3.9	粗。砂粒 小砾を含む	軟質。酸化 灰褐色	体部丸く、ぶ厚い底部から薄くなりながら立ち上がる。体部内面へ口縁部横ナデ。平底。底部接合面は粗い。	
④	須恵器 壺・蓋	覆土	少	(12.0)×—×3.7	密	良好。還元 灰白色	丸底、回転へラ削り。棱は沈線状にあらわされ、口縁はやや内凹しながら立ち上がる。底部内面不正に凹む。	127-5
⑤	須恵器 提瓶	床面上	胴部のみ 少弱	最大径(21.3)	密。白色 鉱物を含む	硬質。還元 暗灰色	ロクロ整形。回転によるハケ目調整。横に穿孔し、元々の穴を黏土板でふさいで側に頸部を接合したと思われる。胴部上半と底部内面に自然降灰あり。	
⑥	土師器 甕	床面上	少。底部 欠失	(23.9)×—×(37.5)	粗。砂粒 多し	硬。酸化 褐色	胴部の最大径が上半にある長甕。口縁は外反しながら大きく開く。胴部外面へラ削り、口縁横ナデ。胴部内面へラナデ。	127-6

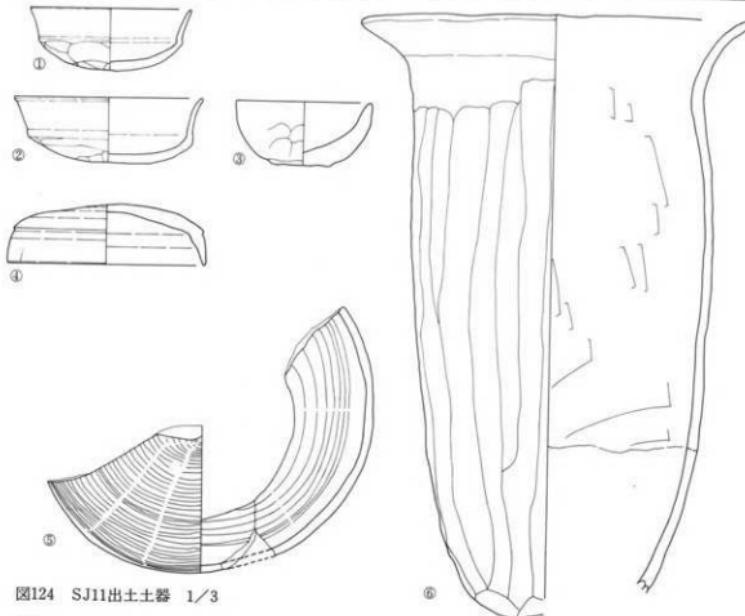


図124 SJ 11出土土器 1/3

S J 41出土土器（位置・図78、遺構・図79、PL. 127）

調査次・位置：第31次調査、S 116～121・E 8～12

出土状態：寺域中央部の南外側に在り、南東隅は削平により壊されている。床面全体、特に柱穴の内側に土師器壺と甕の破片が多数散布していた。竈焚口の袖は土師器甕と自然石を芯材としており、この近くからは甕の破片が出土している。

表22 S J 41出土土器（図125）

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法 量 (cm) 口径×底径×器高	胎 土	焼成 色 調	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 器 壺	覆土	約2%	(10.1) ×—×—	密	やや軟。酸化赤褐色	平底気味の丸底、手持へラ削り。口縁部と底部の境に棱をなす。口縁はやや内傾しながら直立。口縁～内面ナデ。	
②	土 師 器 壺	床面上	約2%	(12.3) ×—×4.6	密	軟質。酸化淡褐色 内面黒色	丸底、手持へラ削り。口縁部と底部の境に棱を成す。口縁は外反しつつ開く。口縁～内面ナデ。底部外面に板目状圧痕あり。	127-7
③	土 師 器 壺	覆土	約5%	11.1 ×—×3.6	やや粗細 砂粒多し	良好。酸化褐色	丸底、手持へラ削り。体部～口縁は内湾しながら直立。内面～口縁ナデ。内面に油煙付着。	127-8
④	土 師 器 壺	床面上	口 縁 2% 欠・胴 部 上半2%	14.2 ×—×—	粗。砂粒 多し	やや軟。酸化褐色	胴部中央に最大径を持つ丸い胴。頸部がすぼまり、口縁は外反して開く。頸部と胴部の境に段を作り、以上を横ナデ。胴部外面は斜めへラ削り。胴部内面は板目ナデ。	127-10
⑤	土 師 器 甕	床面上	口 縁 2% ・胴 部 以 下2%	20.8 ×5.1 ×35.2	粗。砂粒 極めて多 し	良好。酸化赤褐色	胴部上方に最大径を持つ、やや張った胴部。わずかに外反しつつ開く口縁を持つ。輪積成形。内面及び口縁は横ナデ。胴部外面ははっきりと輪積痕を残す。底部に墨状圧痕あり。	
⑥	土 師 器 甕	床面上	底部完形 ・口 縁 2%	(19.8) ×7.6 ×11. 8	大きい白 色粒子を 含	良好。酸化 褐色	胴部はわずかに内湾しながら開き、口縁部は直線的。胴部斜めへラ削り。口縁～内面ナデ。底部外面はへラ削り後焼成前に内面から刺突による穿孔。	127-9

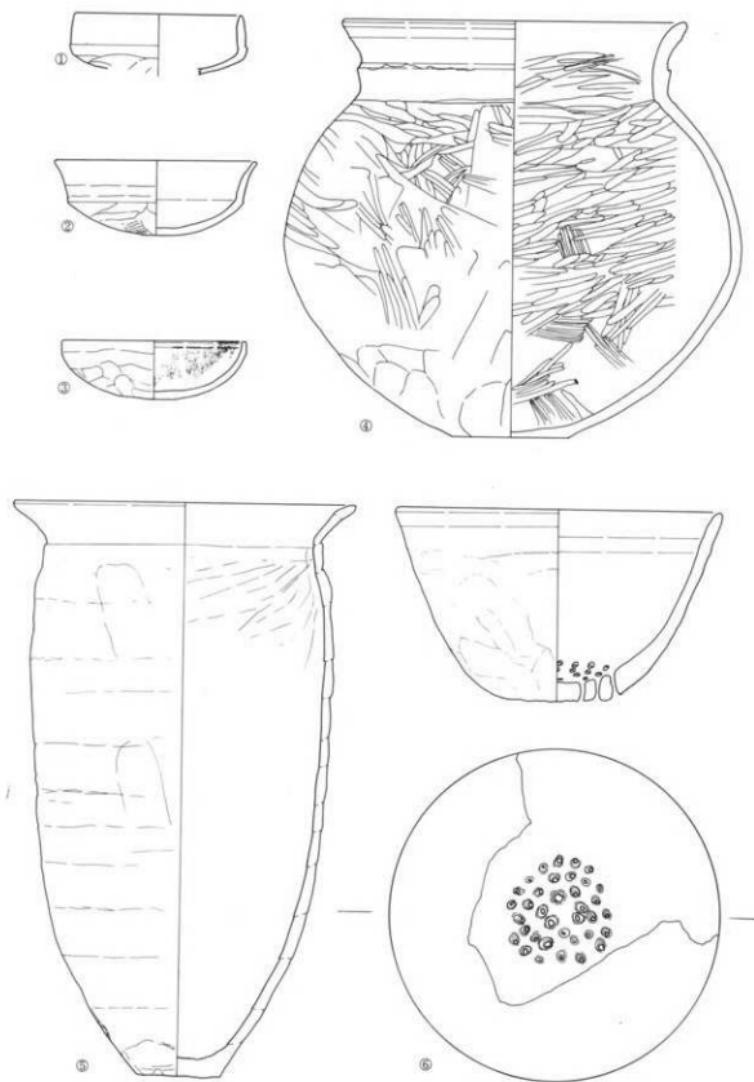


図125 SJ41出土土器 1/3

3 奈良～平安時代の土器類

奈良三彩陶 (PL. 4)

調査次・位置：第5・9トレンチ、第19次調査。金堂跡・南辺築垣跡、塔跡付近から出土している。

出土状態：図②の薬壺の破片がいずれも塔跡周辺から出土した以外は、表土か擾乱層から散発的に出土したもので、遺構に伴ってまとまった状態で在るものは認められなかった。

図に掲げたもの以外に、小形薬壺片が2個、高台片が1個のほか器形不明の小片が数個ある。奈良三彩陶は、十三宝塚遺跡（佐波郡境町）・上植木廃寺跡（伊勢崎市）・芳賀遺跡（前橋市）などからも出土しており、また上野国一宮である貫前神社（富岡市）に伝世品の小形薬壺があるのが知られている。この図126-②に掲げた薬壺は器形が大型であり、胎土の焼き締めが固く、三彩釉の発色も濃厚で、この種のものとしては群馬県内で最初の出土例である。

表23 奈良三彩陶 (図126)

番号	種別 器形	出土位置	遺存部位	法量 (cm) 口径×底径×器高	胎土	焼成色調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	奈良三彩 壺	5トレンチ	底部、体部、口唇 の4破片 が残る。	(26.4) × (10.2) × (8.0)	やや黄味 を帯びた 白色土 で、肌理 は細い。	良好。三彩 の発色は鮮 やか。	外表面には高台際まで緑・白・褐釉が流しきにかけら れている。内面は底部近くまで緑・白・褐釉がかけら れ、底部と高台内面には透明釉がかけられている。 各部の破片は直接接合しないが、同一個体と判断さ れる。推定復元すると口縁部が外湾し、口端部が少 し折り返されて内面に段がつく壺であるとみられ る。	4-1
②	奈良三彩 薬壺	19次 表土	底部、胴部、肩部 の5破片 が残る。	最大径 (21.3) × (13.2) × (18.0)	灰青色を 帯びた緻 密な土。	良好。焼成 温度は高く 須恵質。三 彩の発色は 濃めで鮮 やか。	外表面には高台際まで緑・白・褐釉が流しきにかけら れている。高台内面には淡い緑釉が施されている。 器内面には水洗き痕が残り、流し緑釉がかけられて いるが、上辺部は釉が切れる。口縁部を欠失するが、 推定復元すると大型の薬壺であるとみられる。	4-1

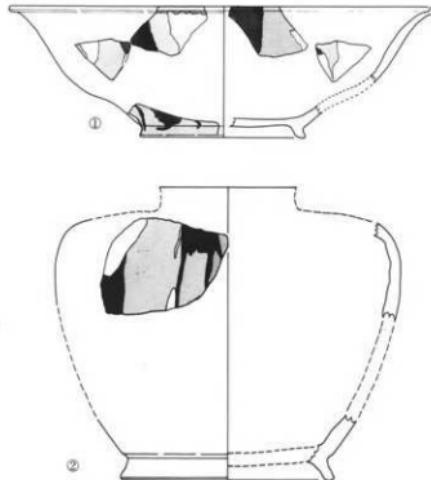


図126 奈良三彩陶 1/3

第VII章 出土した遺物

S J 25 (位置・図32、構造・図35、PL. 128)

調査次・位置：第29次調査、S 10～16・E 18～24

出土状態：竈の焚口内部から土師器壺の完形品が1個出土した以外は、その周辺の床面上に土師器壺片が少量散布していたのみである。これに直接伴うものであるかには疑問があるが、南側壁中央部で土師器壺が1個正立して据えられるようにしてあった。口縁部は破損が著しいが、遺存状況は良好でその体部外面には倒立した状態で「戸下」の墨書きがあった。覆土中には瓦の混入は見られないが、S J 25を切って造られた墓壙に伴う土師質の皿が入っていた。

表24 S J 25出土土器 (図127)

番号	種別 器 形	出土位置	遺存率 部 位	法 量 (cm) 口径×底径×器高	胎 土	焼 成 色 調	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 器 壺	カマド内	完形	10.6×—×3.1	砂粒を含む	良好。酸化 橙色	丸底、手持ヘラ削り。口縁はわずかに外反しつつ直立。口縁～内面横ナデ。	128-1
②	土 師 器 壺 片	覆土	3/6	(11.0)×—×(3. 1)	黒色鉱物 多し	やや硬 化暗赤褐色	①とほぼ同じ。やや浅い。	
③	土 師 器 壺 片	床面上	3/6	10.8×—×3.8	黒色鉱物 砂粒を含む	良好。酸化 赤褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁は短かく内傾。内面～口 縁部横ナデ。	128-2
④	土 師 器 壺 片	覆土	小破片	(11.4)×—×(3. 0)	細砂粒を 含む	硬質。酸化 赤褐色	丸底、手持ヘラ削り後磨き。口縁は短かくわざかに 外反。口縁部は横ナデ後、内面に沈線が巡る。内面 は全面に密な放射状暗文。	
⑤	土 師 器 壺 片	覆土	小破片	(9.5)×—×(5.5)	細砂粒を 含む	良好。酸化 赤褐色	丸底、体部は丸く張り、口縁直立。底・体部外面は手 持ヘラ削り。口縁～内面横ナデ。	
⑥	土 師 器 壺 壺	覆土	1/6	(23.0)×(5.2)× (29.8)	砂粒小槽 を含む	良好。酸化 赤褐色	胴部上半に最大径を持つ丸く張った胴部、上半は斜 面下半は垂直のヘラ削りによる調整。口縁は外反し つつ開く。調整は横ナデ。胴部内面下半に輪模痕。 体部外面に墨書き「戸下」。	128-3

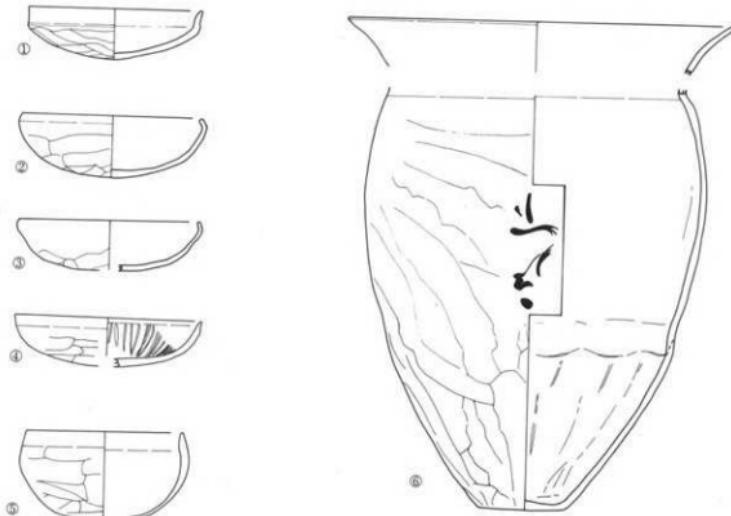


図127 SJ25出土土器 1/3

S J 45・16・33 (位置・図51・78、遺構・図53・58・80、P L. 128)

調査次・位置: S J 45・第31次調査、S 150~154・E 7~10 S J 16・第27次調査、S 70~73・W42~44

S J 33・第30次調査、S 83~86・W49~52

表25 S J 45・16・33出土土器(図128)

番号	種別 器形	出土位置 部 位	遺存率 口徑の割 り	法 量(cm) 口徑×底径×器高	胎 土	燒 成 色 調	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 器 坏	S J 45床 面上	口縁の約 欠失	10.8×—×3.6	粗。多孔 質。	やや軟。酸 化明褐色	浅い丸底、手持ヘラ削り。口縁部は外反しつつ開く。 底部内面～口縁部ナゲ。底部外面と口縁部の境に棱 を作る。	128-5
②	土 師 器 坏	S J 45床 面上	口縁の約 欠失	12.3×—×3.6	粗。	軟質。酸化 赤褐色	①に同じ。ゆがみ、焼成むらあり。	
③	土 師 器 坏	S J 45覆 土	口縁の一 部欠失	11.9×—×3.7	粗。	やや軟。酸 化明褐色	①に同じ。やや口縁が立つ。	128-6
④	土 師 器 坏	S J 45床 面上	口縁の一 部欠失	11.7×—×3.8	赤色黏物 を含む	やや軟。酸 化。外表面 褐色内面暗 灰褐色	①とほぼ同じ。やや口縁が厚い。	128-7
⑤	土 師 器 坏	S J 16床 面上	完形	11.1×—×3.6	細砂粒を 含む	細砂粒良好。 酸化 明褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁はわずかに外反しつつ開 き底部との境に棱をつくる。口縁・内面ナゲ。見込み 部に焼成後「X」の記号を除刻。	128-8
⑥	土 師 器 坏	S J 16 床面上		10.2×—×3.4	やや粗。 細砂粒含 む	良好。酸化 明褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁は短かく内傾。口縁～体 部内面横ナゲ。	128-9
⑦	土 師 器 坏	S J 33 床面上	口縁欠 け	9.1×—×3.7	砂粒わざ かに含む	良好。酸化 褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁わずかに内傾。口縁～体 部内面横ナゲ。	
⑧	土 師 器 坏	S J 33 床面上	口縁欠 け	(11.2)×—×3.2	密。砂粒 わざかに 含む	良好。酸化 暗赤褐色	やや浅手の丸底、手持ヘラ削り。口縁わずかに内傾。 口縁～体部内面横ナゲ。	128-10
⑨	土 師 器 坏	S J 33 床面上	口縁一部 欠失	10.6×—×3.5	粗。砂粒 含む	やや軟。酸 化赤褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁はわずかに内傾。口縁～体 部内面は横ナゲ。	

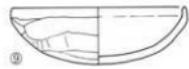
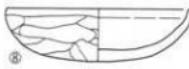
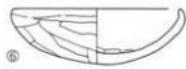
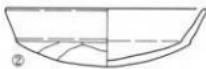
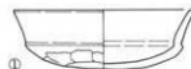


図128 SJ45・16・33出土土器 1/3 ①~④: SJ45 ⑤~⑥: SJ16 ⑦~⑨: SJ33

第VII章 出土した遺物

出土状態：S J 45では床面に土師器壊のほぼ完形品と破片の散布があり、覆土中にも土師器壊の破片が少量混じっていた。

S J 16では竈内部とその近くの床面に土師器壊の完形品が2個在ったほかは、竈内部から土師器壊の小片が少量出土したのみである。

S J 33では竈付近の床面に土師器壊のほぼ完形品が2個在ったほかは、覆土中から土師器の小片が少量出土したのみである。

S J 17 (位置・図51、遺構・図54、PL. 129)

調査次・位置：第27次調査、S 64～68・W57～60

出土状態：塔跡の南側にあり、覆土の一部がS B 12の柱穴に切られている。竈焚口の芯材として土師器長盞2個が使われており、内部にも土師器小片が多数在った。これらの小片は原形復元は困難である。また南側壁近くの床面上には土師器の小型壘が割れた状態であり、北側壁近くには土師器小片とともに鉄製鎌1個が在った。覆土中にも土師器壊片が含まれていた。

表26 S J 17出土土器 (図129)

番号	種別 器形	出土位置	遺存部位	法量 (cm) 口径×底径×高さ	胎土 砂粒含む	焼成色 赤褐色	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師器 壊	覆土	外縁	(10.5) × - × 3.9	やや粗。 砂粒含む	良好。酸化 丸底、手持ヘラ削り。口縁部は短く立ち上がる。口 縁部へ底部内面ナデ。外間に黒斑あり。		129-1
②	土師器 壊	床面上	外縁	(12.5) × - × 3.7	粗。砂粒 多し	良好。酸化 浅目の丸底。手持ヘラ削り。口縁部極めて短かく、 口縁へ底部内面ナデ。		
③	土師器 壊	覆土	内盤	13.9 × - × 4.3	砂粒含む	良好。酸化 赤褐色	丸底。手持ヘラ削り。口縁部は短かく、端部は内側。 口縁へ内面ナデ。	129-2
④	土師器 壊 (鉢)	覆土	内盤	(17.8) × - × (5, 9)	砂粒黒色 鈍土を含む	硬質。酸化 暗赤褐色	丸底。手持ヘラ削り。口縁は短かく内傾。大ぶりの 鉢。口縁へ内面ナデ。	129-3
⑤	須恵器 壊	覆土	外縁	10.0 × 7.4 × 3.4	密。砂粒 わざか含む	硬質。還元 灰白色	やや丸底気味の平底。右回転ヘラ削り。底部内面 クロ口強し。	129-4
⑥	土師器 小型壘	床面上	外縁	(14.2) × 6.4 × 10. 9	やや粗	良好。酸化 明褐色	胴はゆるやかに張り、外反する口縁へ聞く器形。胴 部上半縁ヘラ削り。口縁横ナデ。胴部内面縁へナ デあり。内面下半に輪模痕のこる。底部外間に葉 脈痕。	129-5
⑦	土師器 足高台 (壇)	床面上	高台のみ	- × (13.8) × 3.8 (高台高)	粗。砂粒 多し	硬質。中性 灰黄色	外反しながら強く横に張る足高台。貼付部はハケ 目状に粘土を荒らして、ロクロナデを施す。端部断 面四角形で沈線が添る。混入品の可能あり。	
⑧	土師器 カマド 壘	底部欠失	ほぼ完形 (残存高)	20.3 × - × 33.0	粗。細砂 粒多し	良好。酸化 明褐色	胴部はゆるやかに張り、最大径が胴部上半にあらん長 胴型。口縁は直線的に大きく述べ開き、横ナデ。胴部斜 めヘラ削り、胴部内面縁へナデ。輪模痕残る。	129-6
⑨	土師器 壘	カマド	ほぼ完形	21.5 × 3.6 × 35.2	細砂粒を 含む	良好。酸化 明褐色	⑥に同じ。⑧よりやや口縁が外反。	129-7

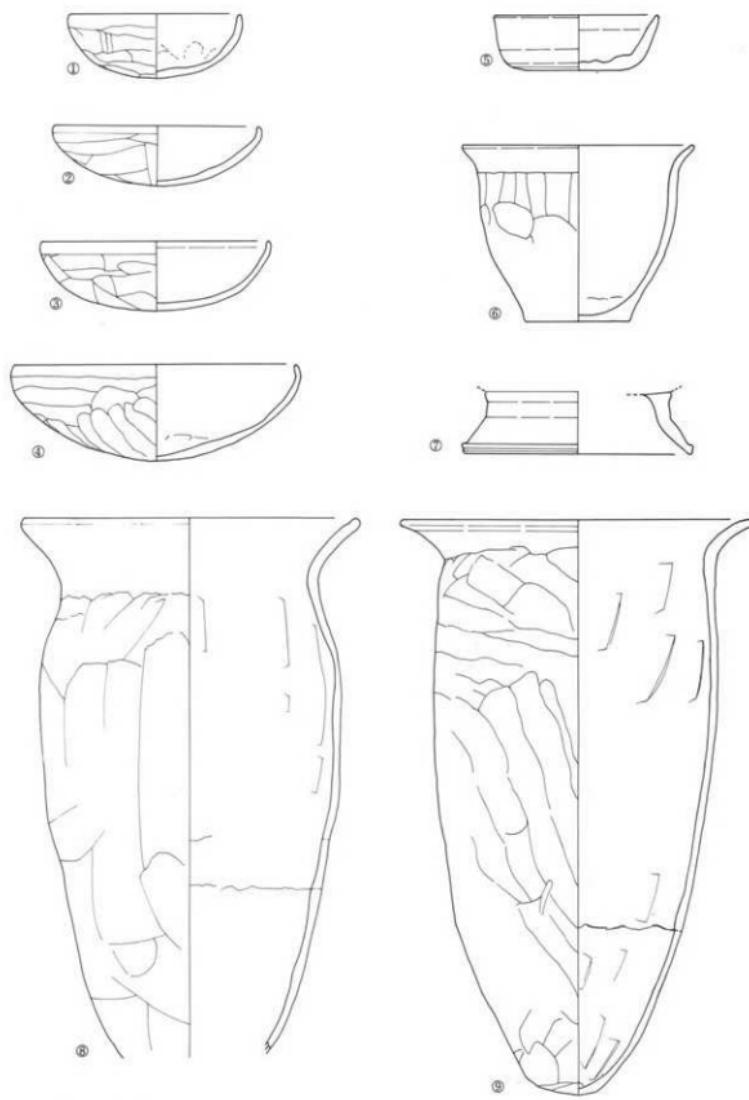


図129 SJ17出土土器 1/3

第VII章 出土した遺物

S J 24 (位置・図51、遺構・図55、PL. 129)

調査次・位置：第27次調査、S 67～70・W47～51

出土状態：塔跡の南側にあり、竈と覆土の一部がS B12の柱穴に切られている。また耕作溝による擾乱もみられる。全体に遺物の出土量は少なく、床面上に土師器片が少量と疊が散在するのみである。また覆土中にも土師器と須恵器の小片が少量含まれるのみである。ただ貼床の用土中には繩文時代中期の土器片、土師器塊の大型片が含まれていた。

表27 S J 24出土土器 (図130)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法 量 (cm) 口徑×底径×器高	胎 土	燒 成 色 調	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 器 坏	覆土	%。口縁 一部欠	9.7×—×3.3	細砂粒や や多し	やや良。酸 化明褐色	わずかに内傾気味の口縁。体部内面・口縁部横ナデ。 底部内面不整方向ナデ。体部・底部外縁へラ削り。	129-8
②	土 師 器 坏	床面上	%。口縁 ～底部	13.5×—×3.9	細砂粒を 含む	やや良。酸 化明褐色	ゆるやかな体部、口縁は立ち上がる。体部内面・口縁 部横ナデ。体部・底部外縁へラ削り。	129-9
③	土 師 器 塊	貼床中	口縁～体 部のみ%	10.2×—×—	細砂粒を 含む	やや良。酸 化明褐色	体部～口縁は内湾しながら内傾。体部内面口縁部は 横ナデ、体部外縁は横へラ削り。	129-10
④	土 師 器 塊	覆土	口縁～体 部%	13.0×—×—	砂粒小礫 を含む	やや良。酸 化明褐色	口縁部は弱く外反。体部はゆるやかに張る。口縁部 は横ナデ。体部外縁は横へラ削り。内部内面は不整 方向ナデ。	129-11

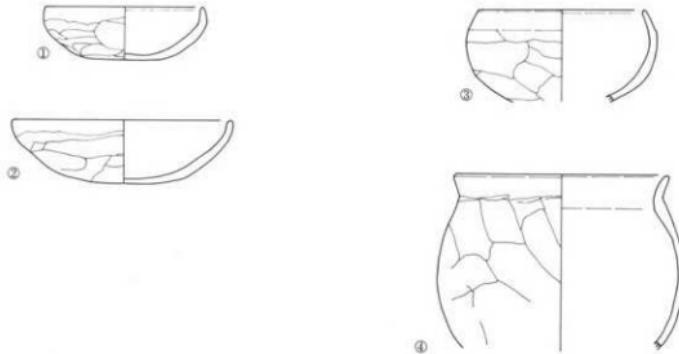


図130 SJ24出土土器 1/3

S J 30 (位置・図51、遺構・図57、PL. 130)

調査次・位置：第30次調査、S 58～64・W61～67

出土状態：塔跡の南西側にあるやや大型の住居跡。竈周辺には土師器壊の破片が散在しており、その中には完形品1個が在った。竈内部、床面直上にはほとんど遺物の散布が見られず、また覆土中からの出土も僅かであった。

S J 06・08・13 (位置・図10・19、遺構・図30、PL. 130)

調査次・位置：S J 06・第5トレンチ、N19～25・E122～128 S J 08・第18次調査、N17～20・W20～26

S J 13・第24次調査、S 86～89・W67～70

出土状態：S J 06では竈の焚口と煙道の構築材として大型の瓦片が使われており、この上部から坩堝の破片が出土した。また床面からは他に三角形の楔形石製品、多数の瓦片、土師器壊片などが出土している。

表28 S J 30出土土器 (図131)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部 位	法 量 (cm) 口径×底径×高さ	胎 土	焼 成 色	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 器 壊	床面上	口縁部一 部欠	10.0×—×3.3	砂粒多少 含む	良好。醸化 赤褐色	丸底、手持ヘラ削り。わずかに内傾する短かい口縁。 体部内面に横ナデ。	130-1
②	土 師 器 壊	床面上	口縁～体 部のみ%	(11.0) ×—×(2. 8)	砂粒多し	やや軟。醸 化赤褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁は低い。体部内面と口縁 にナデ。	
③	土 師 器 壊	覆土	口縁～体 部のみ%	(12.9) ×—×4.2	砂粒を少 し含む	良好。醸化 赤褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁外間にへこみあり。口縁 ～体部内面にナデ。	130-2
④	土 師 器 壊	床面上	%	16.9×—×6.1	砂粒を少 し含む	良好。醸化 赤褐色	丸底、手持ヘラ削り。口縁は内傾。口縁～体部内面 に横ナデ。	130-3
⑤	土 師 器 壊	覆土	口縁～体 部のみ%	(23.2) ×—×— (最大径28.0)	砂粒多し 粗	やや軟。醸 化灰褐色	胴が張り、最大径が体部の上半よりにある。「く」の 字状口縁。口唇部は外反。表面が荒れ、調整は不詳。 口縁横ナデ。体部内面にヘラ押し痕あり。	

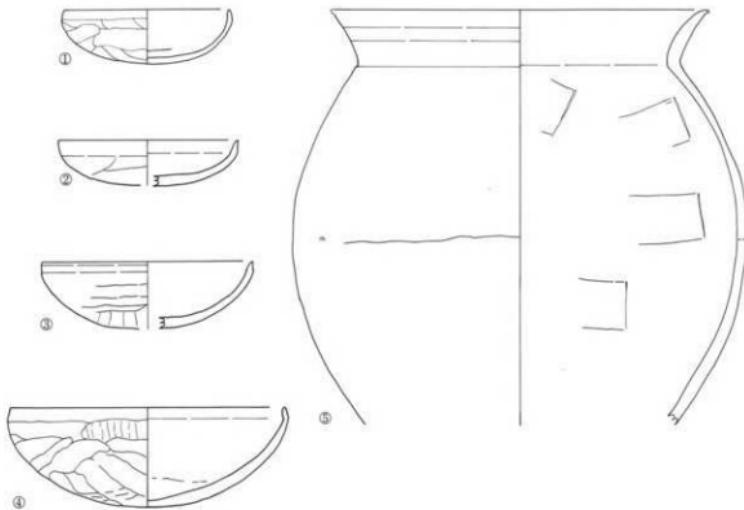


図131 S J 30出土土器 1/3

第Ⅷ章 出土した遺物

S J 08では竈焚口に丸瓦を使用しており、この周辺から瓦片・土師器壊・須恵器壊・鉄製釘などが出土している。

S J 13では南東隅の床面に平瓦の完形品が2個並べて置かれており、竈周辺には須恵器壊・大型瓦片・径約30cmの偏平な玉石が在った。

表29 S J 06・08・13出土土器類(図132)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部 位	法 葉(cm) 口徑×底径×器高	胎 土	燒 成 色	器 形・技 法 等 の 特 微	PL番号
①	土 師 器 壊	S J 06 床面上	底部の一 部と口縁 の一部欠	11.8×8.3×3.9	やや粗。 黒色粘物 含む	良好。酸化 赤褐色	やや底気味の丸底、手持ヘラ削り。口縁や内溝 口縁部へ内面は横ナデ。口縁に一部黒斑あり。	130-4
②	土 師 器 壊	S J 06 口縁～体 部のみ欠		(-)×-×-	粗。砂粒 を大量に 含む。	硬質。酸化 明褐色～暗 灰色(2次 的火熱のた め元の色は 不明)	厚手の内溝する体部を持つ手捏ねの土器。外面に指 押え痕多し。内面～口縁に歯溝が多量に付着。	
③	土 師 器 壊	S J 08 床面上	完形	11.6×8.6×3.3	砂粒含む	硬質。酸化 暗褐色	ほとんど平底の器形。体部は直線的で、下半および 底部は手持ヘラ削り。底部と体部ははっきりと区別 される。体部内外面に油煙状炭化物付着。内面にご くうすい暗文あり。	130-6
④	須 恵 器 壊	S J 08 床面上	完形	11.5×6.4×3.6	砂粒を含 む	良好。還元 灰白色	体部はほぼ直線的。やや深目の壊。ロクロ右回転糸 切無調整。やや焼きぶくれが見られる。	130-7
⑤	須 恵 器 壊	S J 08 床面上	底部%・ 口縁% 4.6	(10.9)×(7.6)× 4.6	粗。黑色 粒子多し	硬質。還元 暗灰色	体部は直線的に立ち上がり、深い。薄手で比較的の りがよく、回転ヘラ切り(ロクロ回転方向不詳)	130-8
⑥	須 恵 器 壊	S J 08 床面上	殆倒	(16.3)×-×-	やや粗。 細砂粒を わずか	やや硬。還 元灰色	ロクロ整形、口縁端部を下方に折り曲げ、受け部を つくる。体部上半回転ヘラ削り。内面中央近くに湿 台痕あり。端部附近が色調が違う(暗灰色)のは重 燒きか。	130-8
⑦	須 恵 器 壊	S J 13 床面上	ほぼ完形 口縁%欠	12.5×5.9×3.3	やや粗。 細砂粒を 含む	軟質。還元 明灰褐色、 一部灰色	体部はやや張り、口縁は厚手で外反しつつ開く。ロ クロ右回転糸切無調整。うすい黒斑あり。数ヶ所に 油煙あり。	130-9
⑧	須 恵 器 壊	S J 13 床面上	ほぼ完形 口縁%欠	12.8×6.0×3.3	細砂粒を 含む	良好。中性 器形・調整は⑦に同じ。内面の広い範囲に油煙が多量 に付着。	130-10	

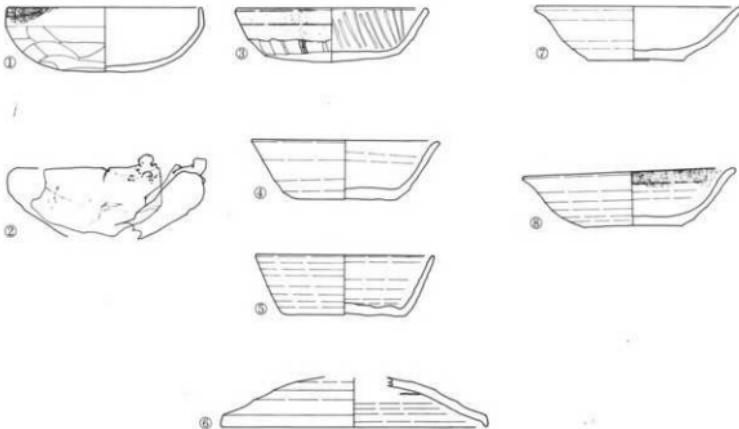


図132 SJ06・08・13出土土器類①・②：SJ06 ③～⑥：SJ08 ⑦・⑧：SJ13 1/3

SJ 22 (位置・図51、遺構・図60、PL. 131)

調査次・位置：第27次調査、S 89～92・W41～44

出土状態：多数の土器の出土があった。竈付近に土師質壺・須恵器壺の完形品を含む土器が多数在り、その手前の床面上には羽釜の破片が散布していた。西側壁近くの床面上には土師質壺の完形品と須恵器壺の破片が、また北側壁近くにも土師質壺の完形品が在った。覆土中には土師質壺片と瓦片が含まれていた。

表30 SJ 22出土土器 (図133)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法量 (cm) 口径×底径×高さ	胎土	焼成 色	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師質 壺	床面上	口縁凹欠 失	9.9×4.8×3.2	細砂粒を 含む	良好。酸化 暗褐色	体部は直線的に開き、口唇部わずかに外反しつつ開く。ロクロ右回転糸切無調整。焼きゆがみ、焼きムラあり。	131-1
②	土師質 壺	床面上	完形	9.7×5.3×3.6	わずかに 黒色鉱物 を含む	良好。酸化 明褐色	体部下半は丸く、口縁やや外反。口徑に比して体部の立ち上がり深い。ロクロ右回転無調整。外面に板状工具による深い刺突痕あり。	131-2
③	須恵器 壺	床面上	完形	10.9×5.9×4.1	白色鉱物 を多く含む	良好。還元 上半灰白色 下半暗灰色	体部丸く内側し、口唇部外反。ロクロ目外側ともに強い。底部外面外周にヘラ状工具による荒らしたあとがある。体部下半以下に黒斑。	131-3
④	土師質 壺	床面上	口縁凹欠 失	10.5×6.1×4.4	やや粗。 細砂粒を 含む	やや軟。酸 化橙色	体部は直線的に開く、口縁部は横ナデによりやや外反。体部はほとんどロクロ目見えず。ロクロ回転糸切ナデ消し、断面やつぶれた万形の付高台。	131-4
⑤	土師質 壺	床面上	高台部欠 ほぼ完形 (高台貼付部まで)	14.3×(6.6)×(4. 7)(高台貼付部まで)	粗。砂粒 多し	やや軟。酸 化淡褐色	体部下半は丸く、口縁は外反しつつ開く。ロクロ回転糸切痕ナデ調整。付高台。貼付部は剥離。	131-5
⑥	土師質 皿	覆土	ほぼ完形	11.2×5.3×2.5	粗。細砂 粒非常に 多し	やや軟。酸 化淡灰褐色	体部～口縁は直線的。底部は厚く、台状。ロクロ右回転糸切無調整。黒斑あり。	131-6
⑦	軟質陶器 鉢	覆土	底部ほぼ 完形。体 部下半丸	—×17.9×—	粗。細砂 粒多し	良好。還元 暗灰色	体部は直線的。平底。輪積。平行叩き。外面下端へテ割り、底部内面、回転カキ目。底部外面調整不明。須恵器系陶器。	131-7

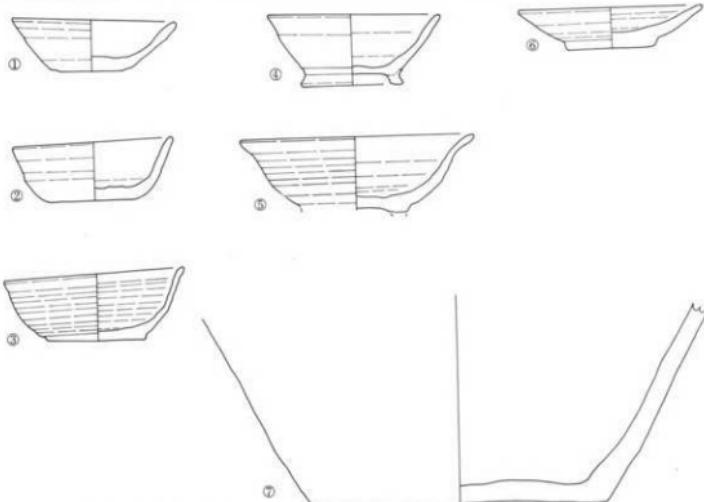


図133 SJ 22出土土器 1/3

第VII章 出土した遺物

S J 21 (位置・図51、遺構・図60、PL. 131)

調査次・位置：第27次調査、S 88～93・W36～39

出土状態：S J 21の東側に並んであり、共に S F01の基部盛土を切って造られている。竈は最初に北側壁に造られていたが、その後で東側壁に付け替えられている。埋め戻された北竈の内部には、完形品を含む多数の土師質壺と土師器壺の破片が在った。これに対して新しい東竈は大型の瓦片を使って造られているが、この付近の床面には土師器壺の破片が少量散布しているのみであった。また南半部の床面近くには土師質壺、土師器壺片の散布がみられた。東竈南側のS F01基部の残部上面には、凹面に「大」と刻書された平瓦の完形品が凹面を上にして置かれるようにして在った。

表31 S J 21出土土器 (図134)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法量 (cm) 口径×底径×器高	胎 土	焼成 色 調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師器壺 小皿	覆土	底部約～ 口縁約0	(8.5) × (4.8) × 2. 0	砂粒多し やや粗	やや軟。中 性淡灰褐色	体部～口縁わずかに外反。ロクロ右回転糸切無調整。	
②	土師質壺 小皿	床面上	ほぼ完形	8.7 × 4.8 × 1.7	白・黒色 動物を含む	やや軟。中 性淡灰褐色	体部ほぼ直線的に開き、口縁部わずかに外反。さわ めて浅い。ロクロ右回転糸切無調整。底部に剥離痕 あり。	131-8
③	土師質壺 小皿	床面上	約	(8.2) × 5.2 × 1.7	小難砂粒 を含む	良好。醸化 赤褐色	体部～口縁は直線的に浅く開く。ロクロ右回転糸切無調整。底部は直線的に開く。ロクロ右回転糸切無調整。	
④	須恵器 壊	覆土	約。口縁 一部欠	15.6 × 6.6 × 4.8	白・黒色 動物を含む	やや軟。中 性淡灰褐色	体部～口縁は直線的に開く。ロクロ右回転糸切無調整。底部は直線的に開く。ロクロ右回転糸切無調整。	
⑤	須恵器 壊	覆土	約。口縁 はわずか 5.2	(14.6) × (7.1) × 5.2	砂粒多し やや粗	軟質。中性 淡灰色	体部～口縁は直線的に開く。ロクロ右回転糸切無調整。	131-9
⑥	須恵器 壊	床面上	約弱	(16.6) × (7.2) × 5.3	白・黒色 動物を含む	軟質。還元 暗灰褐色	体部～口縁は直線的に開く。ロクロ右回転糸切無調整。	131-10
⑦	須恵器 壊	床面上	約。底部 残存	17.2 × 7.0 × 5.4	黒色動物 を少し含む	やや軟。中 性灰褐色	体部は直線的に開く。口縁部わずかに外反。ロクロ 右回転糸切無調整。	
⑧	土師質壺 壊	覆土	約	(14.2) × 5.9 × 4.1	黒色動物 少し含む	やや軟。醸 化明褐色	体部は直線的。口縁部外反。ロクロ右回転糸切無調整。	
⑨	土師質壺 壊	床面上	底部約～ 口縁約	(15.2) × 6.2 × 4.4	砂粒を多 く含む	良好。醸化 赤褐色	体部がゆるやかに張りながら直線的に開く。ロクロ 右回転糸切無調整。外反。体部ロクロ目録し。ロクロ右回転糸切無調整。底部に壺状圧痕あり。	131-11
⑩	土師質壺	床面上	底部完形 口縁約欠	14.4 × 6.7 × 5.1	密	良好。醸化 赤褐色	体部下半は強く張り口縁大き外反。しっかりとした付高台。貼付部ナデは難。回転糸切無調整。	131-12
⑪	土師質壺	床面上	ほぼ完形 口縁欠損	13.0 × 8.1 × 6.5	砂粒小疊 を含む	良好。醸化 暗赤褐色	腰が張り、口縁大きく外反。しっかりとした付高台。貼付部ナデは難。底部は糸切後回転ナダ。	131-13
⑫	土師器壺	床面上	口縁約 底部全欠	(26.3) × 一×一	粗。砂粒 多く黒色 動物を含む	やや軟。醸 化褐色	体部はゆるやかに丸く、最大径は上半にある。ロクロ は短かい「く」の字状。底部～口縁・体部内面横ナダ。 体部外側ヘラ削り。下半の一部に磨きあり。	

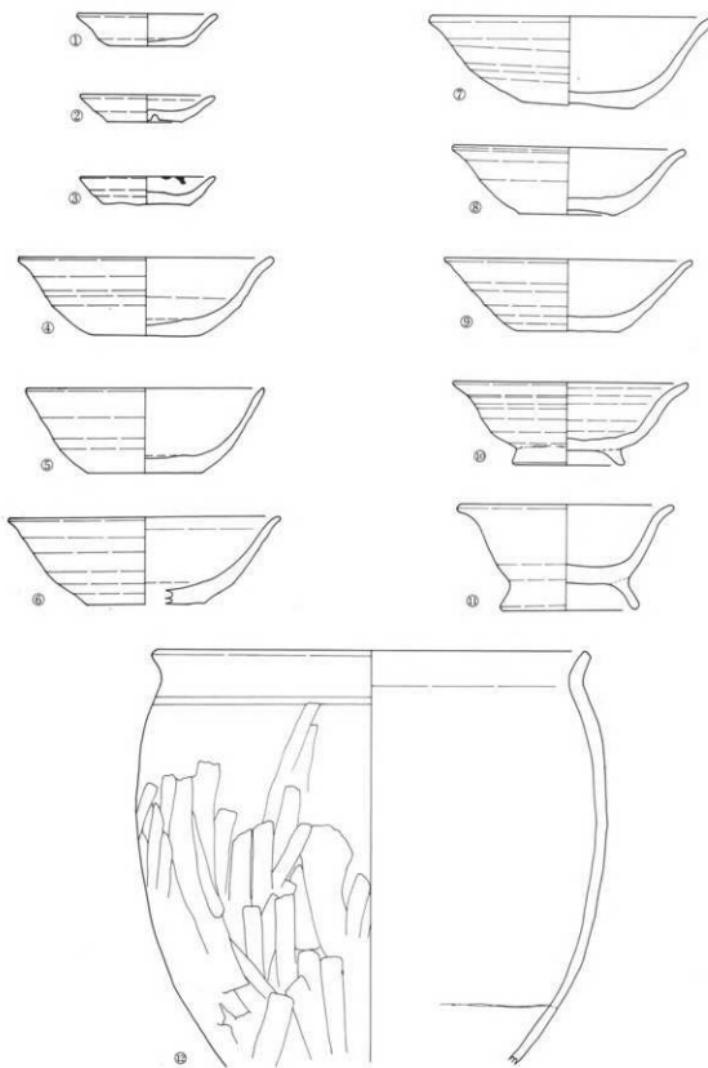


図134 SJ21出土土器 1/3

SJ 20・39 (位置・図78、PL. 132)

調査次・位置：SJ 20・第27次調査、S 106～110・W35～40 SJ 39・第31次調査、S 117～120・W 5～8
出土状態：SJ 20では南側壁近くの床面上に土師質皿の完形品と土師器坏の破片があり、その側にはソフトボール大の櫛と磨製石斧1個が在った。また床面の中央部にも土師質皿の散布が見られた。竈の焚口の両袖には大型の平瓦を立てて使っており、この付近には瓦片が散在していた。

SJ 39は擾乱と削平が著しいが、竈付近を中心に瓦片が多数散布していた。また竈手前の床面上には土製紡錘車1個と鉄製刀子1個があり、その西側にも刀子1個があった。覆土中からは土師質皿・土師器坏の破片が出土している。

表32 SJ 20・39出土土器 (図135)

番号	種別 器 形	出土位置	遺存率 部 位	法 量 (cm)	胎 土	燒 成 色 調	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 質 小 盆	S J 20	底部ほぼ 完 光、口縁 有	口径×底径×器高 (8.9) × 6.9 × 1.7	白・赤 色 砂粒多く含 む	軟化淡 灰褐色	体部は短かく直線的。底部広い。ロクロ右回転糸切無調整。	
②	土 師 質 小 盆	S J 20	完形 床面上	8.7 × 5.4 × 2.1	砂粒を多 く含む	やや軟 性灰褐色	体部中段に腰をつくり、口縁は直線的。ロクロ右回 転糸切無調整。	132—1
③	土 師 質 坏	S J 20	口縁～体 部のみ有	(13.0) × —— × —	白色粘物	軟質。酸化 を含む	体部下半に腰をつくり、口縁は外反。ロクロ整形。	
④	土 師 質 坏	S J 20	口縁～体 部のみ有	(14.4) × —— × —	白色粘物	軟質。酸化 を含む	体部下半に腰をつくり、口縁は外反。ロクロ整形。	
⑤	須 恵 器 坏	S J 20	底部約～ 床面上	(14.5) × 6.7 × 4.6	白・黒 色 鉛物多し	やや軟 元灰白色	体部～口縁部は直線的に開く。底部ロクロ右回転糸 切無調整。	132—2
⑥	土 師 質 小 盆	S J 39	口縁～底 部周辺有	(8.9) × (4.8) × (1.9)	粗。細砂 粒を含む	やや軟。酸 化淡褐色	体部は直線的で平たく開く。ロクロ左回転糸切無調 整。	
⑦	土 師 質 坏	S J 39	底部完形 覆土	(14.4) × 7.1 × (4. 0)	密	硬質。酸化 暗赤褐色	体部下半がゆるやかに張り、口縁わずかに外反。ロ クロ左回転糸切無調整。底部に壺状の圧痕あり。	132—3

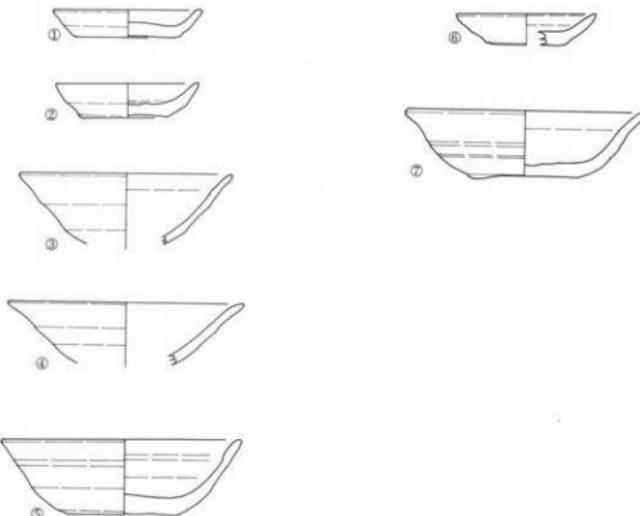


図135 SJ 20・39 ①～⑤：SJ 20 ⑥・⑦：SJ 39 1/3

SK86 (位置・図51、PL. 132-142)

調査次・位置：第30次調査、S 73～79・W34～37

出土状況：塔跡の南側に在る竪穴式の小殿跡。床面上および埋土下層から高熱を受けた痕跡をもつ大型の瓦片が多数出土したほか、炉跡の付近を中心に羽口・埴塙などが散在していた。しかし鉄あるいは銅製品の出土は確認できなかった。土器類は僅かに床面近くから土師質壺、埋土中から土師質壺の出土があったのみである。

表33 SK86出土土器類(図136)

番号	種別 器形	出土位置	遺存部 位	法 量(cm) 口径×底径×器高	胎 土	焼 成 色	器形・技 法等の特 徴	PL番号
①	土 師 質 壺	埋土	口縁丸欠	13.2×5.4×4.2	砂粒を含む	良好。中性 灰褐色	体部は直線的に開く。ロクロ成形。底部～体部下半 手持ちヘラ削り、体部中段指押え。見込み部に輪状 圧痕	142-2
②	土 師 質 壺	床面上	底部完形 口縁丸欠		密。黑色 粘土物を含む	良好。酸化 褐色	体部わずかに張り、口縫は外反。強く横に張る付高 台。全面丁寧なナデ。高台内・口縁内面に黒斑あり。	
③	埴 塙	複乱層	底部・体 部の丸欠	10.4×—×4.5	密。細粒 粘土	やや硬質。 酸化明灰色	底部～体部～口縫に至るまで厚く、内溝。内面～口 縫部は気泡が多く生じ、鉛滓が織着してゴツゴツの 状態。緑青が認められる。内面～口縫は指押さえ、 指ナデ。外面はヘラ削り後、ナデ。2ヶ所に注口が 作られている。	
④	羽 口	床面	基部欠失 他は完形	長さ 基部径 内径 (15.1)×(7.5)× 1.8	密。砂粒 小礫を含む	良好。酸化 明橙色	指押さえ、指ナデ整形。不整な円錐台形。中空部は 多少湾曲するが、円柱形。棒などに巻き付けて整形 か。先端部を中心に鉛滓融着。	142-3
⑤	羽 口	床面	基部欠失 先端丸欠	長さ 基部径 内径 —××2.0	密。砂粒 を含む	良好。酸化 明橙色	指押さえ、指ナデ整形。円錐台形。円柱形の棒状の ものに粒土板を巻付けて整形か。先端に鉛滓融着。	142-4
⑥	羽 口	床面	基部丸欠	長さ 基部径 内径 12.9×6.5×2.1	密。砂粒 を含む	良好。酸化 明橙色	指押さえ、指ナデ整形。円錐台形。円柱形の棒状の ものに粒土板を巻付けて整形か。先端に鉛滓融着	

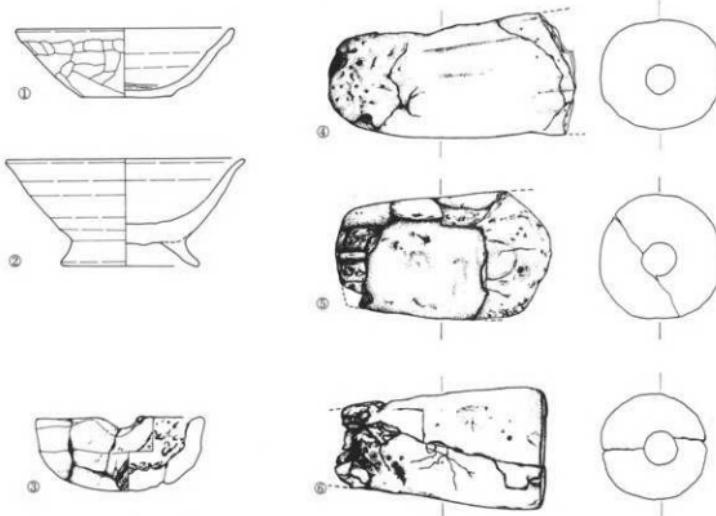


図136 SK86出土土器類 1/3

第VII章 出土した遺物

S K85 (位置・図51、遺構・図58-59、PL. 132)

調査次・位置：第30次調査、S 78~82・W46~51

出土状態：S K86の西側にある堅穴式の小鉄冶跡。北半部はS K82によって壊されている。西半部にある円筒状に掘られた2号炉跡の底に、完形の坩堝が1個正立して置かれた状態であった。この南側にある同様の2号炉の周辺の床面には羽口片、坩堝片、それに須恵器坏、瓦片などが集中して在ったが、この須恵器坏の中の1個の体部外面には横向方に「造仏」の墨書きがあり、遺構の性格を検討する上で注目された。南壁近くの床面には土師質の坏・土師器壺の破片が多数散布しており、埋土中にも土器片が多く含まれていた。しかし鉄あるいは銅製品の出土は見られなかった。

表34 S K85出土土器類 (図137)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率	法 量(cm)	胎 土	焼 成 色 調	断 形 ・ 技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 器 坏	埋土	口縁の一部欠	11.8×—×3.5	砂粒を少 し含む	良。酸化赤 褐色	丸底。口縁は垂直に低く立ち上がる。口縁及び内面 は横ナデ。体・底部へラ削り。	132-4
②	須 恵 器 坏	床面上	片 (11.9) × (4.9) × 3.8	砂粒わず かに含む	良好。還元 灰白色	口縁少し外反。体部下半わざかに張る。右回転糸切 無調整。		132-5
③	須 恵 器 坏	埋土	底部完形 口縁欠	(13.9) × 6.1 × 4.0	粗。砂粒 多し	やや軟。還 元灰色黒斑 有り	体部はゆるやかに丸く、口縁は直線的。体部・口縁部 外側クロコ目強し。右回転糸切無調整。口縁部黒斑 あり。体部外面に墨書き「造仏」あり。	132-8
④	土 師 質 坏	埋土	店舗完形 口縁欠	(13.4) × 6.1 × 4.0	砂粒を少 し含む	やや軟。酸 化赤褐色	体部は直線的。口縁は外反する。クロコ右回転糸 切無調整。	132-6
⑤	須 恵 器 塊	床面上	口縁欠 高台欠	(13.5) × 5.6 × 5.4	密	硬質。還元 灰白色	体部は直線的に開き、口縁は少し外反。クロコ右回 転糸切無調整。付高台。高台貼付部に茶なだ。高 台部・口縁部に黒斑あり。底部内面輪状に粘土が荒れ る。	132-7
⑥	土 師 質 塊	床面上	底部片 口縁片	(13.3) × 6.1 × 4.7	密。砂粒 多し	良好。酸化 赤褐色	口縁外反。クロコ右回転糸切指ナダ。付高台。高台 は少し開く角高台。底部内面、重焼もしくは温土 痕有り。	
⑦	土 師 質 塊	床面上	完形	14.1 × 6.2 × 5.3	粗。砂粒 多し	良。酸化灰 褐色	体部は直線的に開く。口縁わずかに外反。付高台、 くすぐれた角高台。回転糸切無調整。底部内面に輪状 痕。	132-9
⑧	坩 堝	2号炉	完形	12.0 × — × 4.7	密。黑色 鉱物を含 む	硬質。酸化 明褐色	底部へ体部へ口縁に至るまで厚く、内湾。内面～口 縁部に金属の融着。内面～口縁指押さえ、指ナダ。 表面へラ削り後、ナダ。	
⑨	土 師 器 小 型 壺	埋土	口縁～体 部のみ片	(11.4) × — × —	粗。赤色 鉱物含む	やや硬。酸 化暗赤褐色	体部内面～口縁部焼ナダ。体部上半横へラ削り。以 下横へラ削り。体部丸く、きわめて弱い「コ」の字 状口縁。口縁外面に弦線あり。	
⑩	土 師 器 壺	床面上	口縁付近 のみ片	(19.0) × — × —	粗。砂粒 小砾多し	良。酸化褐 色黒斑有り	多少崩れた「コ」の字状口縁。体部内面～口縁部燒 ナダ。体部上半横へラ削り。体部内面ハケ目状横ナ ダ。内面焼け状のもの付着	
⑪	土 師 器 壺	床面上	口 縁 片 ～ 体部片	(21.9) × — × —	黑色鉱物 を含む	良。酸化明 褐色	口縁は厚く大さく開く。体部は薄く長胴。体部縦へ ラ削り。口縁横ナダ。体部内面は縦へラ削り。	

表36 S K33出土土器 (続き)

⑫	土 師 質 塊	埋土	体部片欠 底部完形	11.6 × 6.5 × 5.6	黒色鉱物 を多く含 む	良好。酸化 灰褐色	体部下半は丸く張り、内湾しつつ直線的な口縁に至 る。底部回転糸切(方向不明)。ハの字状に強く横に 張る付高台、端部は水平に面取り。高台は横に強く 張らない。黒斑あり。	
⑬	土 師 質 足 高 台 塊	埋土	口縁片欠 失	(14.8) × 7.4 × 9.2	黒色鉱物 を多く含 む	良好。酸化 灰褐色	深く、腰の張った体部。口縁部は外反して開く。底 部右回転ナダ。強く外反する足高台、付高台。外 面にタマシ多し。	
⑭	須 恵 器 羽 釜	埋土	口縁～脚 部片	20.4 × — × —	粗。砂 粒を含 む。	やや軟。還 元灰黄色	脚直下に脚部最大径があり、脚部下半は直線的にす ばまる断面形。脚はやや上を向く。口縁は内傾し、端 部が肥厚する。輪横痕を内面にわざかに残し。脚部 上半～口縁～内面横ナダ。脚部下半斜めへラ削り。 脚以下部分にスカ付着。	

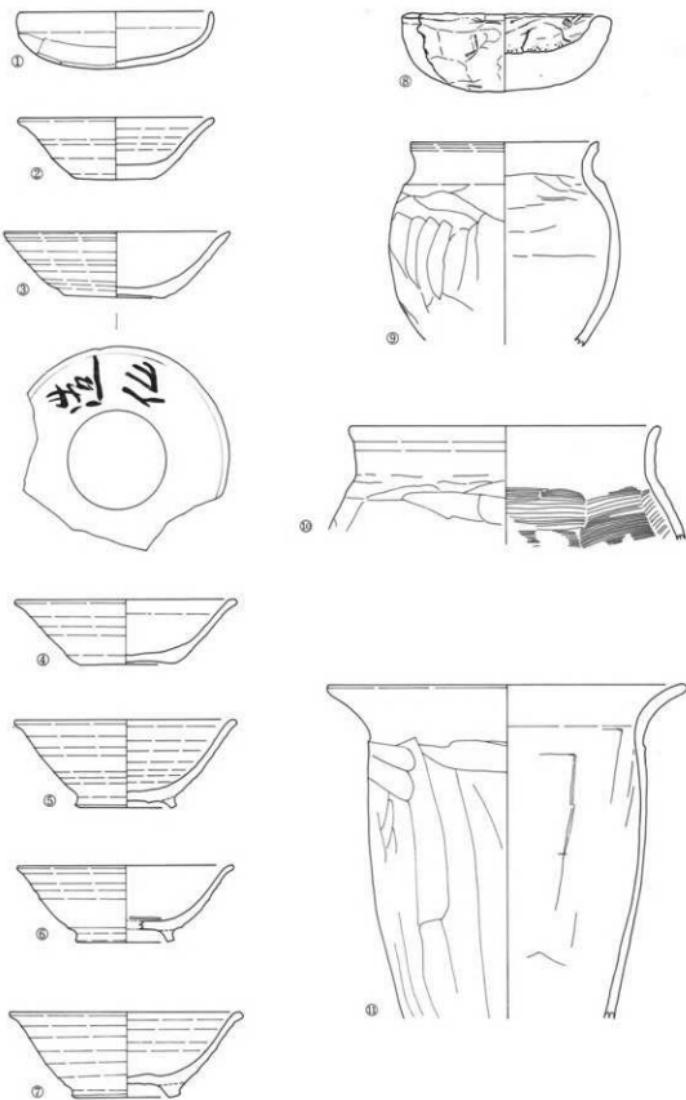


図137 SK85出土土器 1/3

S A01 (遺構・図68、PL. 133)

調査次・位置：第12トレンチ、N58～61・E16～40

出土状態：金堂跡と講堂跡の間で検出された東西方向の柱穴列。1度長さと方位を変えて造り直しが行われている。この古い柱穴と新しい柱穴の両方の埋土から瓦片の出土がみられた。また新しいものの西端柱穴の埋土の最上層から、土師器坏・同甕片・須恵器坏・同皿・同蓋などが集中して出土した。坏類は上向きに、蓋はほぼ完形品が摘み下にした状態で、また甕は大型の破片が散乱する状態であった。これらの出土する範囲は柱穴埋土内に限られることから、改築の際に埋め込まれたものとみられる。

S K33 (位置・図70、遺構・図71、PL. 133)

調査次・位置：第26次調査、N50～52・W7～9

出土状態：金堂跡の北西にある長方形の土壇。東側部分はSK49によって壊されている。この埋土下層の木炭と焼土が混じる暗褐色土中には、完形品を含む土師質の坏・須恵器坏・羽蓋片などの土器類が多数混じっていた。埋土上層は木炭小片と鉄滓小塊を多く含むローム混じりの暗褐色土であるが、この中からも同様な土器類、瓦片と偏平な玉石が出土した。この埋土中から出土した土器器皿の中には内面を黒色処理したもののが3点、墨痕のあるものが3点あり、また鉄製鉗具2個(図152)があった。なおこの付近から羽口の破片が出土していることを考慮すると、近くに小鍛冶があり、その残土や不要になった土器類を一括して捨てた塵芥穴であるとみられる。

表35 S A01出土土器(図138)

番号	種別 器形	出土位置 柱穴埋土	遺存率 完形	法量(cm) 口径×底径×器高	胎土 赤色鉱物 を含む	焼成色 良好。酸化 萌灰褐色	器形・技法等の特徴	PL番号
① 小 皿	土師器 坏	柱穴埋土	ほぼ完形	6.9×4.3×1.7	粗。砂粒 多し	褐。砂粒 多し	口縁は直線的に開く。底部左回転系切無調整。	
②	土師器 坏	柱穴埋土	(11.9)×8.8×3.4	(11.9)×8.8×3.4	粗。砂粒 多し	褐。砂粒 多し	ほとんど平底、手持ヘラ削り。体部内面と口縁部は横ナデ。体部指おさん。口縁部に油埋付着。	133-1
③	土師器 坏	柱穴埋土	馬	(14.0)×(10.2)× (4.0)	粗。砂粒 少し含む	褐。砂粒 少し含む	平底に近い。底部、体部下端手持ヘラ削り。口縁部～内面ナデ。内面体部に放射状暗文、見込みにらせん状暗文。	
④	須恵器 坏	柱穴埋土	底部完形 口縁丸	(13.9)×7.8×3.4	粗。砂粒 を含む	褐。砂粒 を含む	体部わざかに張り、口縁わざかに外反。底部クロ右回転系切無調整。	
⑤	須恵器 坏	柱穴埋土	底部完形 口縁丸	(13.3)×7.5×3.5	粗。	軟質。還元 火	体部は直線的。見込み部にロクロ強い。焼成にムラあり。ロクロ右回転系切無調整。	
⑥	須恵器 坏	柱穴埋土	体部～口 縁丸欠失	12.7×6.7×3.4	粗。砂粒 赤色鉱物 を含む	軟質・中性 赤色鉱物 を含む	体部わざかに張り、口縁わざかに外反。底部クロ右回転系切無調整。内外面に炭化物付着。	
⑦	須恵器 坏	柱穴埋土	完形	12.7×7.7×3.1	粗。黑色 粒を含む	良好。還元 火	体部わざかに張り、口縁わざかに外反。底部クロ右回転系切無調整。器形にゆがみあり。	
⑧	須恵器 坏	柱穴埋土	口縁～体 部丸	(11.5)×(6.6)× 3.5	粗	良好。還元 火	体部わざかに内凹。口縁は直線的。底部は余切無調整(右回転と推定)。	133-2
⑨	須恵器 坏	柱穴(攪 乱)	底部丸	(13.7)×(7.3)×	赤色鉱物 を含む	良好。倒い て置かれて いる。	口縁は外反。ロクロ形回転系切無調整。付高台、断面三角形。貼付部は丁寧なロクロナデ。	133-3
⑩	須恵器 蓋	柱穴埋土	端部丸欠 け	(17.4)×4.3×4.2	粗	良好。還元 火	端部を下方に折る。体部上半～頭部回転ヘラ削り後、横部貼付。赤鱗状のものが付着。	133-4
⑪	須恵器 蓋	柱穴埋土	ほぼ完形 端部欠損 (摘出部)	18.0×4.6×3.7	粗。黒色 鉱物多し	良好。還元 火	端部を下方に折る。体部上半～頭部回転ヘラ削り後、横部貼付。赤鱗状のものが付着。	133-5
⑫	土師器 甕	柱穴埋土	口縁～体 部上半丸	(11.9)×—×—	粗。細砂 粒多し	やや軟。酸 化暗褐色	胴が丸く張り「く」の字状口縁を持つ。口縁～内面に半横ナデ。胴部上半横ヘラ削り、下半は厭ヘラ削り。	
⑬	土師器 甕	柱穴埋土	%	19.8×4.7×26.3	粗。砂粒 を含む	良好。酸化 赤褐色	やや崩れた「コ」の字状口縁。最大径を胴部上半に持つ。底部の小さな甕。口縁部内外面横ナデ。胴部外縁上半斜ヘラ削り、下半縁ヘラ削り、胴部内面縁ヘラナデ。底部外縁ヘラ削り。	133-6

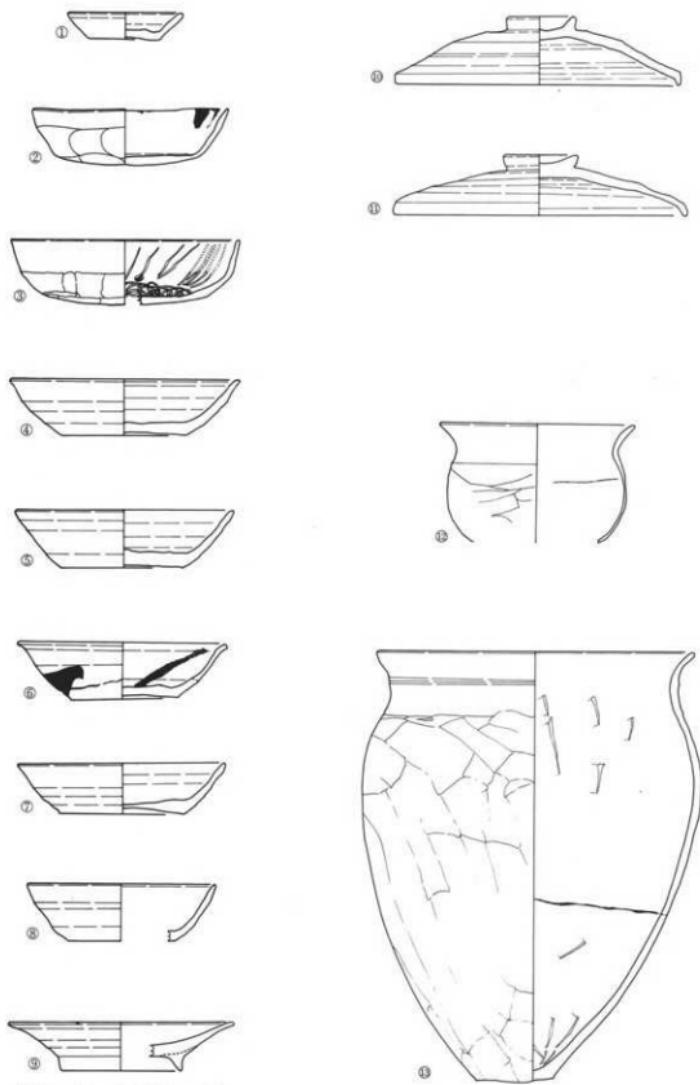


図138 SA01出土土器 1/3

表36 S K 33出土土器 (図139) (①~⑩はP. 268頁下段に統く)

番号	種別 器形	出土位置	遺存部位	法量 (cm) 口径×底径×器高	胎土	焼成 色調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	須恵器 壊	埋土	底部完形 口縁欠	11.5×5.6×3.3	密。細砂粒を含む	やや硬。酸化灰色	直線的に開く口縁。ロクロ右回転糸切無調整。弱い黒斑あり。	
②	須恵器 壊	埋土	完形	11.0×6.6×3.4	極めて粗 砂粒小難 多量に含む	硬質。中性 灰褐色	腰が張り、口縁外反。厚手でロクロ目強く。切り離しの糸が太い。ロクロ右回転糸切無調整。表面に炭化物多く付着。口縁に油煙残る。	133-7
③	須恵器 壊	埋土	底部少 口縁少	(11.9)×(5.0)× (3.9)	砂粒小難 多し	やや硬。還元 灰色	腰がなだらかに張り、口縁がわずかに外反する。底部右回転糸切無調整。	
④	須恵器 壊	埋土	ほぼ完形 口縁一部欠	11.8×6.0×4.3	砂粒を多量に含む	硬質。中性 明灰褐色	腰が張り、口唇部がわずかに外反、見込み部ロクロ目強し。ロクロ右回転糸切無調整。黒斑あり。	
⑤	須恵器 壊	埋土	完形	10.9×5.6×4.2	粗。砂粒 小難多し	硬質。還元 明灰黃色	体部は直線的、口唇部は肥厚しわざかに外反。ロクロ目強く、右回転糸切無調整。底部に蓄状压痕あり。	133-8
⑥	須恵器 壊	埋土	完形。口 唇わざかに欠	11.8×6.0×4.5	粗。細砂粒を含めて 多し	やや硬。 中性明灰褐色	体部は直線的で、ロクロ目凸強し。右回転糸切無調整。一部に黒斑あり。	133-9
⑦	土師質 壊	埋土	底部完形 体部少	9.6×3.6×3.2	やや密 明褐色	良好。酸化 明褐色	体部は屈曲内湾。口唇部は直線的、丁寧な作りだが体部外面にタヌ痕あり。底部は極めて小さく、右回転糸切無調整。わずかに火拂状焼成ムラあり。	
⑧	土師質 壊	埋土	底部完形 体部少	10.0×4.0×3.4	同上	良好。中性 明灰褐色	器形・技法は⑦にきわめて近い。体部に強い黒斑あり。	
⑨	土師質 壊	埋土	底部完形 口縁少	10.1×4.4×3.6	同上	良好。還元 黑色一部灰 褐色	⑥と同じ。ほぼ全面黒色処理が施される。(⑦~⑨は焼成・色調に違いがあるが、器形・技法等に共通性が多い)	
⑩	土師質 壊	埋土	底部完形 口縁少	11.1×5.1×3.5	密。細砂粒を含む	やや硬。 酸化明褐色	体部わざかに屈曲し、口縁わざかに外反。ロクロ右回転糸切無調整。体部外面タヌ痕多し、全面に黒斑、油煙、炭化物付着。	133-10
⑪	土師質 壊	埋土	ほぼ完形 口縁少	10.6×5.2×3.6	やや粗。 細砂粒多 し	やや軟。 酸化明褐色	体部下半部をつくり、口縁は大きく外反して聞く。ロクロ右回転糸切無調整。多少焼成ムラあり。	133-11
⑫	土師質 壊	埋土	少	11.3×6.4×3.4	やや粗。 細砂粒を含む	良好。酸化 明褐色	体部下半がゆるやかに張り、口縁は直線的に聞く。底部右回転糸切無調整。切り直した痕あり。体部外面にロクロ目強い。	
⑬	土師質 壊	埋土	口縁少 失	11.0×5.5×3.5	やや粗。 黑色物質を含む	良好。酸化 淡褐色	体部下半部をつくり、口縁ははわざかに内湾。ロクロ右回転糸切無調整。体部外面にタヌ痕残る。弱い黒斑あり。	
⑭	土師質 壊	埋土	口縁少 失	10.8×4.2×3.6	やや粗。 赤色物質を含む	良好。酸化 淡褐色	体部下半は屈曲内湾し、口縁は直線的。底部は小さく、ロクロ右回転糸切無調整。	
/	土師質 壊	埋土	底部ほぼ 完形。口縁 少	(11.2)×4.9×4.1	やや粗。 中性灰褐色	良好。酸化 淡褐色	体部下半は丸く張り、口縁は外反。体部外面はロクロ目強く、口唇部はナデ。体部内面は黒色処理。外面に黒斑あり。	
⑯	土師質 壊	埋土	底部少~ 口縁少	(13.1)×(6.6)×	密。細砂 粒を含む	硬質。中性 灰褐色	体部は直線的で、口縁は外反して聞く。体部外面ロクロ目強い。ロクロ右回転糸切無調整。断面は還元炎焼成。表面は中性~酸化炎焼成。	
⑰	土師質 壊	埋土	底部付近 のみ少	—×(5.1)×—	密。細砂 粒を含む	硬質。中性 灰褐色	体部下半は直線的。ロクロ糸切無調整(右回転か)。墨書き「三」か。	
⑱	須恵器 壊	埋土	口縁少部 少欠失	11.6×6.4×4.3	やや粗。 砂粒を含む	硬質。中性 明灰褐色	体部下半は丸く張り、口縁外反。ロクロ右回転糸切無調整。付高台。貼付部弱いナデ。黒斑あり。油煙付着。	
⑲	土師質 壊	埋土	底部少~ 口縁少	(11.7)×6.3×4.4	やや粗。 酸化淡褐色	良好。酸化 淡褐色	体部は直線的に聞く。体部外側ロクロ目強い。ロクロ右回転糸切無調整。高台は端部が丸く、厚手で低い。	
⑳	土師質 壊	埋土	ほぼ完形 口縁一部 欠失	12.6×6.9×5.3	黒色物質 を含む	良好。酸化 淡褐色	体部下半はゆるやかに内湾しつつ、直線的な口縁が立ち上がる。底部は回転ナデ調整。やや内湾する高い台高黒斑あり。	133-12

第2節 土 器 類

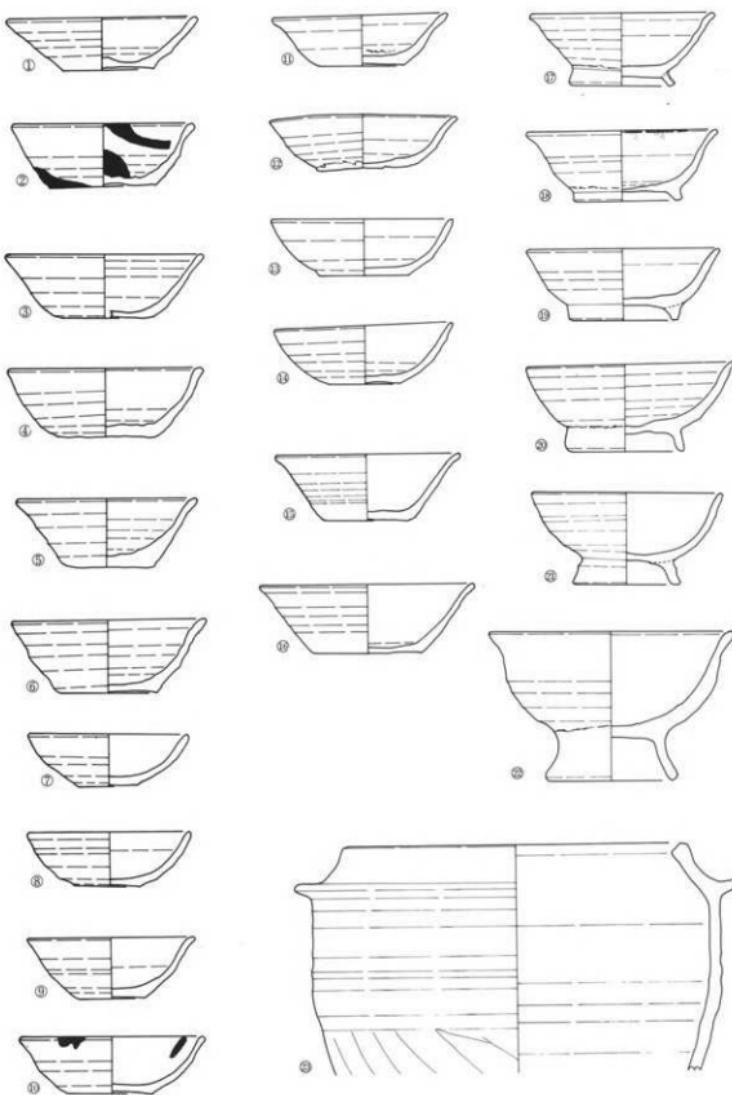


図139 SK33出土土器 1/3

第17次調査区瓦散布面 (位置・図27、PL. 134)

位置: S 16~38・W 12~20

出土状態: 全面に瓦片が散布しており、その下部から完形品を含む土師器坏・須恵器坏が多数出土した。

表37 第17次調査区瓦散布面出土土器 (図140)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法量 (cm) 口径×底径×器高	胎土	焼成調 色	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師器 坏	散布面下	ほぼ完形	12.0×—×3.5	粗。砂粒 多し	良好。酸化 明褐色	やや平底気味の丸底。手持ヘラ削り。口縁部はやや 内湾しながら立ち上がる。内面～口縁部横ナデ。	134-1
②	土師器 坏	散布面下	1/6	11.8×—×3.3	やや粗。 砂粒多し	やや軟。酸化 明褐色	①に同じ。口唇部に1ヶ所油煙付着。	134-2
③	土師器 坏	散布面下	口縁欠	12.2×—×3.6	やや粗。 砂粒多し	良好。酸化 明褐色	①に同じ。口唇部に2ヶ所油煙付着。	134-3
④	土師器 坏	散布面下	口縁欠	12.6×(10.2)×3.	粗。砂粒 多し	軟質。酸化 赤褐色	①に同じ。口唇部に数ヶ所油煙付着。①～③より平 底傾向が強い。体部外面に指揮え痕あり。	
⑤	土師器 坏	散布面下	1/6	(12.1)×—×3.6	粗。砂粒 を含む	良好。酸化 明褐色	①に同じ。口唇部に1ヶ所油煙付着。体部外指 揮え痕。	
⑥	土師器 坏	散布面下	口縁欠	12.8×—×3.3	粗。細砂 粒を含む	良好。酸化 明褐色	①に同じ。口唇部に多く油煙付着。やや浅い。	
⑦	土師器 坏	散布面下	弓張	12.8×—×3.1	粗。砂粒 多し	良好。酸化 明褐色	⑥に同じ。	
⑧	土師器 坏	散布面下	完形	12.3×(10.5)×2. 9	やや粗。 黒色鉱物 を含む	良好。酸化 暗褐色	丸底気味の平底。底部手持ヘラ削り。口縁～内面ナ デ体部外指揮え痕。表面に黒斑。口唇部数ヶ所に油 煙がつく。	134-4
⑨	須恵器 坏	散布面下	完形	13.0×8.2×4.0	黒色鉱物 多く含む	良好。還元 暗灰色	体部が直線的に開く。底部は回転ヘラ切り。体部外 面にクロコ目強く、自然跡が見られる。口唇部1 ヶ所に油煙がつく。	134-5
⑩	須恵器 高台付坏	散布面下	口縁一部 欠。高台 欠	13.2×8.2×4.3	極めて 粗。砂粒 小疊多し	硬質。還元 暗灰色	体部が直線的に開く。器高が比較的低い。底部右回 転ヘラ削り。付高台、貼付部ナデ。	134-6
⑪	土師器 壺	散布面下	口縁～胴 部上端	20.7×—×—	粗。細砂 粒多し	良好。酸化 赤褐色	胴部が丸く大きく張る形態。口縁は外反しつつ開く。 内面～口縁部横ナデ。胴部上端斜めヘラ削り。	

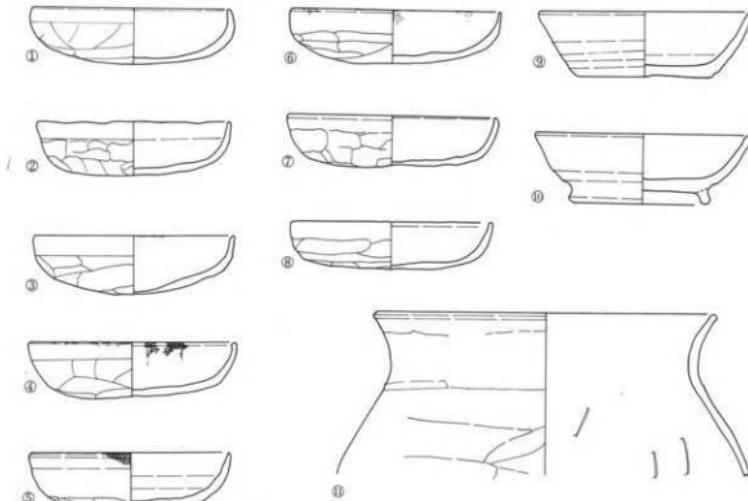


図140 第17次調査区瓦散布面出土土器 1/3

第15トレンチ (位置・図39、遺構・図40、PL. 134・138・140)

位置: S 8~25・E 50~110

出土状態: 金堂跡の南東の低地部で瓦溜、竪穴式住居跡、溝・井戸跡などが検出された。この瓦溜には多数の完形瓦を含む膨大な量の瓦片の中に、土師質の壺・皿、土師器壺、須恵器壺、内耳鍋型土器などの土器類が含まれていた。またこの中からは塑像片(図151)、漆喰の付着した壁土塊、焼土塊、凝灰岩切石、石臼なども出土している。瓦溜の南側で検出されたS J 15の床面と覆土中からは多数の瓦片が出土し、竪内部からは土師器壺片と須恵器蓋が出土した。S D 04の底部には瓦片とともに少量の土師器壺片が散布していた。この付近の表土中からは、須恵質の円面鏡の破片、内面に輪宝が墨書きされた土師質の小皿(図141)などが出土している。

表38 第15トレンチ出土土器(図141)

番号	種別 器形	出土位置	遺存部 位	法 量(cm) 口径×底径×器高	胎 土	焼 成 色 調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師器 壺	瓦溜	完形	11.0×8.0×3.5	砂粒を少 し含む	やや軟、酸 化淡褐色	ほとんど平底、手持ちヘラ削り。体部内面と口縁部は横ナデ。体部は指おさえ。	
②	須 恵 器 壺	瓦溜	口 縁 ～ 底 部 全	15.1×7.0×5.4	密、砂粒を少 し含む	灰白色	ほぼ直線的に体部が立ち上がる。右回転糸切無調整。巾広い付高台。高台貼付部の内側ナデは難。	
③	須 恵 器 壺	瓦溜	口 縁 ～ 底 部 全	14.2×7.9×6.5	良好	還元 灰白色	腰が少し張り、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。底部静止糸切無調整。付高台貼付部ナデ。	
④	土 師 質 小 皿	表土	完形	2.0×4.3×2.0	やや密、 砂粒僅か に含む	良、淡褐色	体部～口縁部は直線的に開くが、口縁近くで直立する形状となる。ロクロ左回転糸切無調整。内面底部全体に輪宝を墨書きするが、中央に梵字「ア」を書く。	138-4
⑤	土 師 質 内 耳 壺	瓦溜	底部ほ ぼ 完。 口縁 彫	(27.3)×21.2× 16.0	やや粗、 砂粒多し	良好。酸化 明橙色	円筒形の体部とやや内湾しつつ開く口縁部を持つ。内耳構成形。体部内面～口縁部横ナデ。底部付近の内外面に黒斑あり。内耳は1ヶ所のみ残存、貼付部丁寧なナデ。	140-4

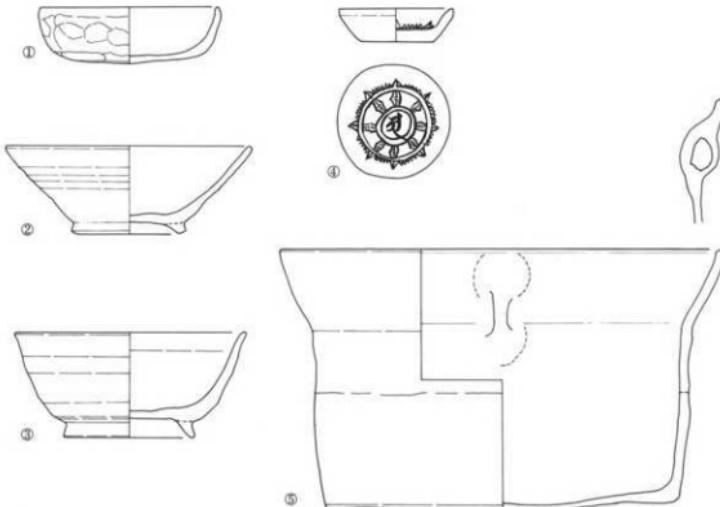


図141 第15トレンチ出土土器 1/3

S D01 (遺構・図9・16・51・60・61、PL. 134・140)

調査次・位置：第1・2・7・9トレーナー、第16・23・27・30次調査、S F01南外側全体。

出土状況：南辺築垣の南側に接してある素掘の溝。後世の土壤や墓壙などによる擾乱が目立つが、部分的にはあるが原状をとどめている。S D01の全域の底部には瓦片の散布が見られ、埋土中からも多量の瓦片が出土する。また所々には穴が掘られ、この中に多量の瓦片が埋め込まれているのが認められた。こうした瓦に伴って少量であるが土器類の出土が見られた。東端部の第16次調査で確認された改修の盛土中からは灰釉陶器片と土師質の鉢が出土している。また西半部の第30次調査区では、底部から土師器壊・須恵器壊と蓋が散布していた。さらに埋土の中位には固く締まった古い生活面が形成されており、ここには灰・木炭とともに内耳鍋型土器片が散在していた。第31次調査区では中央部の後世に擾乱を受けたと見られる部分で、多量の瓦片と獸骨片とともに青磁碗の小片が出土した。

表39 S D01出土土器 (図142)

番号	種別 器形	出土位置 部位	遺存率	法量 (cm) 口径×底径×高さ	胎土	焼成 色調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師器 壊	底面	口縁の劣 欠失	16.1×—×3.8	砂粒を含む	良好。酸化褐色	底部は丸底。口縁は外反しつつ大きく開く。内面・口縁は横ナデ、全体～底部へラ剣削り。	134-11
②	須恵器 壊	底面	%	13.0×3.6 (擴 径)×2.0	白色蠶物 を含む	硬質。蓮元 灰色	端部を折り返して受部をつくる。外面全体上半部へラ剣削り。小さな輪状摘み貼付け。丁寧なつくり。	134-13
③	須恵器 壊	底面	%	13.0×9.4×4.0	砂粒を含む	やや軟。蓮 元灰色	全体から口縁は直線的に立ち上がる。底面は丁寧な ナデ。	
④	土師質 内耳壙	中世生活 面上	口縁～体 部のみ%	(27.0)×—×—	粗。	やや軟。中 性内面暗灰 褐色、外面 黒色	全体は垂直に立ち上がり、口縁は内湾しつつ開く。 内耳部は貼付後ナデ調整。外面は一面にスグが付着し、長期間火を受けて使用されたと推定される。	140-6

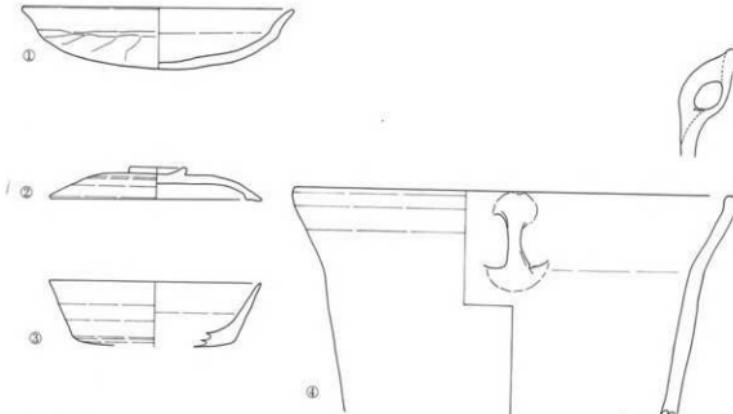


図142 SD01出土土器 1/3 ①～④:30次

4 中世以降の土器類

今回の調査で寺域内に多数の墓が造られていたのが確認され、それに伴って土師質皿などの土器類が出土している。また主に寺域の北半部で検出された土壙や井戸跡からは、土師質皿・土製の内耳鍋・香炉などの出土がみられた。本項ではこれらを墓壙に伴うもの、土壙・井戸跡から出土したもの、それと攢乱層に含まれていたものに大別して扱う。

本節の初めに述べたように、本史跡の近辺では関越自動車道の建設に伴って各所で大規模な発掘調査が行われた。これによって本史跡から出土したものと同様な中世に属する土器類が多量に出土しており、その整理と検討の成果が報告書に収められている。その代表的なものが『群馬県埋蔵文化財調査事業団「関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 上野国分僧寺・尼寺中間地域』（1987年2月）の第5章 考察・第4節 鎌倉時代以降・第7項「土師質土器皿について」にまとめられたものであろう。ここでは土師質土器皿を器形の大小と製作技法の組合せによって1~8類に分類し、さらに体部の形状変化・口径と底径の差、器厚の変化などの要素に従って各類を1~5種に細分している。またこれらが出土した遺構との関連により、1~8類を第1~5期の時期区分をするが、立論の過程ではこれを第1~4群に区分する作業がなされている。こうした詳細な検討の結果として、1350年から1550年に至る間の器形変化の編年が試みられている。それは土師質土器皿のみでなく内耳鍋・香炉を含むものであり、今後の検討の基準となるものと言いうことができる。この編年に当たってその画期となった歴史事象についても言及がなされている。その第1が15世紀初頭の応永年間頃で南北朝の動乱が終わり北山文化の波及があったこと、第2が15世紀中頃で永享の乱などの戦乱が起こり上野国内でも長尾氏の動きが活発になったこと、第3が15世紀末期で争乱が拡大し長尾氏の支配力が低下したこと、そしてこうした社会情勢が工人集団の盛衰に直接影響を及ぼしたことが指摘されている。

本史跡の調査では遺構のあり方と遺物の質・量が異なるため、出土した土器類のみによってのこうした検討は困難である。従って提起された編年試論と、その契機となった歴史事象について検証をすることは残念ながら得なかった。ただ本節の初めでも略述したように、伴出する銅鏡と紀年銘をもつ石造物を検討することによって、ある程度の時期設定をすることが可能である。そのため本項では土器類を扱うが、第5節で銅鏡を、第7節 石造物・3で銘文をもつ石造物をまとめて扱っている。本項と合わせてこれらも参照されたい。

中世遺物について
の報告
土師質土器皿の
分類

編年試案

画期

銅鏡・石造物
銘文

第29次調査区墓壙出土土器（位置・図32、遺構・図38、PL. 135）

位置：N13~S38・E14~39

出土状態：金堂の前面に当たる南側一帯で、多数の墓跡の在るのが確認された。調査区域内では51基が検出されたが、その全てが上部構造物は原状をとどめておらず墓壙のみの状態であった。この内のいくつかには土師質の皿、五輪塔と宝篋印塔の部分が乱雑に落ち込んだ状態で入っていた。S T25・28・52・54には土師質の皿が完形品を含めて数個ずつ入っているのが確認された。またS T51・54には五輪塔の空風輪・水輪・火輪の部分が多数詰め込まれたように入っていた（図158）。

表40 第29次調査区墓墳出土土器(図143)

番号	種別 器形	出土位置	遺存部 分	法量(cm) 口径×底径×器高	胎土	焼成色	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師質 小皿	墓墳埋土	底部ほぼ 完形	(7.7)×5.7×1.9	やや密 黄褐色	良好。酸化 色	体部は外反しつつ開く。口縁は薄い。ロクロ左回転 糸切無調整。外面にヌタ痕残る。	
②	土師質 小皿	S T52	口縁一部 欠失	8.9×5.9×1.9	やや密 黄褐色	良好。酸化 色	体部は外反しつつ開く。口縁は薄い。ロクロ左回転 糸切無調整。外面にヌタ痕残る。	135-1
③	土師質 小皿	S T52	完形	8.8×6.3×2.0	やや密 黄褐色	良好。酸化 色	体部は外反しつつ開く。口縁は薄い。ロクロ左回転 糸切無調整。外面にヌタ痕残る。	135-2
④	土師質 小皿	S T52	口縁一部 欠失	8.2×4.9×2.2	粗。黑色 細粒多し	やや軟。酸 化褐色	体部は直線的、やや厚手の口縁に至る。ロクロ左回 転糸切無調整。外面にヌタ痕わざかに残る。	135-3
⑤	土師質 小皿	S T52	完形	8.5×5.1×2.2	粗。黑色 細粒多し	やや軟。酸 化褐色	体部は直線的、やや厚手の口縁に至る。ロクロ左回 転糸切無調整。外面にヌタ痕わざかに残る。	135-4
⑥	土師質 小皿	S T54	口縁汚欠 失	7.9×5.5×2.2	やや粗。 赤色粒細 砂を含む	やや軟。酸 化褐色	体部は直線的、やや内湾。不整なロクロ整形。平行糸切無調整 糸。口唇部に油煙付着。	
⑦	土師質 中皿	S T52	ほぼ完形	11.1×6.5×2.5	粗。黑色 細粒多し	やや軟。酸 化褐色	体部は直線的、やや厚手の口縁に至る。ロクロ左回 転糸切無調整。外面にヌタ痕わざかに残る。	
⑧	土師質 中皿	S T52	完形	11.1×6.8×2.2	粗。黑色 細粒多し	やや軟。酸 化褐色	体部は直線的、やや厚手の口縁に至る。ロクロ左回 転糸切無調整。外面にヌタ痕わざかに残る。	
⑨	土師質 大皿	S T52	口縁汚欠 失	10.5×6.8×7.8	やや粗。 褐色	良好。酸化 色	体部はほぼ直線的。④⑤⑦⑧よりやロクロ目強く、 ヌタ痕少ない。ロクロ左回転糸切無調整。	135-5
⑩	土師質 大皿	S T52	口縁汚欠 失	10.2×6.8×2.4	やや密。 明褐色	良好。酸化 色	体部は直線的で、口唇表面を面取りする。ロクロ左 回転糸切無調整。外面にヌタ痕残る。	135-6
⑪	土師質 大皿	S T25	口縁汚欠 失	14.8×8.7×3.3	やや密。 黃褐色	良好。酸化 色	体部は外反しつつ開く。ロクロ左回転糸切無調整。 外縁にヌタ痕残る。口縁や内湾。	135-7
⑫	土師質 大皿	S T25	完形	15.0×9.6×3.6	やや密。 黃褐色	良好。酸化 色	体部は外反しつつ開く。口縁は薄い。ロクロ左回 転糸切無調整。外面にヌタ痕残る。口縁や内湾。	135-8
⑬	瓦器 足付 壇	基壙(櫛 乱)	足部 欠失	(8.9)×(7.0)× (3.2)(足部除く)	細粒を 含む 元表面暗灰 色。断面灰 褐色	やや軟。還 元性	体部は垂直に立ち上がり、口縁は外反して開く。ロ クロ整形。底部へ張り出しがある。足(3足か?) は貼付部から剝離。体部に印花文を巡らす。	9 135-10
⑭	土師質 足付 壇	S T16	口縁一部 欠失。足 部欠失	23.1×(18.5)×	粗。酸化 明褐色	良好。酸化 色	体部上半へ口縁内湾、口唇部はさらに内に折れる。 ロクロ左回転糸切無調整。足は三足で貼付。貼付部 弱いナダ。剥離して欠失。2次的に大熱を受けスス が付着。	135-11

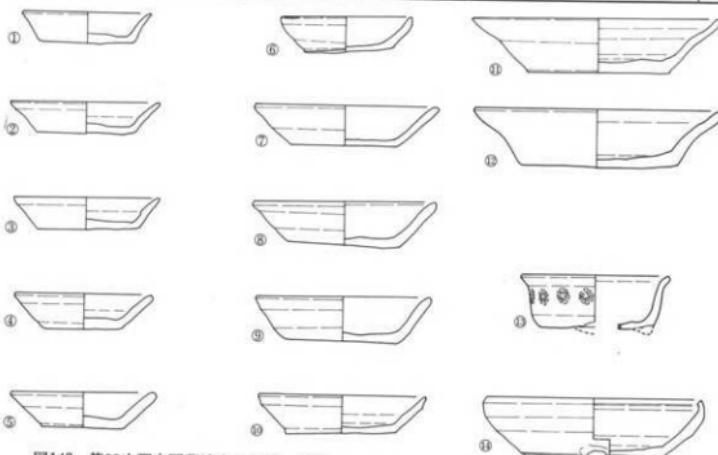


図143 第29次調査区墓墳出土土器 1/3

第30次調査区墓壙出土土器（位置・図51、遺構・図64、PL. 135）

位置：S 50～65・W 37～60

出土状態：塔の南側には墓壙が散在していたが、いずれも擾乱が著しい。この内で比較的残存状態のよいS T73からは土師質の皿が6個と銅錢が出土している。

表41 第30次調査区墓壙出土土器（図144）

番号	種別 器形	出土位置	遺存部 位	法 量(cm)	胎 土	燒 成 色 調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土師質 皿	S T73	ほぼ完形	7.0×5.2×2.2	砂粒少し 含む	やや軟。酸 化淡褐色	体部は直線的で急角度に立ち上がる。ロクロ左回転 糸切無調整。	
②	土師質 皿	S T73	ほぼ完形	7.4×4.6×2.0	粗。砂粒 を含む	やや軟。酸 化淡褐色	体部わずかに内溝。左回転糸切無調整。	
③	土師質 皿	S T73	口縁一部 欠	7.6×5.8×2.2	砂粒少し 含む	やや軟。酸 化淡褐色	体部下半に腰をつくる。ロクロ左回転糸切無調整。	
④	土師質 皿	S T73	口縁一部 欠	7.4×4.6×2.1	粗。砂粒 を含む	やや軟。酸 化淡褐色	底部中央が肥厚する。口縁は直線的。ロクロ左回転 糸切無調整。	
⑤	土師質 皿	S T73	完形	10.2×5.7×3.0	粗。砂粒 を含む	良好。酸化 赤褐色	体部一ロ縁は直線的に開く。ロクロ右回転糸切無調整。 底部に板目状圧痕あり。	135～12
⑥	土師質 皿	S T73	ほぼ完形	10.2×5.5×3.2	粗。砂粒 を含む	良好。酸化 赤褐色	体部一ロ縁部は直線的に開く。底部は肥厚。ロクロ 左回転糸切無調整。体部外面にメタ痕多し。	135～13
⑦	土師質 皿	S T73	口縁の少 欠失	12.8×7.3×3.6	黒色歯物 砂粒を含 む	やや軟。酸 化淡褐色	体部下端は急角度に、体部～ロ縁は直線的に開く。 ロクロ左回転糸切無調整。底部に板目状圧痕あり。	135～14
⑧	土師質 皿	S T68	ほぼ完形	9.3×4.3×1.8	粗。砂粒 小粒多し	良好。酸化 赤褐色	体部なかばに棱をつくる。ロ縁は直線的。ロクロ右 回転糸切無調整。	
⑨	土師質 皿	S T75	%	7.5×5.9×2.0	細かい。 砂粒を含 む	やや軟。酸 化淡褐色	厚い底面から直線的に薄いロ縁に至る。口唇部はわ ざかに内溝。ロクロ左回転糸切無調整。	
⑩	土師質 皿	S T75	%	10.9×7.0×3.0	細かい。 砂粒を含 む	軟質。酸化 淡褐色	体部～ロ縁は直線的に開く。ロクロ左回転糸切無調整。	
⑪	土師質 皿	S T75	ほぼ完形	11.3×6.2×3.2	細かい。 砂粒を含 む	軟質。酸化 淡褐色	体部～ロ縁は直線的に開く。ロクロ左回転糸切無調整。	

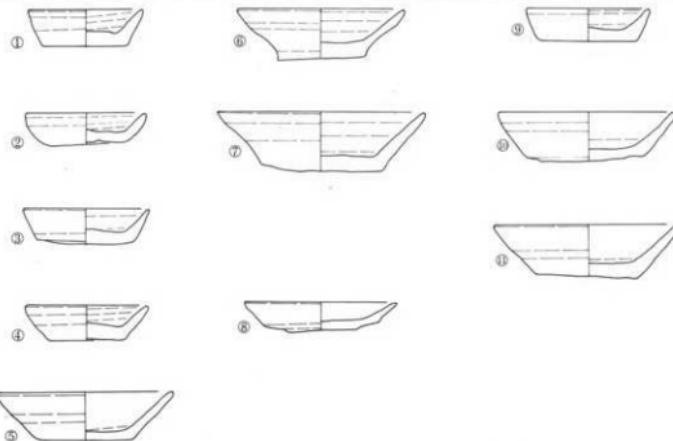


図144 第30次調査区墓壙出土土器 ①～⑦：ST73 ⑧：ST68 ⑨～⑪：ST75 1/3

第25次調査区墓壙関連土器類（遺構・図22、PL. 136）

位置：N15~30・E11~43

出土状態：金堂基壇の上面および南辺部では、多数の墓跡が重なり合う状態で検出された。いずれも上部構造は残っておらず墓壙のみであったが、この付近の擾乱層と表土には多量の土器・陶器片が含まれていた。

表42 第25次調査区墓壙関連土器類（図145）（⑪・⑫は283頁下段に続く）

番号	種別 器形	出土位置 擾乱層	遺存部 位	法量 (cm) 口径×底径×器高	胎土	焼成 色	器形・技法等の特徴	PL番号
①	陶器 小碗	擾乱層	ほぼ完形 口縁わずかに欠失	7.5×4.0×3.0	密	良好。釉暗赤紫色。胎土黃白色。	体部はゆるやかに内湾しつつ立ち上がる。ロクロ成形。体部外面下半～高台部回転ヘラ削り。内面と体部外面上半に輪の潰け掛け。	
②	陶器 皿	擾乱層	口縁丸欠失	11.4×7.5×2.1	黒色粒子含む	良好。胎土黃白色、白濁透明釉	体部は厚手でやや内湾。浅く、底部が大きい。ロクロ成形。体部下半～底部回転ヘラ削り、わずかに高台を削り出す。内面～体部外半に厚く施釉、底部にも薄く施釉があり、内面と底面に目土痕残る	
③	陶器 皿	擾乱層	ほぼ完形 口縁わずかに欠失	12.7×6.8×3.1	密	良好。還元。胎土は灰褐色。釉・透明、淡緑色	体部は内湾しつつ、滑かに立ち上がる。ロクロ成形、体部外面～高台回転ヘラ削り。高台は削り出しによる断面面。釉は高台部を除く潰け掛け。見込み部に重焼高台痕あり。内面に輪状に沈線。	
④	陶器 皿	擾乱層	ほぼ完形 口縁わずかに欠失	12.7×6.6×3.0	やや密	良好。胎土は黄白色。白濁透明釉	体部は強く内湾し、口唇部をつまみ出して外反。体部下半～高台部削り出し。高台部断面三角形。潰け掛けにより強く施釉。見込み部に蛇の目状に盛り上がり、釉を欠く。重焼痕残る。	
⑤	陶器 皿	擾乱層	ほぼ完形 口縁わずかに欠失	12.1×8.1×2.1	密	やや硬質 胎土は黄白色。白濁透明釉、絵柄黒褐色	口縁は直線的で、体部下半はゆるやかに内湾。ロクロ成形。体部外面～底部は回転ヘラ削り。低い削り出し高台。施釉は底部を除く複数流し掛けか。高台部にも流る。絵付けは筆による鉄絵。あやめか。底部外縁に1ヶ所づつ目土痕残る。	
⑥	陶器 皿	擾乱層	ほぼ完形 口縁一部欠失	12.0×7.9×2.1	やや密	良好。胎土は黄白色。釉・絵柄⑤に同じ	体部は強く内湾し、水平に挽き出した口縁との間に段を作る。体部下半～底部回転ヘラ削り。付高台、貼付部ナダ。口縁上面に厚く、内面に薄く施釉（潰け掛け）。うがみが大きい。絵付けは筆による鉄絵のあやめや、描線がやや簡略。内面に直接重焼痕残る。	
⑦	土師質 小皿	擾乱層	完形	7.0×5.8×1.5	粗。砂粒を含む	良好。酸化・淡褐色	体部は直線的に立ち上がり、口唇部外面を僅かに面取りする。ロクロ回転、底部は静止糸切無調整。	
⑧	土師質 小皿	擾乱層	完形	7.5×6.4×1.9	粗。黒色	良好。酸化・淡褐色	体部は直立に近く内湾気味。口唇部外面を僅かに面取りする。ロクロ左回転、底部は糸切無調整。	136-1
⑨	土師質 中皿	擾乱層	完形	7.0×4.0×1.8	粗。黒色	良好。酸化・淡褐色	体部は内湾気味に立ち上がる。ロクロ左回転、底部は糸切無調整で、肉厚。	
⑩	土師質 小皿	擾乱層	完形	7.1×4.8×2.0	粗。黒色	良好。酸化・淡褐色	体部は段をもって立ち上がる。口唇部外面を面取りする。ロクロ左回転、底部は糸切無調整。	136-2
⑪	土師質 中皿	擾乱層	完形	9.4×6.3×2.3	粗。黒色	良好。酸化・淡褐色	体部は直線的に立ち上がるが、口唇部外面を面取りする。ロクロ左回転、底部は糸切無調整。	136-3
⑫	土師質 中皿	表土	完形	10.9×5.8×3.1	粗。黒色	良好。酸化・淡褐色	体部は直線的に立ち上がる。ロクロ右回転、底部は糸切無調整で、外面中央部に凹みがある。	
⑬	土師質 中皿	擾乱層	完形	11.3×5.8×3.5	粗。砂粒を含む	良好。酸化・淡褐色	底部外面は直立、体部は直線的に立ち上がる。ロクロ右回転、底部は糸切無調整。	136-4
⑭	土師質 中皿	擾乱層	完形	12.8×6.4×3.5	粗。砂粒を含む	良好。酸化・淡褐色	底部外面は直立、体部は直線的に立ち上がるが中位に段がつく。ロクロ左回転、底部は糸切無調整。	136-5
⑮	陶器 皿	表土	完形	12.4×5.6×3.7	密。砂粒を含む	良好。紫地は灰白色	ロクロ成形後、底部削り出し高台。体部外面の下部分を除いて釉がかかり、淡黄褐色を呈す。内面中央部に焼成時に重ねた高台痕が残る。	136-5
⑯	陶器 壺	擾乱層	完形	9.7×5.5×5.1	密。	良好。紫地は黄灰色	ロクロ成形後、底部削り出し高台。体部外面の下部分を除いて釉がかかり、光沢のある黒褐色を呈す。	126-8

第2節 土 器 類

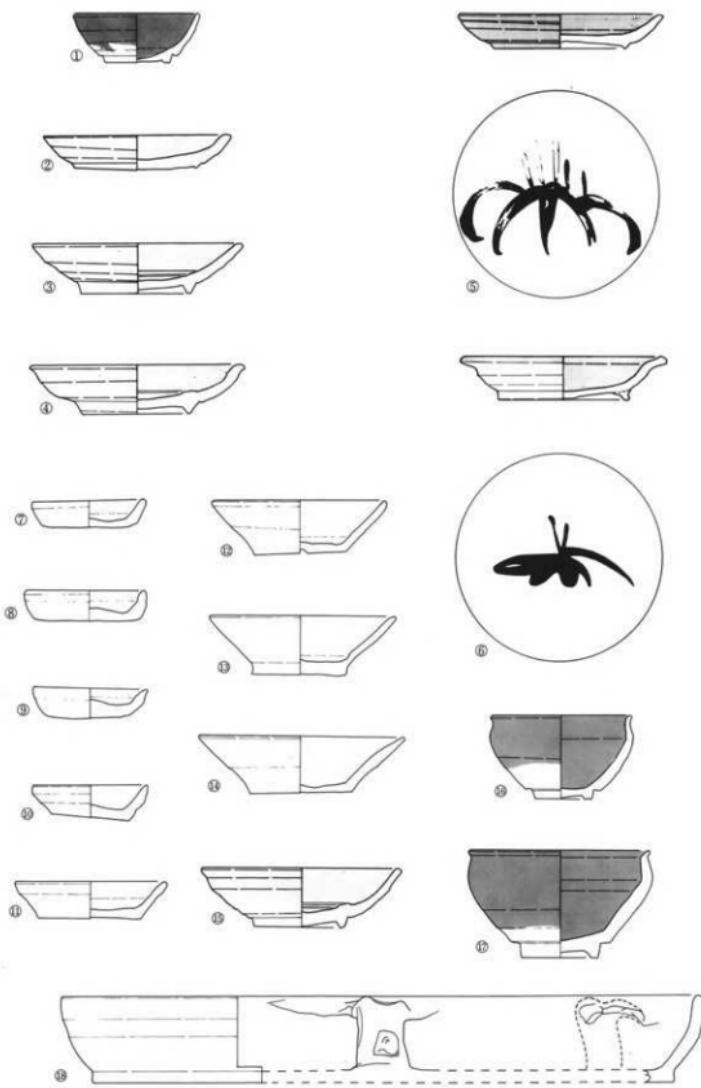


図145 第25次調査区墓壙開連出土土器類 1/3

第VII章 出土した遺物

第21・33次調査区墓壙関連土器類 (位置・図17-75、PL. 139)

位置：第21次調査、N126～137・W64～80 第33次調査、N81～82・E115～116

出土状態：寺城北西隅の第21次調査区は、古い墓壙も在ったようであるが近年まで墓地として使われていたため、その確認は困難であった。表土には土器・陶器片類の混入が多く見られた。寺城北東隅の第33次調査

表43 第21・33次調査区墓壙関連出土土器類 (図146)

番号	種別 器形	出土位置	遺存部 位	法 量(cm) 口径×底径×器高	胎 土	焼 成 色 調	器形・技 法等の特 徴	PL番号
①	土器質 小皿	33次 ST76	口辺及び 底部の一部を欠失	7.4×4.7×1.4	粗。砂粒 を含む	良好。酸化 黄灰色	体部は直線的に立ち上がる。口唇部外面を面取り。 ロクロ左回転、底部は糸切無調整。	
②	土器質 中皿	33次 ST76	ほぼ完形	10.5×7.2×2.6	粗。砂粒 を含む	良好。酸化 淡褐色	体部は外反気味に立ち上がる。ロクロ左回転、底部 は糸切無調整。	
③	土器質 大皿	33次 ST76	ほぼ完形	12.8×8.2×3.0	粗。砂粒 を含む	良好。酸化 淡褐色	体部は弧状に外反する。口唇部外面を僅かに面取り。 ロクロ左回転、底部は糸切無調整。	137-5
④	土器質 小皿	21次表土 屑		7.6×5.5×1.9	粗。赤色 粒子含む	良好。酸化 淡褐色	直線的な体部。口唇部外面を僅かに面取りする。ロ クロ左回転糸切無調整。ロクロ部に油墨残る。	
⑤	陶器 小瓶	21次 表土	完形	7.4×4.0×3.5	白色粘土 を含む	良好。胎土 は灰黄色。 釉は淡緑 色。褐色の 斑点あり	内面しつやや開く体部。新面台形の削り出し高台。 ロクロ成形後、体部外面下半～高台部右回転ラ削 り。灰釉を体部中段以上と内面全体に掛けがけ、秩 釉または鉛分による斑点が釉上に散る。	139-10
⑥	土器質 小皿	21次 表土	底部～体 部下端刈	—×(8.7)×—	粗。細砂 粒多し	やや軟。酸 化灰褐色	直線的な体部。ロクロ回転糸切無調整 (回転方向不 詳) 内面に墨書・赤彩の文様 (図形不詳)。体部外 面タマ痕多し。体部内面不整方向ナヂ。	138-5
⑦	陶器 甕	21次 表土	口縁～体 部上半	(33.4)×—×—	密	硬質。胎土 は灰黄色内 面褐色。釉 は淡緑色	口縁はコの字状に折れ、口縁端部は水平に外に張る。 体部は外に張る。外面に沈線文と印花文を返し、 口縁～体部外面に厚く釉をかける。ロクロ整形。口 縁上端、特に内側寄りの端が釉がすりへる。	139-11

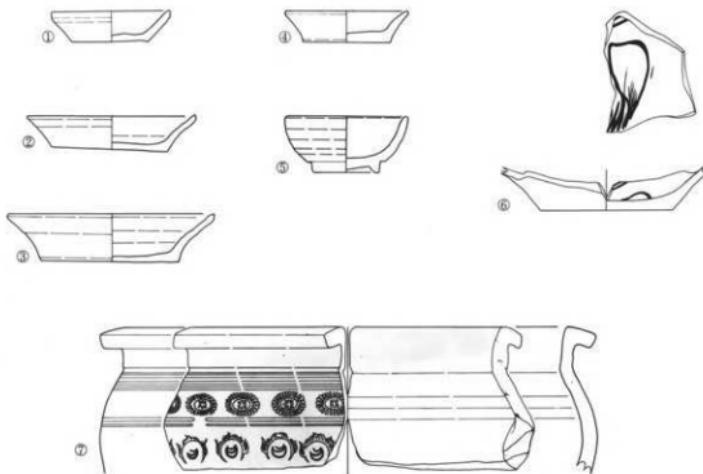


図146 第21・33次調査区墓壙関連出土土器類 1/3 ①～③: ST76 ④～⑦: 第21次調査区

区では2基の墓跡が検出されたが、その内残存状況の良いS T76の墓壙内からは、ほぼ完形の土師質の皿が3個出土した。

S K108 (位置・図75, PL. 138)

調査次・位置：第33次調査、N83~84・E117

出土状態：寺域北東隅で検出された小型の円形土壙であるが、その底部に土師質の皿が4個重ねて伏せた状態であるのが検出された。この内の1個の内面には「由尔」、他の1個の内面には「一」の墨書があった。これららの皿は南側に隣接して検出されたSK103から出土したものとほとんど同型である。

S K103 (位置・図75、遺構・図76、PL. 137)

調査次・位置：第33次調査、N79~84・E117~122

出土状態：寺域北東隅で検出された大型の円形土壙であるが、埋土下部の礫層中を主に多量の土師質の皿とその破片が出土した。その数は約300個で、その内約60個が完形品であった。これは口径7cm前後・高さ1.8

表44 SK108出土土器(図147)

番号	種別 器 形	出土位置	遺存率 部 位	法 量 (cm) 口径×底径×器高	胎 土	焼 成 色	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 师 質 小 盤	埋土	完形	7.9×4.9×2.2	粗。砂粒 少し含む	良好。酸化 灰黄褐色	直線的に開く部体。ロクロ左回転糸切り無調整。燒成後磨滅。	138-3
②	土 师 質 小 盤	埋土	完形	7.2×5.9×2.0	粗。黒色 粒子を含む	良好。酸化 黄褐色	体部下半で外側に屈曲して開く。ロクロ左回転糸切無調整。	138-4
③	土 师 質 坏	埋土	完形	11.0×6.5×3.0	粗。均質	やや軟。酸化 淡褐色	ほぼ直線的な体部、下端でわずかに屈曲。体部外面にメタ痕多く残る。ロクロ左回転糸切無調整。内面に墨書「一」	138-2
④	土 师 質 坏	埋土	ほぼ完形	10.8×6.2×3.2	粗。ほぼ 均質	やや軟。酸化 淡褐色 外面赤褐色	ほぼ直線的な体部、下端はやや屈曲。ロクロ左回転糸切無調整。外面は焼成むらが著しい。外面に墨書「由尔」。	138-1

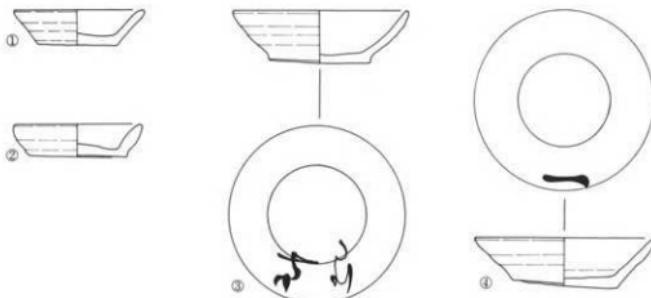


図147 SK108出土土器 1/3

表42 第25次調査区墓壙関連土器類(続き)

⑩	陶 器 壙	壙土上面	口径の一 11.2×4.8×6.6 部を欠失	密。	良好。素地 は灰白色	ロクロ成形後、底部削出し高台。体部外面の下部糸 を除いて鉄袖とかかり、黒褐色を呈す。	126-10
⑪	内 耳 鍋	擾乱層	体部約の (39.8) × (36.0) × み残る 5.4	密	良好。外側 は淡褐色で 内部は黒色	体部は内面気味に立ち上がり、外側にはメタ痕が残 る。内面の6ヶ所に幅広の耳を貼り付ける。外側の 一部にススが付着。	

第VII章 出土した遺物

cm前後的小皿と口径11cm前後・高さ3cm前後の中皿に大別でき、その比率は70:30となる。器面に黒斑を伴うものがあるが、油煙が付着したものを見られない。これら以外に軟質陶器製と石製の擂鉢、土製の鍋・壺・塙などの破片、中世の瓦片、凹石、それに国分寺の基壇化粧に使われたとみられる板状の角閃石安山岩切石（図157）、軒平瓦片などが出土した。

表45 S K 103出土土器・石製品（図148）

番号	種別 器形	出土位置 部	遺存率 口徑×底径×高さ	法量(cm)	胎土	焼成 色調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	土器質 埋土 中皿層	中部の一部を欠失	10.2×6.4×2.8	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は直線的に立ち上がる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。	137-3	
②	土器質 埋土 中皿層 土下層	完全	11.6×6.0×2.9	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は直線的に立ち上がる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。	137-2	
③	土器質 埋土 中皿層	完全	11.5×6.8×3.0	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部外面には指ナデによる段がつく。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
④	土器質 埋土 中皿層	ほぼ完全	11.1×6.2×3.5	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部外面には指ナデによる段がつく。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑤	土器質 埋土 中皿層	口辺の一部を欠失	10.6×5.8×2.9	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は直線的に立ち上がる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑥	土器質 埋土 中皿層	ほぼ完全	10.7×7.0×3.0	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部の底部近くは直立気味、その上は直線的に立ち上がる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑦	土器質 埋土 中皿層	口辺を僅かに欠失	11.4×6.2×3.0	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部外周に立上る。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑧	土器質 埋土 中皿層	口辺を僅かに欠失	11.0×6.2×3.3	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は直線的に立ち上がる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。器壁は全体的に厚め。		
⑨	土器質 埋土 小皿層	完全	7.7×5.4×1.8	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は直線的に立ち上がり、口唇部外面は僅かに面部外面は黒灰色	137-4	
⑩	土器質 埋土 小皿層	ほぼ完全	7.3×4.8×1.4	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は外溝気味に立ち上がる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑪	土器質 埋土 小皿層	完全	7.3×5.1×1.7	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は外溝気味に立ち上がり、口辺はほぼ直立する。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑫	土器質 埋土 小皿層	口辺のみを欠失	6.2×4.2×1.8	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は僅かに内溝気味に立ち上がる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑬	土器質 埋土 小皿層	完全	7.2×4.0×1.3	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	体部は直線的に立ち上がるが、外面には指ナデによる段がつく。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑭	土器質 埋土 小皿層	ほぼ完全	7.5×5.1×1.5	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	口縁部外面は面取りされ、直立気味となる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
/	白磁塊	埋土 下 小破片	(9.4)×(4.8)×(2.8)	密。灰褐色	硬質。地は白色で、透明釉がかかる。	ロクロ成形後、底部を削り出して高台を造り、さらにそれを削り込んで四脚状に造る。		
⑮	筒型土製品	埋土 上 小破片	(9.6)×(10.0)×(3.6)	粗。砂粒を含む	良好。赤褐色。	ロクロ成形後、底部を糸切りとみられる。		
⑯	花瓶	埋土 中 下部の2段分のみ残存	(最大径5.5)×(最小径3.5)×(高さ4.3)	粗。砂粒を含む	良好。酸化。	外側には輪横状に段を設け、内面には径2.0~2.5cmの孔を設ける。上段は網眼状に開く形状とみられる。ロクロ左回転、底部は糸切り無調整。		
⑰	陶器耳壺	埋土 下 下半部を主に数片が残存。	(12.4)×(12.4)×(17.3)	粗。石英・褐色鉱物を多く含む。	硬質。全体	輪横成形後、体部外面下部をへら削り。頭部附近に3条からなる波状文を施す。口辺は折り返して造られる。外面に耳を付けるが個数は不明。	140-2	
⑲	軟質陶器鉢	埋土 下 口辺の一部を欠失	28.3×9.8×11.3	粗。砂粒、石英等を含む。	やや軟質。	輪横成形後、底部は静止糸切りで無調整。注口1ヶ所。破損後2次焼成を受けた痕跡がある。	140-1	
⑳	石擂鉢	埋土 下 3片に折損するが、ほぼ完存。	31.0×15.0×12.8	安山岩	暗灰色	半球状の石材を調整して造る。内面下には3本程度を単位とする条線がつけられており、使用痕も明瞭。注口は1ヶ所。		

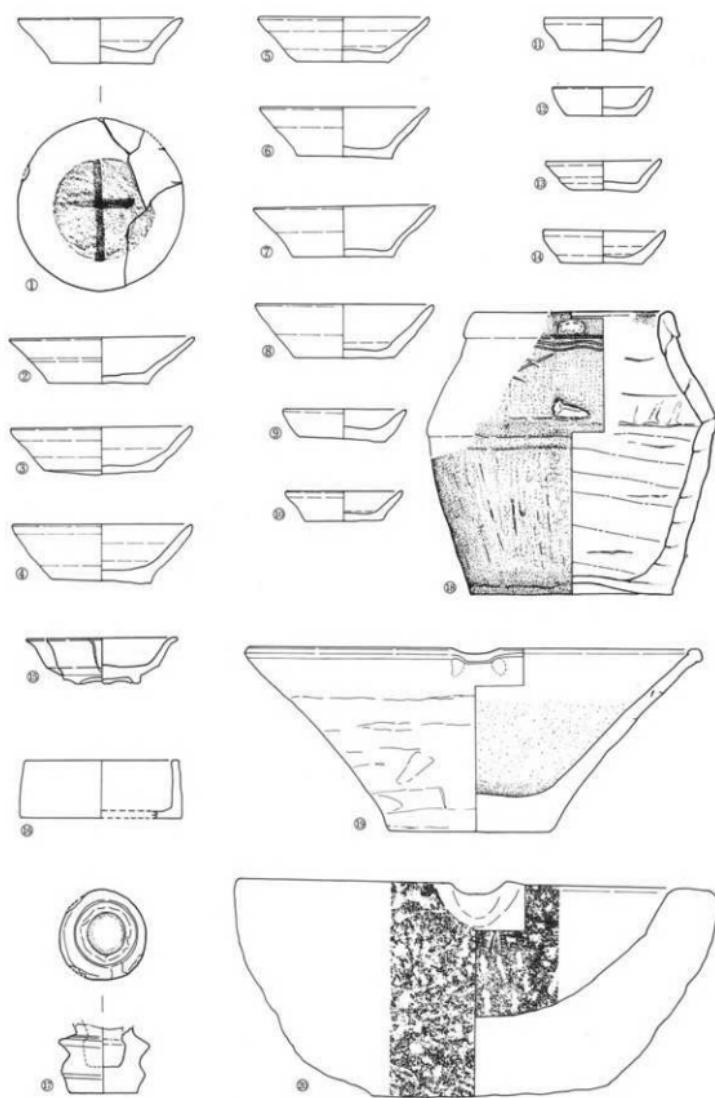


図148 SK103出土土器・石製品 1/3

第VII章 出土した遺物

第26次調査区出土土器（位置・図70、遺構・図71・72、PL. 139）

位置：N25°~56' W 6°~30'

出土状態：金堂の北西の第26次調査区では、平安時代から中世にかけての多数の土壙が検出された。この内S K33からは多數の土器類が（図139）、S K25からは大形の瓦片とともに瓦塔の屋根の隅に当たる部分の破片が出土している。また井戸跡も7基が検出されたが、これらはいずれも中世に属するものとみられる。これらの埋土には多數の瓦片・礫などとともに土師質の皿、鉢、陶器片、石製白、金属製品、それに宝篋印塔や五輪塔の部分などの石造物などが多量に含まれていた。この内S E15から出土した板碑には至徳4年（1387）、五輪塔の地輪には永享8年（1436）の年号が刻まれている（図161）。またS E10から出土した宝篋印塔台石には応永20年（1413）、五輪塔の地輪には嘉吉元年（1441）の年号が刻まれたものがある（図161）。このように第26次調査区で検出された井戸跡から出土した石造物に書かれている年号は、14世紀後期から15世紀中期のものであり、伴出した土器類はこの年代に当たるものと見ることができる。第26次調査区ではE29から西で地山が一段深く掘り込まれた状態となっており、この部分にも瓦片、鍋などの土器片、礫が集中して在った。

表46 第26次調査区出土土器（図149）

番号	種別 器 形	出土位置 部 位	遺存率 部 位	法 量 (cm) 口徑×底径×器高	胎 土	焼 成 調 色	器 形・技 法 等 の 特 徴	PL番号
①	土 師 質 皿	S E11 埋土	口縁一部 欠失	11.9×7.1×3.3	やや粗 淡褐色	良好。酸化 良好。酸化 淡褐色	体部は直線的で、口縁端部外面がやや面取りしたよ うに尖る。ロクロ左回転糸切無調整。	139-1
	土 師 質 皿	S E11 埋土	口縁一部 欠失	11.4×8.1×3.4	やや粗 淡褐色	やや軟。酸 化外面淡褐色 色、外面明 橙色	体部はやや直線的で、口縁外側で面取りしたように 端部が尖る。ロクロ右回転糸切無調整。底部外周に 指顎圧痕あり。	
②	陶 器 皿	S E11 埋土	口縁一部 欠失	11.2×4.8×3.5	やや粗 淡褐色	良好。釉 色は灰白色	体部から口縁がゆるやかに内湾。高台は小さな削り 出し高台。内面は厚めに緑色の釉。見込部に重焼き のため輪状に釉をはぐ。外周は薄く灰褐色。釉はいざ れも滑りかけ。内面に重焼痕あり。	
	瓦 器 香 炉	S E11 埋土	底部弓脚 体部弓脚	—×(6.5)×—	粗。砂粒 多し	やや軟。温 元暗灰色	体部下半は丸く、中段に印花文。底部に足がつく(四 足か?)。足の貼付部および内面に指顎圧痕。彼はナ ズ。	132-2
④	土 師 質 鉢	S E11 埋土	底部弓脚 口縁弓脚	(26.3)×14.7×5. 9	やや粗。 赤色粒子	良好。酸化 淡褐色	体部は直線的に開く。底部は非常に厚い。ロクロ整 形。底部下半は紙へラ削り。左回転糸切無調整。	
	土 師 質 皿	S E12 埋土	口縁弓脚 欠失	7.4×5.9×2.1	やや粗 淡褐色	2次火熱 のため不 明。淡褐色	体部は厚手で短く立ち上がる。ロクロ左回転糸切 無調整。全周が油煙や炭化によって黒くなっている。 口縁の一部を欠くが、断面にも炭化物が付着して いるため、欠失後に使用か。	
⑤	土 師 質 皿	S E12 埋土	弓脚	10.4×(6.8)×2.9	やや粗。 細砂粒を 含む	良好。酸化 淡褐色	体部下半がわざかに外反し。体部は直線的。口縁は やや尖る。ロクロ左回転糸切無調整。	
⑥	灰 軸 皿	S E13 埋土	底部完形 口縁弓脚	12.0×6.1×3.0	密。精良	良好。還元。 釉は白色。 胎土は灰白色	体部はゆるやかに内湾。口唇部わざかに外反。付高 台は断面三角形で低く、丁寧にナデ。釉はさわめて 薄く、口縁内外面に濁けがけ。見込み部が平滑に磨 滅。転用硯か。	139-5
	土 師 質 皿	S E14 埋土	底部完形 口縁弓脚	(7.1)×5.2×1.9	やや粗 淡褐色	やや軟。酸 化淡褐色	体部は直線的に立ち上がる。体部外面にタク痕あり。 ロクロ左回転糸切無調整。	
⑩	土 師 質 皿	S E15 埋土	底部弓脚 口縁弓脚	(7.9)×(4.8)×2. 2	密	軟質。酸化 明橙色	体部は直線的で、口縁端部へ薄くなる。体部外面に タク痕あり。ロクロ左回転糸切無調整。	
	瓦 器 内耳 埋 土	S E11 埋土	胴部へ口 縁弓脚	(28.5)×—×—	粗。 多孔質。	やや軟。 化くすべ 地。暗灰色	体部はやや内湾しつわざかに外傾。口縁はわざか に内湾して開く。体部外周下端は横へラ削り。体部 外周に指爪痕。口縁部横ナデ。内耳は口縁部をへ こました後に貼付。	139-3
⑫	軟質陶器 甕	S E15 埋土	底部完形 胴部下半 の一部	—×9.9×—	非 常 に 粗。小球 を含む	やや軟。温 元暗灰色	体部下半は直線的。外周指爪痕。外周下端は回転へ ラ削り。ロクロ整形、左回転糸切無調整。	

第2節 土器類

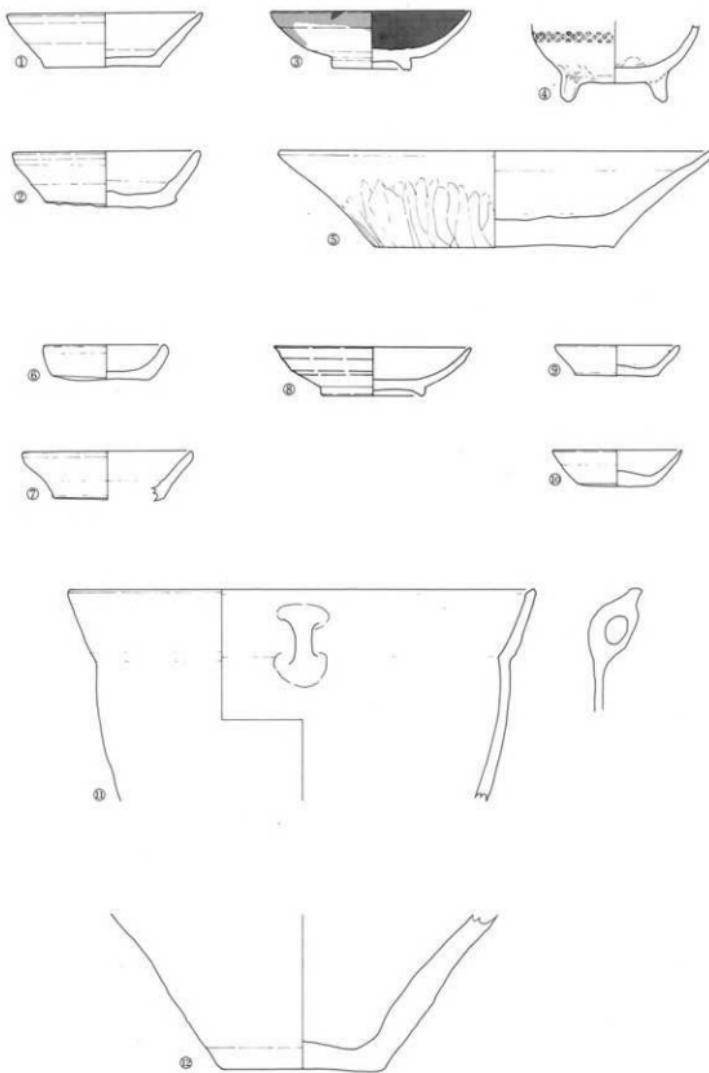


図149 第26次調査区出土土器 1/3
 ①～⑤・⑪：SE11 ⑥・⑦：SE12 ⑧：SE13
 ⑨：SE14 ⑩：SE10 ⑫：SE15

第VII章 出土した遺物

第20次調査区出土土器 (遺構・図69、PL. 139)

位置: N88~118・W15~E70

出土状況: 寺域北辺部一帯は後世の土採りなどのために、周辺に較べて低地状になっており、そのため国分寺に關係する遺構はほとんど破壊されてしまっている。表土は擾乱の様相が目立つが、その下は直ちに疊混じり砂土の地山となっており、この面でいくつかの土壤、井戸跡、溝跡と多数の小形柱穴などの遺構が検出されたが、これらはいずれも中世以降のものである。国分寺に関連するものとしてはSE04が確認されたのみであり、この埋土からは土師器片と瓦片が少量、それに基壇化粧に使用したとみられる角閃石安山岩切石が1個出土している。遺物の多くは表土中に含まれていたが、SE05の埋土中からは土師質の皿と土製の内耳鍋片、角閃石安山岩切石の破片が、SE06の埋土中からは土製の内耳鍋片が出土している。また小形柱穴埋土内にも土師質の皿片が入っており、地面上にも土師質の皿とその破片が多数散布する状態であった。

表47 第20次調査区出土土器 (図150)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法 量 (cm) 口径×底径×器高	胎 土	焼 成 色 調	器形・技 法等の特 徴	PL番号
①	土 師 質 中 皿	SE05 埋土	底部約~ 口縁約	(10.8) × (6.9) × 2.8	細砂粒 を含む	やや軟。酸 化淡褐色	体部中段でわざかに外に折れる直線的な体部。口唇部は少し脱皮。ロクロ左回転糸切無調整。	
②	土 師 質 小 皿		小柱穴	ほぼ完形 7.5×5.5×1.8	やや粗	やや軟。酸 化淡褐色	体部はわざかに外反しつ開く。ロクロ左回転糸切無調整。内面中央がやや盛り上がる。外面にヌタ痕あり。	
③	土 師 質 小 皿		小柱穴	完形 6.8×4.4×2.9	黒色細粒 を含む	良好。酸化 明橙色	体部中段が肥厚。ロクロ左回転糸切無調整。外面にヌタ痕あり。	139-6
④	土 師 質 中 皿		砂質土	底部約~ 口縁約	やや粗。 砂粒多し	良好。酸化 明橙色	体部は直線的。口唇部外面を面取りしたようにつまむ。ロクロ左回転糸切無調整。外面にヌタ痕あり。	
⑤	陶 器 器皿	表土	約約	(10.1) × (4.2) × 1.8	密	硬質。胎土 は灰黒色。 釉は黒褐色	浅くなめらかに内湾する無台の薄手の皿。ロクロ成形。体部外面は回転ヘラ削り。内面全面～口縁部に掛け掛け施釉。	
⑥	陶 器 器皿	表土	約約	(9.7) × (5.2) × 1. 8	密	硬質。胎土 は灰黒色。 釉は褐色	浅く内湾のみの体部内面に低い受部を持つ。ロクロ成形。釉は内面から口縁外面にやや厚く、体部以下に薄くハサ掛け。体部～底部外面へラ削り。	
⑦	陶 器 器皿	表土	約約。受 部先端欠	(11.8) × (4.8) × (2.4) (残存高)	密	硬質。酸化 胎土は暗赤 褐色。釉は 暗赤紫色	浅い直形の体部内面に薄手の高い受部が付く。ロクロ成形。体部～底部外面はラ削り。釉は内面のほとんどの部分に掛け掛け。受部外面、口縁部内面の一部に油埋付着。	
⑧	陶 器 碗		砂質層 体部上半 以上と高 台が消失	—×4.1×(4.2) (残存高)	密	硬質。胎土 は黄白色。 透明白褐色	硬質。胎土 は灰白色。釉 は繩がかかる 透明した 透明	
/	陶 器 台付灯明 皿	表土	口縁約欠 失	(8.5) × 4.7×5.6	密	硬質。胎土 は灰白色。釉 は繩がかかる 透明	硬質。脚部から口縁まで一気にロクロで挽き、体部は直線的に開き、脚部は中空。受部はやや内傾し、半円形の切り欠きを持つ。ロクロ右回転糸切無調整。底面を除く全面に灰褐色を施釉。	
⑩	瓦 器 内耳鍋	SE05 埋土	底部欠失 程度残 存	27.1×18.9×14.9	細砂粒を 含む	良好。燒 成表面黑色。 断面暗灰色	体部はわざかに内湾しつ垂直に立ち上がる。口縁との境で外に折れ、やや内湾する口縁が開く。体部上面をロクロ部内外面面ナデ。体部内面下部は横ナデ。内耳は2ヶ所、粘土柱状のものを貼付、ナデ調整。外側は2次の火熱によってススが付着。	140-5
⑪	土 師 質 鍋	SE05 埋土	底部欠失 弓弱	(30.9) × (23.4) × (18.1)	細砂粒多 し	良好。酸化 灰褐色。体 部外面黑色	器形・技法は共に同じ。内耳部は欠失か。	
⑫	瓦 鉢	表土	約約	(22.6) × (20.2) × 12.4	粗。細砂 粒を含む	軟質。燒成 表面黑色。 断面灰色	体部はわざかに内湾しつ直立。口縁部は肥厚し、上面を水平に面取り。体部・底部内面は横ナデ(不整調)。表面はぼうぼうに荒れ、調整等不詳。	
⑬	瓦 器 内耳鍋	表土	口縁～体 部弓 (内 耳付近の み)	(35.6) × (33.0) × 5.6	やや粗 細砂粒を 多く含む	良好。燒成 表面黑色。 断面暗灰色	体部は低くやや外傾して立ち上がる。体部内外面～底部内面は横ナデ。手捏ねの幅広い内耳を貼付。体部外面に輪積痕を残す。強い燒成による他、外面は2次の火熱によってススが付着。	

第2節 土器類

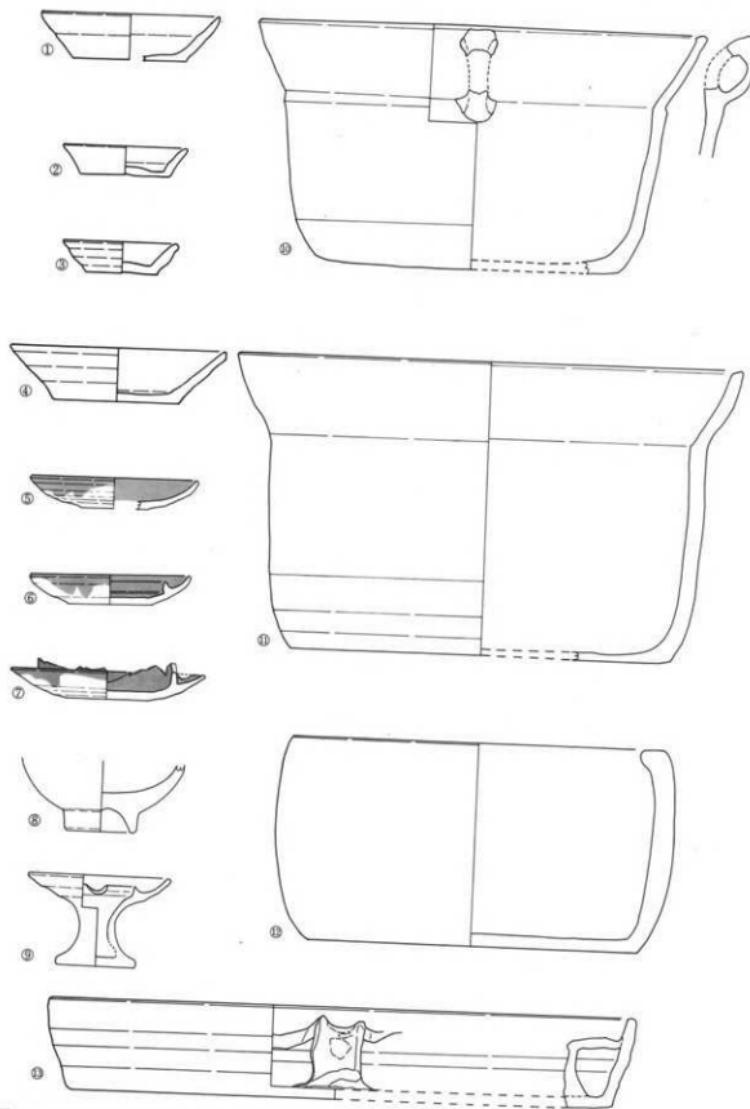


図150 第20次調査区出土土器 1/3

第3節 土 製 品

瓦と土器以外の土製品には、塑像片、瓦塔片、紡錘車、羽口、埴壙、それに性格不明の球状土製品などがある。

- 塑 像 片** その中で国分寺に関連するものとして注目されるのは塑像片である。これは全部で3個が出土しているが、その内の2個は金堂の南東で検出された瓦溜からの出土であり、他の1個は塔基壇上面に散布する瓦片と小石に混じっていたのが採集されたものである。瓦溜からの内の1個は、側面の一端は裏側に折れ曲がる形状をしていることから、角の部分であることが分かり、表面に付けられた「十」形の細い線は粘土を貼り合わせる上での目印とみられる。もう1個は小片であるが、表面にはヘラ状工具により衣のひだの重なりとみられる波形が作られている。この裏面は粘土が剥離した状態となっている。この2個は同一個体である可能性もあるが接合はない。両者とも彩色の痕跡はみられず、表面は黒色に近い色調となっている。しかし後者の裏面は鈍い肌色を呈しており、低い温度の火を受け、表面にススが付着したものとみられる。ただしそれが作製の技法上のものか、あるいは2次的なものかについては明らかでない。塔跡で採集された頭部の破片は、残存部分が少なく全体像を復元することは困難である。ただ頸から下や側面の後半部はヘラで押さえただけの丁寧さに欠ける仕上げとなっており、裏面には平坦な部分があることから後頭部が作られていたとは考えにくい。この像は立像ではなく、前身のみがリーフ状に作られたものとみられる。表面と裏面の状態から、これも前の2個と同様に低い温度での焼成を受けたものとみられる。今回の調査で出土した仏像を始めとする諸像類は、この塑像片3個のみであり、金銅製あるいは木彫のものの出土は全くみられなかった。
- 瓦 塔 片** 次に国分寺に関連するものに瓦塔がある。これは全部で11片が出土しているが、いずれも屋蓋の部分で、小片である。これの瓦の表現法には、半截竹管状工具で幅0.9cmの丸瓦のみを作るものと、ヘラ状工具により幅1.3cmの丸瓦と幅1.9cmの平瓦を作るものの2種類がある。前者は良好な焼成で赤褐色を呈し、後者はやや軟質で淡灰褐色を呈している(PL. 115)。出土位置は、東大門周辺の地山面、塔跡東側のS K04、金堂北西のS K25の埋土中とばらつきがみられる。いずれも小破片であるため、原形状の復元は困難であり、また本来在った場所を特定することも困難である。

表48 土製品(図151)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法量(cm) 幅×奥行×高さ	胎 土	燒 成 調	器 形・技 法 等 の 特 徵	PL番号
①	塑 頭 部	塔基壇上 面表探	頸から右 眼部分にか けて当が 残存	(5.3) × (3.8) × (7.0)	密。微小 な白色粘 土を多く 含む。	軟質。表面 は黒色。裏 面の一部は 淡褐色。	額・口・鼻は、ヘラ状工具により細い凹凸と沈線で丁寧に作る。顔面はナデにより滑かに仕上げるが、頸 下部などは押さえただけのやや雑な作りである。裏面は平坦であり、後頭部が作られていた痕跡はない。 中心部には縱方向に輪を通し、それにヒモを巻きつけたとみられる痕跡がある。	4-2
②	塑 像	15トレン チ瓦溜	台座と帶 の下端と みられる 部分のみ。 3片が 接合。	(14.8) × (3.3) × (14.5)	やや粗。 微小な白 色粘土、 砂粒を多 く含む。	軟質。低溫 度の焼成を うけてい る。全体に 黒色である が、表面の 一部は灰褐 色。	裏面に平坦で細い目の布痕がついていることから、台面に布を敷き粘土板を重ねながら形成したとみられる。垂れた帶の下端とみられる部分を、粘土を削り残して丁寧な模形で表現する。側面と下縁部にはク シ状工具で界線を設け、その内部に竹管状工具を刺 突して円形文様を施す。界線の内側はナデで滑かに 仕上げる。外側はクシ状工具で平行する比較を施す。	4-2

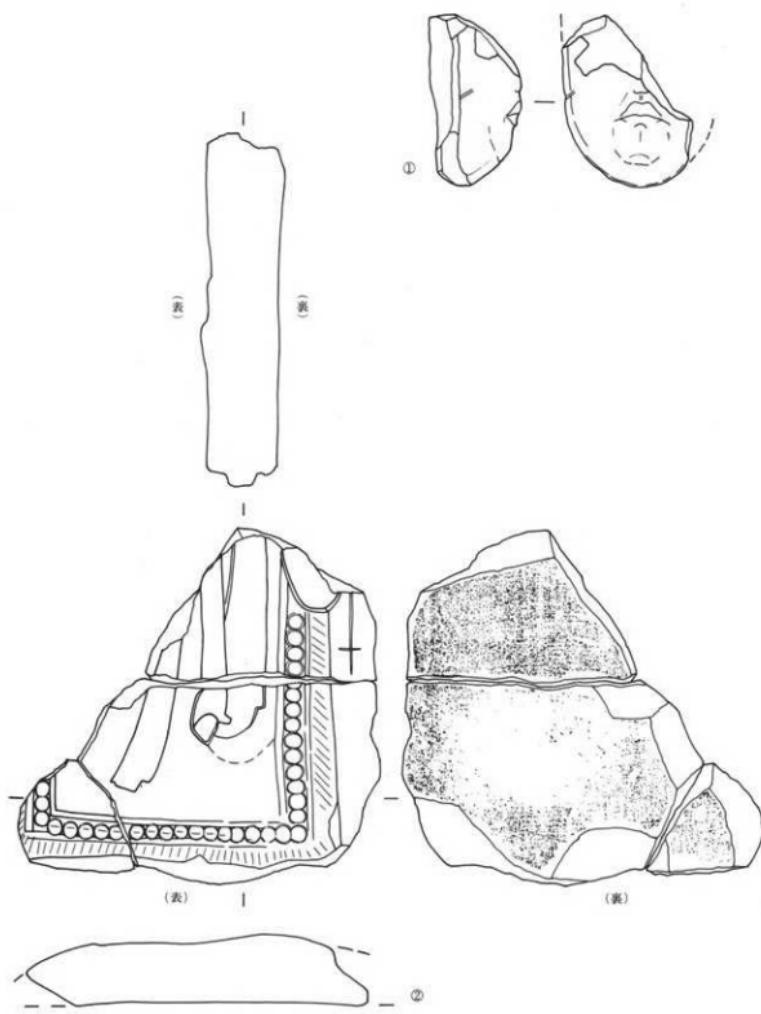


図151 土製品・塑像 1/2

第4節 金属製品

今回の調査で出土した金属製品の数量と種類はそう多くはない。鉄製品には釘、刀子、帶の鉗具、銅製品には飾金具、椀、鰐口、刀子の柄、簪などがある。

釘 このうち釘は塔跡、金堂跡、南大門跡などの大規模な建造物の周辺から瓦片に混じっての出土が目立つ。大きさにはばらつきがあり、大型のものの中には瓦釘も含まれているとみられるが、瓦片にはその使用痕を伴うものは確認できない。刀子、鉗具の道具類は竪穴式住居跡に伴うものと、土壤や中世の井戸の埋土に含まれるものがある。後者は廃棄されたものと判断される。仏教に関する遺物には、金堂跡の表土から出土した鍍金した飾り金具があるが、これは両端に釘穴が作られていることから須彌檻などに付けられたものとみられる。これと同様なものは塔跡東側の第17次調査区の瓦敷面下部からも、小片が出

飾り金具 土していいる。この他にST03から出土した銅製鏡とSK77から出土した鰐口がある。銅挽

銅 鏡 口は密教法具の六器の一部とみられ、鰐口は銘文はないが器形から南北朝期のものと推定できる。いずれも中世の仏教用具であり、国分寺が廃絶した後この付近に寺院が設置されていた可能性を示すものである。

金 箔 片 これ以外には第17次調査区の瓦敷面の下部の暗褐色粘質土中から、金箔の微小片が小範囲に固まった状態で出土している。同様なものは塔跡南側の第30次調査区の攢乱層中からも見つかっている。これらの中には裏面に漆が付着したものがあり、一度使用されたものであることが分かる。

表49 金属製品 (図152・153)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法量(cm) 幅×奥行×高さ	材質	色調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	釘 (大型)	19次 表土	完形。腐 食が進む	1.0×1.3×27.5	鉄	赤褐色	上端はやや巾広気味となる。表面は全体に錆が進んでいる。	
②	釘 (中型)	19次 表土	完形。腐 食が進む	0.7×0.9×17.5	鉄	赤褐色	上端はつぶれて幅広となる。先端はL型に曲がる。表面は全体に錆が進んでいる。	
③	釘 (小型)	19次 表土	完形。腐 食が進む	0.5×0.7×8.5	鉄	赤褐色	上端はつぶれて幅広となる。表面は錆が進み、ひび割れを生じている。	
④	刀子	31次 S J 39床 面上	4片に削 れ。原形 は不明瞭	2.3×0.7×17.2	鉄	赤褐色	全体に錆食が進み、表面には錆が薄くつき脆い状態になっている。形状から刀子とみられる。	144-3
/	鏡 具	26次 S K33 埋土	完形。吊 具は腐 食が進む	4.5×6.7×0.8	鉄	赤褐色	ほぼ同型のものが他に1点出土している。全体に錆が進行し、脆い状態となっている。	144-1
⑤	鰐口	30次 S K77 底部	完形。吊 具は腐 食が進む	最大径13.8×5.0	銅。吊具は鉄製	灰緑色	座面・内区・外区・銚帯を僅かな段差によって区画する。座面は無文で、銚文は無い。耳と口の出は小さめである。吊具は鉄線を輪状にして作る。表面は錆食が生じ、荒れている。また剥れてやや厚みを減じている。	143-3
⑥								
⑦	銅 鏡	18次 S T03	完形	口径6.1×底径3.2 ×高さ2.8 高台 高0.35	銅	暗緑色	体部は底部近くで強い弧状に屈曲して、直立状に立ち上がる。口唇部は強く外側した形状となる。高台を削り出して造り、全体にロクロ感が残る。	
⑧	飾金具	25次 表土	L型に折 れ曲が る。完形。	1.9×0.1×6.6	銅	暗緑色	両端を山型に造る帯状の金具。表面には花または草の文様を細く打ち出す。全体に鍍金が施されていたとみられる。両端近くには小孔が穿かれている。表面は荒れている。	143-4
⑨	刀子	26次 S E 12 埋土	柄と身の 一部が残 る。	1.5×0.6×(12.0)	柄は銅、 身は鉄	柄は灰綠 色、身は赤 褐色	柄は長さ約9.5cmで、鋼板を折り曲げて重ね合せて造 り、身は柄と同幅とみられるが、錆の進行が著しく、約3cmが残存するのみ。	143-4

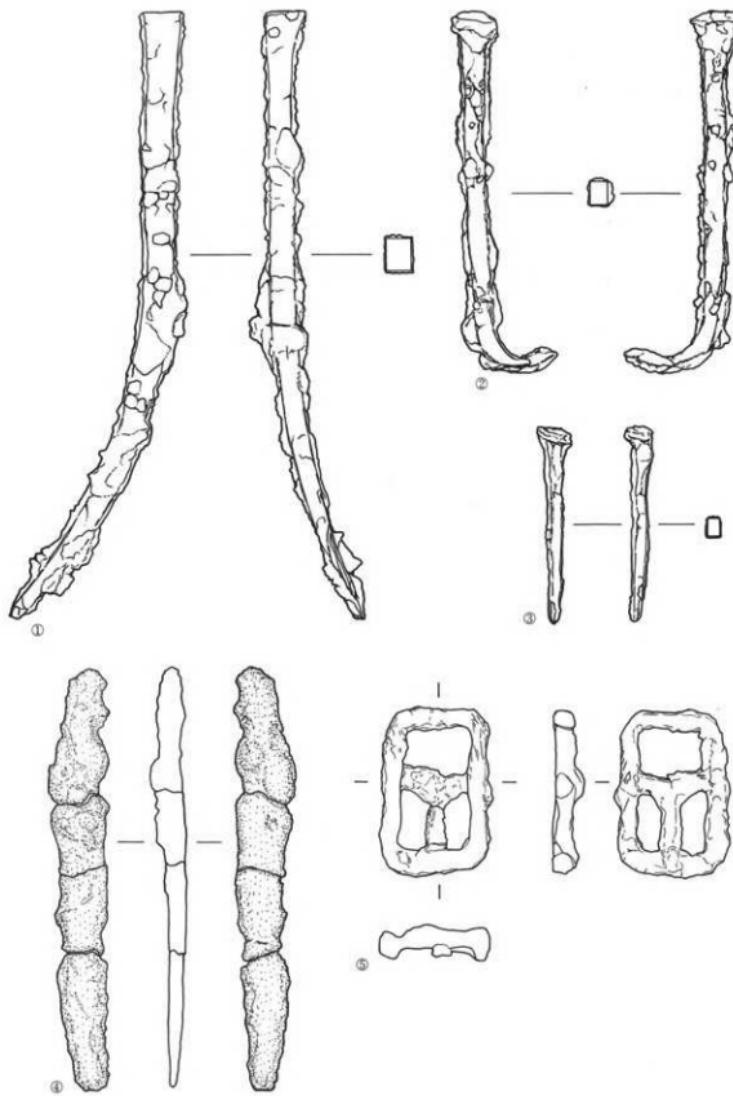


図152 金属製品(1) 鉄製品 1/2

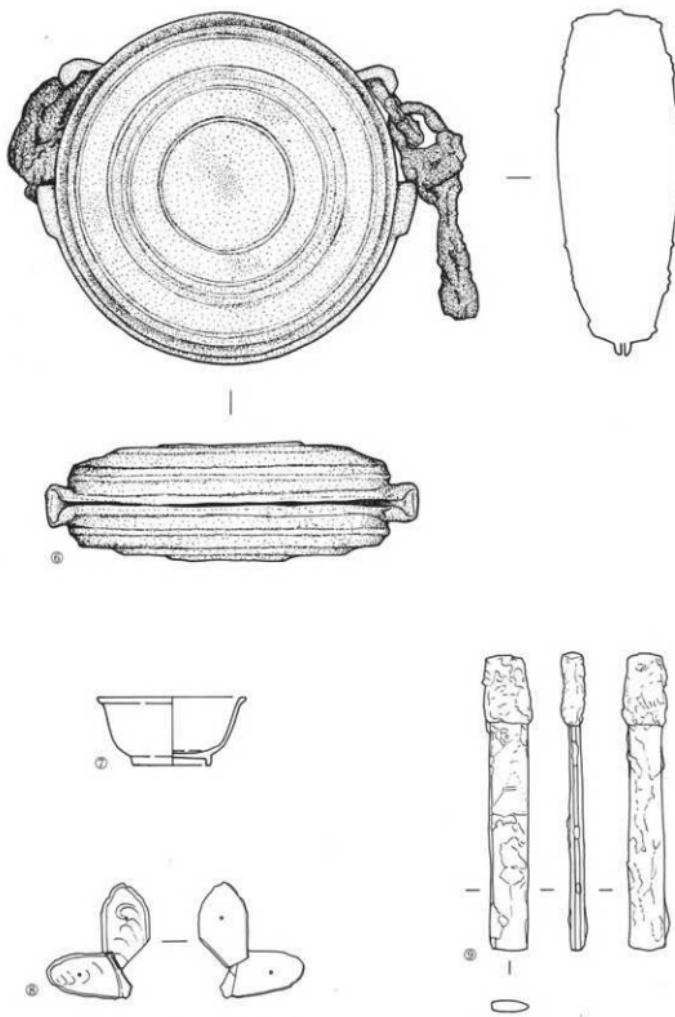


図153 金属製品(2) 銅製品 1/2

第5節 銅 錢

今回の調査では86ヶ所の遺構および位置から合計442枚・35種類の銅錢が出土している。

その種類と枚数、全体に対する比率をみると次のようになる。

種類と枚数

唐 錢	8枚・1種 (開元通宝) • 1.8%
-----	---------------------

北宋錢	152枚・25種・34.4%
-----	----------------

南宋錢	4枚・4種・0.9%
-----	------------

明 錢	34枚・4種・7.7%
-----	-------------

日本錢	244枚・1種 (寛永通宝) • 55.2%
-----	------------------------

出土地のうち墓壙は16ヶ所で、61枚が出土しており全体の約15%を占める。1基からの出土数は1~6枚であるが、攪乱による散逸があるためこれによって本来の副葬枚数を判断することはできない。多数の墓壙が検出された金堂基壇の上と付近の表土および攪乱層中からは307枚・全体の69.5%の出土が見られたが、これらは本来は墓壙に伴ってあったものが攪乱のために混入したものであろう。墓壙跡が多数検出された第29・30次調査区の表土と攪乱層からの出土が多いことも、同様な理由によるものと考えられる。また金堂跡付近からは、寛永通宝が全出土数244枚の内の213枚・87.3%が出土している。これは近年まで墓地として使われており、近世の墓が多かったことによるものであろう。同様に近年まで墓地として使われていた第21次調査区でも16枚・6.6%が出土している。以上の墓壙からの出土状況を見てみると、直接それに伴って出土したものの中で初鋤年が最も新しいのは1411年の永楽通宝であることが分かる。また永楽通宝は出土数が24枚と3番目に多い。確認された遺構の様相から、国分寺が廃絶した後寺域の北半部が墓域化したことが明かとなったが、この銅錢のあり方からそれが15世紀前期までは続いていることが分かる。これはまたそれに伴って出土した土師質の皿などの遺物の年代を比定する上での1つの資料となる。墓壙以外の遺構としては、土壤の11ヶ所から26枚、小形柱穴の1ヶ所から1枚、S D01底部から1枚の出土があった。またS J 25の覆土中から6枚が出土しているが、これはS J 25の覆土を掘り込んで造られたS T 38・39・40などに副葬されたものが、覆土の一部として掘り上げられてしまったものである。

寛 永 通 宝

永 楽 通 宝

次に所収した表と図について説明をしておく。

表50は銅錢の出土位置と名称・枚数を調査トレーニング・次順に一覧表にしたものである。出土地・遺構は取り上げた時の注記によって示してあり、遺構の特定が困難なものについては、例えば「墓壙」といったように表示してある。また取り上げた時の状況によって、同一遺構のものが2つ以上の番号にわたっているものもある。名称・枚数では、破片のものと数枚が塊となってはがれず枚数が確認できないものも、便宜上それを1枚として数えである。

表51は銅錢を初鋤の順に並べたもので、名称と時代・初鋤年を示したものである。

図154は出土した銅錢の拓影で、それぞれの番号は表51の名称の番号を示す。

図155は墓壙・土壤から出土した銅錢の拓影で、それぞれの出土遺構は欄外下段に示してある。

表50 出土銅錢一覧 (図154・155)

番号	調査次	出 土 地 ・ 道 横	名 称	枚 数	備考
1	5 T	(不明)	元豐通宝	1.	寛永通宝 1
2	5 T	S K02	寛永通宝	1	
3	5 T	E124・N37長方形縫込み 褐色土塊混褐色 土中	熙寧元宝	1	
4	9 T	S101~102墓壙中	嘉泰通宝	1.	永樂通宝 1
5	13 T	E115 黒褐色土	熙寧元宝	1.	元豐通宝 1. 大觀通宝 1. 寛永通宝 2
6	15 T	E88 暗褐色土	寛永通宝	1	
7	15 T	E80~90 焼土混暗褐色土	嘉定通宝	1.	不明 2(解説不能)
8	16次	E125~129 表土	熙寧元宝	1	
9	16次	S104・E140 摂乱層	熙寧元宝	1.	元祐通宝 1
10	18次	S T 3	祥符元宝	1.	紹聖元宝 1
11	18次	S T 4	皇宋元宝	2.	熙寧元宝 2. 元祐通宝 1
12	18次	S T 5	紹聖元宝	1.	淳熙元宝 1. 紹定通宝 1. 洪武通宝 1
			不明	1	(解説不能)
13	18次	S T 6	熙寧元宝	1.	皇宋通宝 2. 洪武通宝 1
14	18次	S T 8	熙寧元宝	1.	元豐通宝 1. 政和通宝 1
15	18次	S T 9	天聖元宝	1.	皇宋通宝 1. 元祐通宝 1. 聖宋元宝 1
16	18次	S T 10	天祐通宝	1.	皇宋通宝 2. 元祐通宝 1. 洪武通宝 1
			永樂通宝	1	
17	18次	墓壙	皇宋通宝	1.	永樂通宝 1. 不明 1(解説不能)
18	18次	(不明)	咸平元宝	1	
19	18次	墓壙	咸平元宝	1.	景祐元宝 2
20	19次	S32~38・W37~40 表土	皇宋通宝	1	
21	19次	S10~12・W30~34 表探	元豐通宝	2.	政和通宝 1
22	19次	S12.6~15・W50~52 表土下層	政和通宝	1	
23	19次	S 4~9・W30~33 表土下層	熙寧元宝	1	
24	19次	S12.6~15・W30付近 ローム混黒褐色土	天聖元宝	1	
25	19次	S12.6~13.6・W26~28 焼土混暗褐色土	不明	3	(破片)
26	20次	N89・E7~8 小柱穴埋土中	不明	1	(解説不能)
27	20次	N88~15・E31~50 表土	嘉祐元宝	1.	元祐通宝 1. 寛永通宝 3
28	20次	N106・E10 表土	寛永通宝	2	
29	21次	N130~135・W126~128 表土	寛永通宝	16	
30	23次	S103~109・E34~37 表土	元豐通宝	1	
31	23次	S104~107・E32~36 表土下層	政和通宝	1	
32	24次	S90・W62 黃褐色土上面	元豐通宝	1	
33	25次	N18・E38~40 摂乱層	元豐通宝	1.	紹聖元宝 1. 寛永通宝 57
34	25次	S C-S 区 摂乱層	熙寧元宝	1.	元祐通宝 1. 寛永通宝 11. 不明 2(破片)
35	25次	南西隅墓壙	元豐通宝	1.	元祐通宝 1. 政和通宝 1.
36	25次	SW-N区 摂乱層	開元通宝	3.	祥符元宝 1. 天聖元宝 1. 皇宋通宝 3.
			熙寧元宝	2.	元豐通宝 3. 元祐通宝 2. 聖宋元宝 1.
37	25次	S E-N区 摂乱層	永樂通宝	1.	寛永通宝 8. 不明 2(解説不能)
			淳化元宝	1.	景德元宝 1. 皇宋通宝 1. 永樂通宝 1.
38	25次	S C-S 区 表土	寛永通宝	19.	不 3(解説不能 1. 破片 2) 錐状 2
39	25次	S C-S 区 表土下層	寛永通宝	3.	不 1(破片)
			皇宋通宝	2.	至和元宝 1. 熙寧元宝 1. 元祐通宝 1.
40	25次	S E-N区 表土	寛永通宝	11.	不 2(解説不能 1 破片 1)
41	25次	S C-N区 摂乱層	寛永通宝	10.	不 3(解説不能 1. 破片 2)
42	25次	表土	天聖元宝	1.	皇宋通宝 1. 元豐通宝 2. 寛永通宝 14
43	25次	S C-N区 表土	永樂通宝	5.	寛永通宝 10. 不明 5(解説不能 1. 破片 4)
44	25次	S E-S 区 (不明)	開元通宝	1	
45	25次	N17・E37 摂乱層	景祐元宝	1.	宣德通宝 1
46	25次	N C 区 摂乱層	寛永通宝	2	
47	25次	S C 区 摂乱層	元豐通宝	1.	寛永通宝 16. 錐状 5
48	25次	附鉄石列南側墓壙	寛永通宝	3	
49	25次	SW-S 区 摂乱層	永樂通宝	1	
50	25次	西ペルト23層中	大綱通宝	1	
			天聖元宝	2.	寛永通宝 2

第5節 銅錢

51	25次		開元通寶 1. 景德元寶 1. 皇宋通寶 1.熙寧元寶 5. 元豐通寶 1. 紹聖元寶 1. 政和通寶 1. 洪武通寶 1.
52	25次	S C—N区 撒乱层	水永通寶 2. 寶永通寶 47. 不明 2 (解説不能)
53	26次	S K32 南北括區埋土上面,	不明 3 (解説不能) 1. 破片 2)
54	27次	S K62 厚混り暗褐色土	皇宋通寶 1
55	29次	S 28~36・E 29~36 表土下層	不明 1 (破片 1). 摺塊 3
56	29次	S 35~38・E 29~36 黄褐色土混暗褐色土	永樂通寶 1
57	29次	S K70 埋土	開元通寶 2. 元祐通寶 4. 壽宋元寶 1. 永樂通寶 1.
58	29次	墓壙	不明 1 (解説不能)
59	29次	S T52	元符通寶 1. 永泰通寶 1
60	29次	S J 25NW区覆土	皇宋通寶 1. 元豐通寶 1. 元祐通寶 1. 洪武通寶 1.
61	30次	表土	至道元寶 1. 治平通寶 1.熙寧元寶 1. 政和通寶 1.
62	30次	S 53~55・W 65~67 表土下層	永樂通寶 2
63	30次	S 93・W 46 土壤底部	熙寧元宝 2. 元豐通寶 2. 洪武通寶 1. 永樂通寶 1.
64	30次	S 95~96・W 50 暗褐色土	祥符元宝 1. 不明 1 (破片 1)
65	30次	S 105・W 52 表土下層	天聖元宝 1. 開禧元寶 1. 元豐通寶 1
66	30次	S T69	至道元寶 1
67	30次	S T70	元豐通寶 2. 政和通寶 1. 永樂通寶 1.
68	30次	S T73	天聖元宝 1. 治平元寶 1
69	30次	S T73	景祐元宝 1
70	30次	S T73	聖宋元宝 1. 洪武通寶 1. 不明 3 (解説不能)
71	30次	S K77	至和通寶 1
72	30次	S K79	皇宋通寶 1
73	30次	S 50・W 41~46 撒乱层	咸平元宝 1. 熙寧元寶 1. 大中通寶 1
74	30次	S 55・W 46 表土下層	天聖元寶 1
75	31次	S K96	景德元宝 1. 嘉祐元宝 1. 不明 4 (解説不能) 1. 破片 3)
76	31次	S 97・E 9 土壤	不明 1 (解説不能)
77	31次	S D01 S 100~111・E 9 底部	嘉祐通寶 1
78	32次	N18~23・E 138~144 表土	不明 1. (解説不能)
79	33次	N18・E 110 (不明)	元豐通寶 1. 寶永通寶 1
80	33次	S K103 埋土上部	元豐通寶 1
81	33次	S K103 撒混層	開元通寶 1. 皇宋通寶 1
82	34次	N99・W28 桂柱埋土	寶永通寶 2
83	34次	N100~110・W27~30 土壤	不明 1 (解説不能)
84	34次	N121~130・W27~30 北端落込覆土	嘉祐通寶 1
85	34次	N126~127・W27~30 小土壤	不明 1. (解説不能)
86	35次	S 28~29・W53~55 表土	元豐通寶 1. 寶永通寶 1
87	35次	S 34~36・W53~55 表土	嘉祐通寶 1
88	35次	S 35・W23 上部瓦敷布面	嘉祐元寶 1
89	35次	S 43・W30 瓦敷布面	元豐通寶 1
90	35次		大平通寶 1. 咸平元寶 1. 天禧通寶 2. 皇宋通寶 1.
91	無注記		天禧通寶 1. 元祐通寶 1. 治平通寶 1. 洪武通寶 1.
			永樂通寶 4. 寶永通寶 1

表51 出土銅錢の種類

No	名 称	時 代	撰年	No	名 称	時 代	撰年	No	名 称	時 代	撰年	No	名 称	時 代	撰年
1	開元通寶	唐	621	10	景祐元宝	北宋	1034	19	熙寧重寶	北宋	1068	28	嘉泰通寶	南宋	1201
2	太平通寶	北宋	976	11	皇宋通寶	北宋	1039	20	元豐通寶	北宋	1078	29	嘉定通寶	南宋	1208
3	淳化元宝	北宋	990	12	至和通寶	北宋	1054	21	祐祐通寶	北宋	1086	30	紹定通寶	南宋	1228
4	至道元宝	北宋	995	13	至和元宝	北宋	1054	22	聖聖元宝	北宋	1094	31	大中通寶	明	1361
5	咸平元宝	北宋	998	14	嘉祐通寶	北宋	1065	23	符祐通寶	北宋	1109	32	淳祐通寶	明	1368
6	景德元宝	北宋	1004	15	嘉祐元宝	北宋	1065	24	聖宋元宝	北宋	1101	33	永樂通寶	明	1411
7	祥符元宝	北宋	1008	16	治平通寶	北宋	1064	25	觀慶通寶	北宋	1107	34	宣德通寶	明	1433
8	天禧通寶	北宋	1017	17	治平元宝	北宋	1064	26	政和通寶	北宋	1111	35	寔永通寶	江 戶	1636
9	天聖元宝	北宋	1023	18	熙寧元宝	北宋	1068	27	熙熙元宝	南宋	1174				

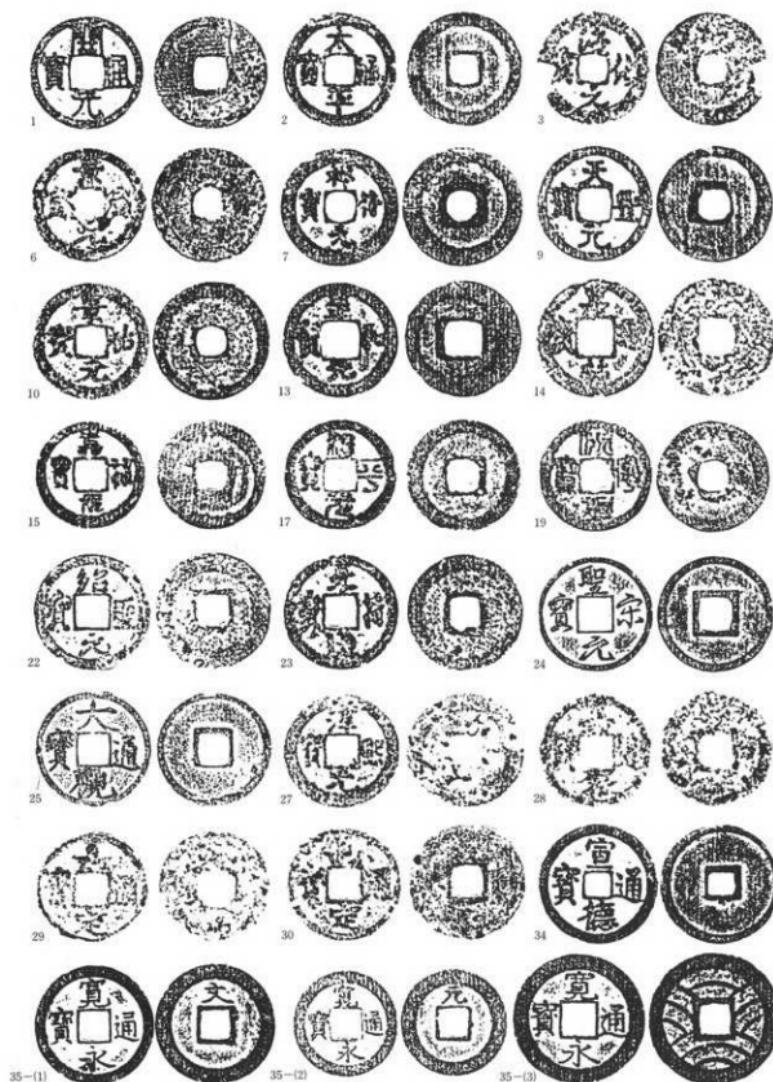


図154 銅錢拓影(1) 1/1 左側:表、右側:裏、数字は表51 の名称番号を示す

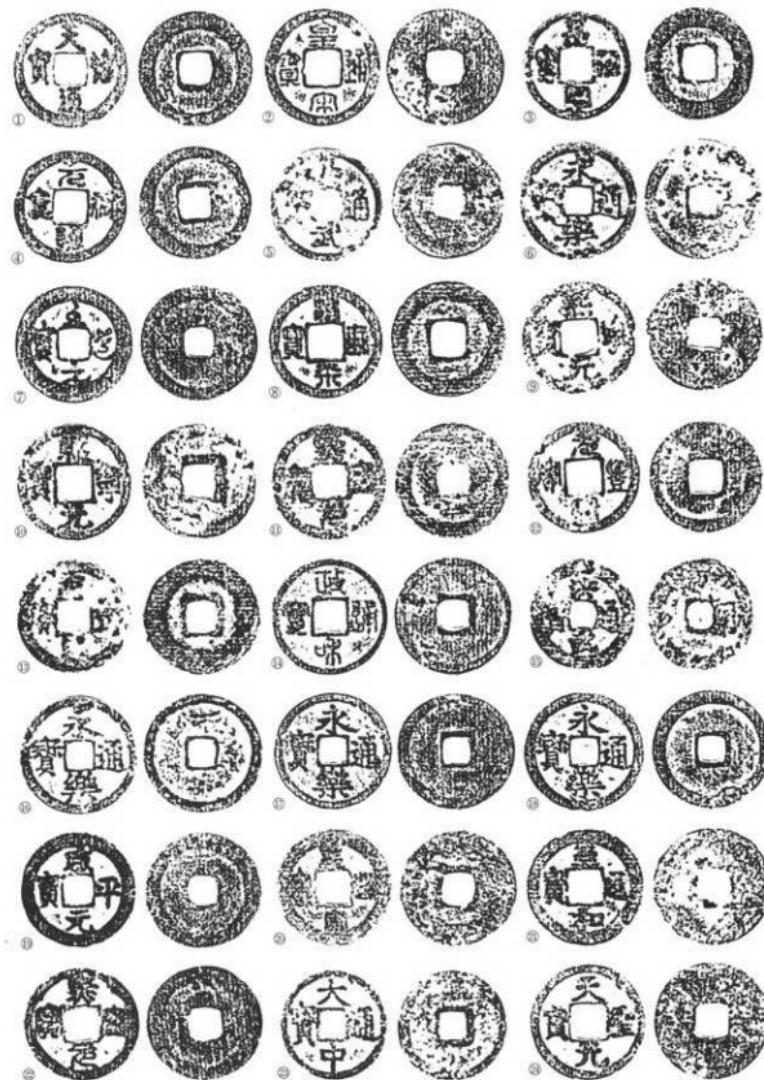


図155 銅錢拓影(2) 1/1 左側:表、右側:裏

①~⑥: ST10 ⑦~⑬: ST25
 ⑭~⑯: ST73 ⑰: SK77

第6節 切 石

角閃石安山岩切石
塔基壇化粧壇正積
南大門跡出土

SK 103 出土

伝統的な素材

凝灰岩切石

金堂基壇

寺域内の各所から角閃石安山岩と凝灰岩の切石の出土があった。このうち角閃石安山岩切石は塔基壇東縁の中央部でブロック状に加工されたものが6個一列に並んで据えられた状態であるのが確認された(図156-①)。これは原状を保っており、基壇化粧の最下部の残存部分であると判断された。このことから塔基壇は角閃石安山岩の切石を用いて化粧されていたことが分かった。これによって当初は角閃石安山岩切石を積んだ、比較的簡素な構造の化粧であると推定した。その後、この南側に接して造られた土壙SX02の盛土から出土し切石の中に、「L」型の切込みをもつもの、棒状のものなどがあることが確認され、これらの組み合わせを検討した結果、壇正積である可能性が高いと判断された。同様な角閃石安山岩の板状の切石は南大門の基壇上面からも出土している(図156-②)。この平坦な一面は裏面に較べてノミ痕が摩滅した状態となっており、床に敷かれていた可能性が考えられる。SK 103の埋土中から出土した板状の切石は、表面は平坦に仕上げられており、やや摩滅した状態がみられる。その裏側の一辺に「L」型の切込みが造られており、同型のものと組み合わせて使用されたものであることが分かる(図157)。ここに使用されている軽石質の角閃石安山岩は、6世紀中期に榛名山が噴火した際の噴出物で、親音山古墳(高崎市)、続社二子山古墳(前橋市)などの横穴式石室の構築材として使われたものである。原石は榛名山麓の河川上流域などで採取できたとみられ、いわばこの地域の人々の扱い慣れた、伝統的な素材であると言えることができる。

金堂基壇周辺、その南東の第15トレンチで検出された瓦罐などからは、凝灰岩切石が出土している。これらの中には角閃石安山岩の場合と同じように「L」型の切込みをもつものや棒状のものがある(PL. 145)。凝灰岩切石の出土地は金堂とそれに関係する遺構が多く、角閃石安山岩切石の出土位置とは異なっている。金堂基壇の化粧石で原位置を保っているものは確認できなかったが、こうした出土状況から凝灰岩切石による壇正積であったと推定された。塔基壇の化粧とは異なった石材が使用されており、塔と金堂に意匠上の統一性が図られていなかったことに注目される。

表52 切石(図156・157)

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法量(cm) 口径×底径×高さ	胎土	焼成 色調	器形・技法等の特徴	PL番号
①	切石	19次 SB 03 基壇東縁	完形	29.7×16.0×22.0	角閃石安 山岩	淡灰褐色	軽石質の石材をブロック状に削り出し、ややがん だ直体で造る。各面ともほぼ平盤であるが、ノミ 痕が切跡に残ったままの扱い仕上げである。使用に よる磨滅は認められず、風化も進んでいない。	146-1
②	板状切石	23次 SB 10 基壇上面	部分	(23.5)×5.8×20. 5	角閃石安 山岩	淡灰褐色	軽石質の石材を板状に加工したもの。平面形は平行 四辺形を示すが一部を欠失する。各面ともノミ痕 はあるが滑かに仕上げられる。表とみられる側は表 面に磨滅がみられ、裏面はカマボコ型を呈し、ノミ 痕がよく残る。	146-2
③	板状切石	33次 SK 103 埋土下層	完形	30.0×28.3×9.0	角閃石安 山岩	灰色	軽石質の石材を板状に加工したもの。上面はノミ痕 が残るが平盤に仕上げられており、表面は磨滅のた め滑かな状態となっている。側面・下面は割く削り出 しましたまで、凹凸が多い。下面の一辺に4.2×4.0cm でし型の切り込みが造られており、この面は平盤に 仕上げられている。	146-2

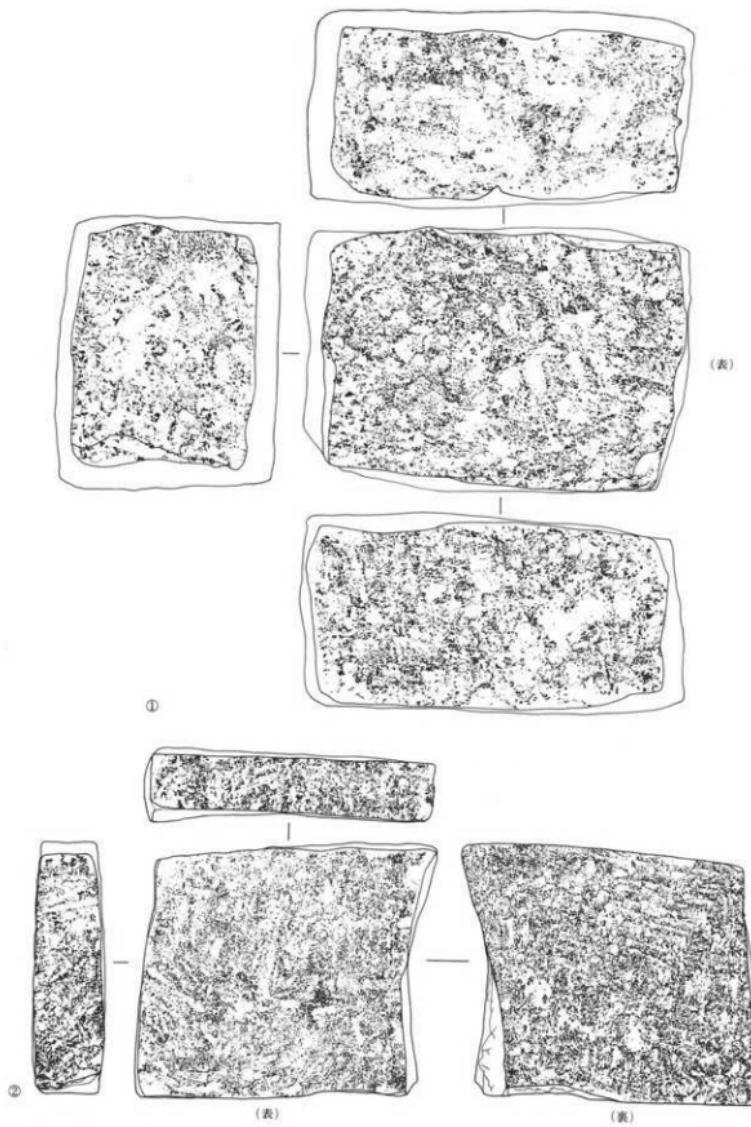


図156 角閃石安山岩切石(1) 1/4

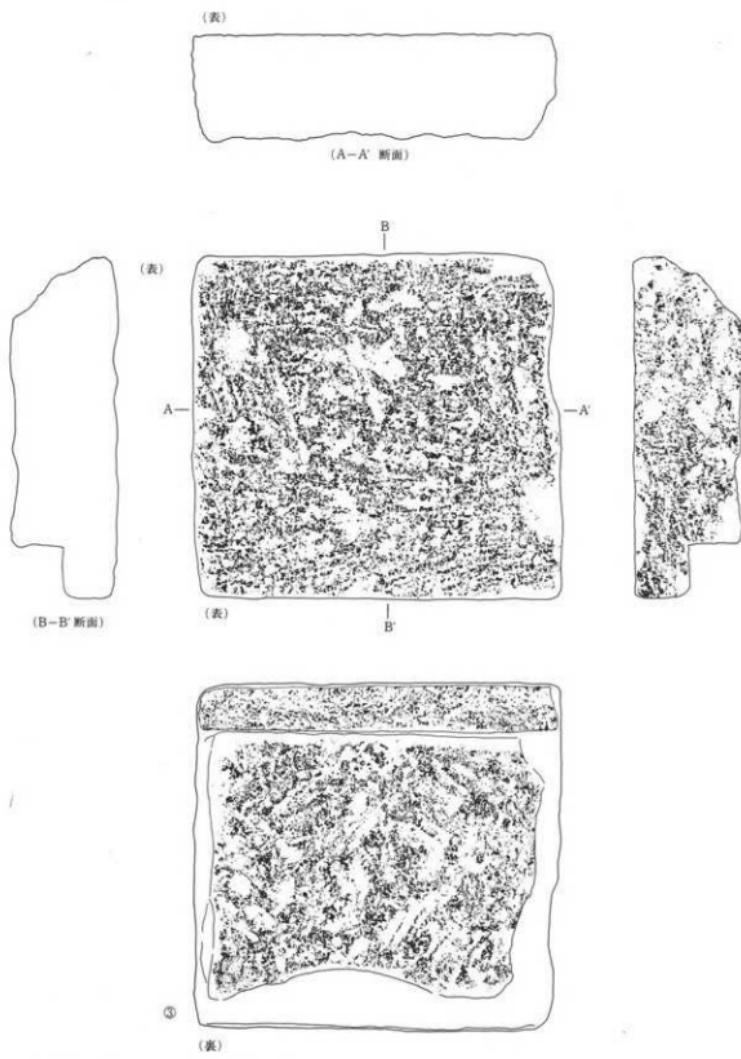


図157 角閃石安山岩切石(2) 1/4

第7節 石造物

1 五輪塔・宝篋印塔

今回の調査では五輪塔の空風輪などの部分が約500点、宝篋印塔の笠・塔身などが58点出土した。これらはいずれも原位置ではなく、墓壙の中に埋め込まれた状態、あるいは土壤に投棄された状態、さらに攢乱層に混入した状態で出土した。そのためこれらが建立された当時の原形状を明らかにできる資料を得ることはできなかった。

出土の位置をみてみると、金堂周辺に集中していることが特徴である。金堂基壙上と縁辺の表土と攢乱層中には多数が混じっており、その東側に接して検出された不正形の大形の土壤 S K02・03では、地山を掘り込んだ底部全体に多数が散乱しており、また埋土中にも多数が含まれていた。これらは不要になったものが投棄されたものとみられ、いずれも原状はとどめていない。ただ基壙南縁の傾斜面にかかる S 15~17・E 21~23で、五輪塔の地輪が3個東西に並んでおり、その周辺に多数の玉石が散乱した状態であるのが検出された。これらは原位置を保っている可能性があるが、水輪から上は失われていた。金堂の南側に接する第29次調査では多数の墓壙が検出されたが、これらの中にも五輪塔の部分などが落ち込んだ状態であった。の中でも S T51では五輪塔の各部分が墓壙いっぱいに詰め込まれるようにしてあり、また S T54からは角閃石安山岩製で修行門（南）を示す梵字が刻まれた空風輪・火輪・水輪が落ち込んだ状態で出土した（図158）。金堂の北西の第26次調査区で検出された井戸跡の埋土からも、土器・瓦類とともに多数の石造物が出土している。その内の S E10からは五輪塔の地輪、宝篋印塔の塔身と基礎などが多く出土した（図158）。塔身には月輪の中に胎蔵界四仏の種子を現したものと、方形区画の中に金剛界四仏の種子を現したものがある（図158）。S E15の埋土からも同様な遺物の出土がみられたが、これらの間に祭祀の形態を示すような共通性や組合せは認められず、埋め戻しに際して用土とともに無作意に投棄されたものと見なされる。

表53 五輪塔・宝篋印塔（図158）

番号	種別 器形	出土位置	遺存率 部位	法量 (cm) 口徑×底径×高さ	胎土	焼成 色	器形・技法等の特徴	PL番号
①	五輪塔 空風輪・火輪・水輪	29次・ S T54 埋土	完形	(空風輪) 15.0×15.0×23.5	角閃石安 山岩	灰白色	空風輪は一体で、火・水輪とは本来は別個体である可能性もある。空輪には「キャ」、風輪には「カ」、火輪には「ラ」、水輪には「バ」が陰刻され、その後に「キャ」「カ」は赤色塗料、「ラ」「バ」は黒色塗料で着色されている。	147-1
②	五輪塔 火輪	5トレンチ S K02	完形	29.5×30.0×17.9	角閃石安 山岩	灰白色	軒は全体的に綾り弧を描いて反るが、両端部が急となる形状を示す。上部は一辺が14cmの方形で平頂となっており、空風輪を嵌め込む柄穴は造られていない。種子は施されていない。表面は全体的に滑かに仕上げられている。	147-2
③	五輪塔 地輪	26次 S E10 埋土	完形	14.5×14.5×21.5	安山岩 (多孔質)	暗灰色	正面に3行に「妙春（ケン）□□阿闍梨」と陰刻されている。表面の仕上げはやや粗めである。	
④	宝篋印塔 塔身	26次 S E10 埋土	完形	17.5×17.5×15.5	安山岩	暗灰色	各面の中央に径12.5cmで月輪を描き、その中に梵字を陰刻する。図の左は「アク」・「ア」。	
⑤	宝篋印塔 塔身	26次 S E10 埋土	完形	13.5×13.5×14.0	安山岩	暗灰色	各面に10.5×10cmの方形の区画を作り、その中に梵字を陰刻する。図の左から「アク」・「キーリー」・「タラーク」・「ウン」。	

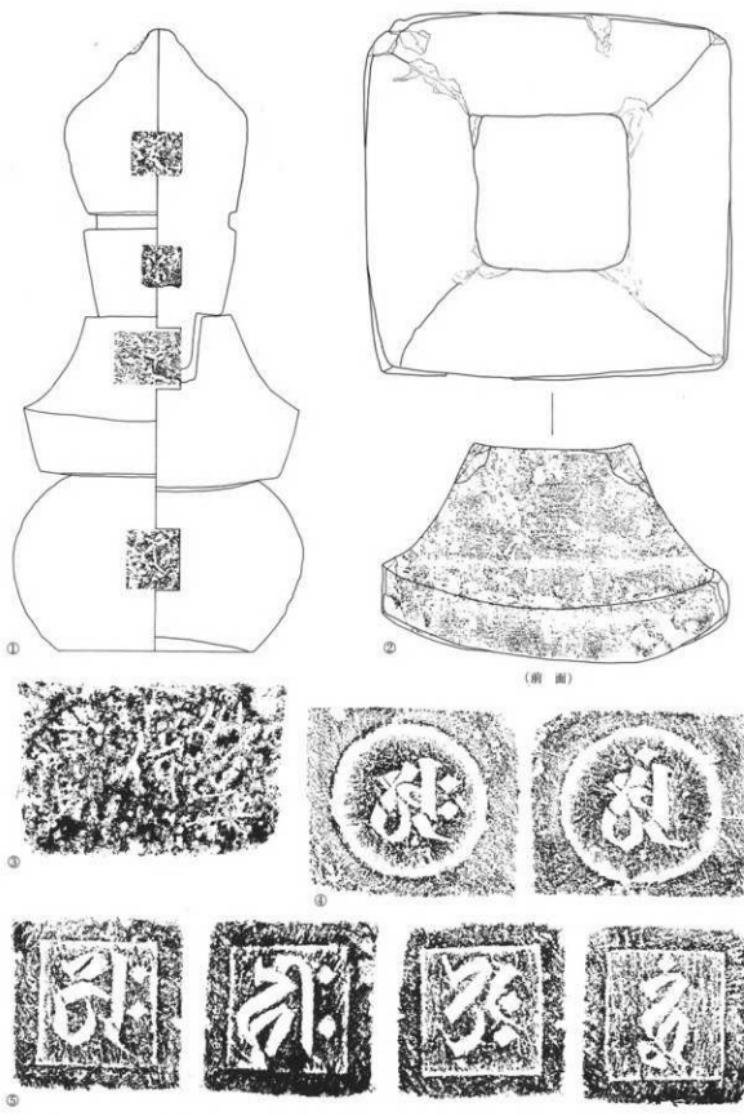


図158 石造物 ①～③：五輪塔、④～⑦：宝蓋印塔 1/4

2 板碑

板碑は13個が出土しているが、五輪塔・宝篋印塔と同様に金堂跡とその周辺からの出土が目立つ。ただ寺域北辺部と塔跡南側からも出土しており、それらに比べて散布の範囲は広いようである。また材質的には緑泥片岩製のものと安山岩製のものがある。

緑泥片岩製のものはほとんどが破片で全体の形状が分かることは少ないので、梵字で阿弥陀三尊ないしは主尊の阿弥陀如来を刻んだものが多く、無地のものは少ないようである。

図159-①と②のものは大きさが異なるが、阿弥陀三尊の表現はよく似ており、同一者による作製とみられる。①の梵字の下に年号が陰刻されているが、それは梵字を刻んだ技術に比べて稚拙あり、後に別人によった刻字と見なされる。このことは板碑の流通と使用の過程を示すものと考えられる。安山岩製のものは肌理の粗い材質の表面を平坦に整え、そこに五輪塔または宝篋印塔を線刻しているが、技法と表現内容には優劣の差があるのが認められる。裏面は緩い弧状に膨らむ形状に造られている。

緑泥片岩製

安山岩製

表54 板碑（図159-160）

番号	種別 器形	出土位置	遺存部位	法 量 (cm) 口径×底径×高 度	胎 土	焼 成 色	器形・技 法等の特 徴	PL番号
①	板 碑	26次 S E 15 埋土	上半部 が残存	28.0×2.5×(58, 0)	緑泥片岩	緑色	前面の上部に主尊種子「キリーカ」、その下に並んで脇侍種子「サ」「サク」が陰刻される。「キリーカ」の下には蓮座がつけられている。その下方の中央部に「至徳二年 月」の銘文が陰刻されている。前面は平滑に仕上げられているが、裏面は粗い削りのままである。上端は山形に整えられている。	148-4
②	板 碑	26次 S E 15 埋土	完形	25.0×2.0×75.0	緑泥片岩	緑色	前面の上部に「キリーカ」、その下に並べて「サ」「サク」が陰刻される。「キリーカ」の下には蓮座がつけられている。(心)較べて小ぶりであるが表現はよく似ている。銘文はない。前面は平滑に仕上げられているが、裏面は粗い削りのままである。上端は山形に整えられており、下端は急な山形で8cm分は嵌め込み部分となるため粗い仕上げのままである。	148-5
③	板 碑 (画像)	25次 擾乱層 が残存	上半部 が残存	17.0×2.0×(30, 5)	緑泥片岩	暗緑色	前面の上部に「キリーカ」と蓮座が陰刻され、その下に阿弥陀如来をみられる立像が陰刻されている。銘文は不明である。前面は平滑に仕上げられているが、裏面は粗い削りのままである。上端は山形に整えられている。	148-3
④	板 碑 (五輪塔 画)	5トレン チ S K02	完形	22.5×7.0×69.0	安山岩	暗灰色	前面のほぼ全体にわたり五輪塔画を陰刻する。画には上から「カーラ」「ラーナ」「キャラ」「アーラ」「ベー」の梵字が書かれている。前面は平滑に仕上げられているが、裏面は弧状を呈し、粗い仕上げである。下部の14cmは嵌め込み部となり、斜方向にノミ痕が残る。上端は山形に整えられ、下端は丸味を帯びた圭頭状に造られる。	148-1
⑤	板 碑 (五輪塔 画)	25次 表土	上半部 が残存	16.0×6.5×(32, 0)	安山岩	暗灰色	前面に五輪塔画を陰刻するが、表現は稚拙であり、地輪は不明瞭である。梵字は書かれていない。前面は平滑に仕上げだが、裏面は粗い仕上げである。上端は浅い山形に整えるが、空輪の先端が欠けた状態である。	148-2
⑥	板 碑 (宝篋印 塔画)	25次 表土	上半部 が残存	17.0×6.0×(18, 0)	安山岩	黒灰色	前面に宝篋印塔を陽刻する。宝珠から塔身上端部までが残存するが、表現は丁寧である。上端は緩い弧状に整えられる。	
⑦	板 碑 (宝篋印 塔画)	25次 表土	下半部 が残存	22.0×6.5×(30, 0)	安山岩	黒灰色	前面に宝篋印塔を陰刻する。基礎・反花・基壇の部分が残存するが、表現は丁寧であり、基礎は2区に分けられた枠内に「口向」「五月十二日」と銘文が陰刻されている。前面は平滑に仕上げられている。下端は幅12.5cm、長8cmの嵌め込み用の柄が造り出されている。	

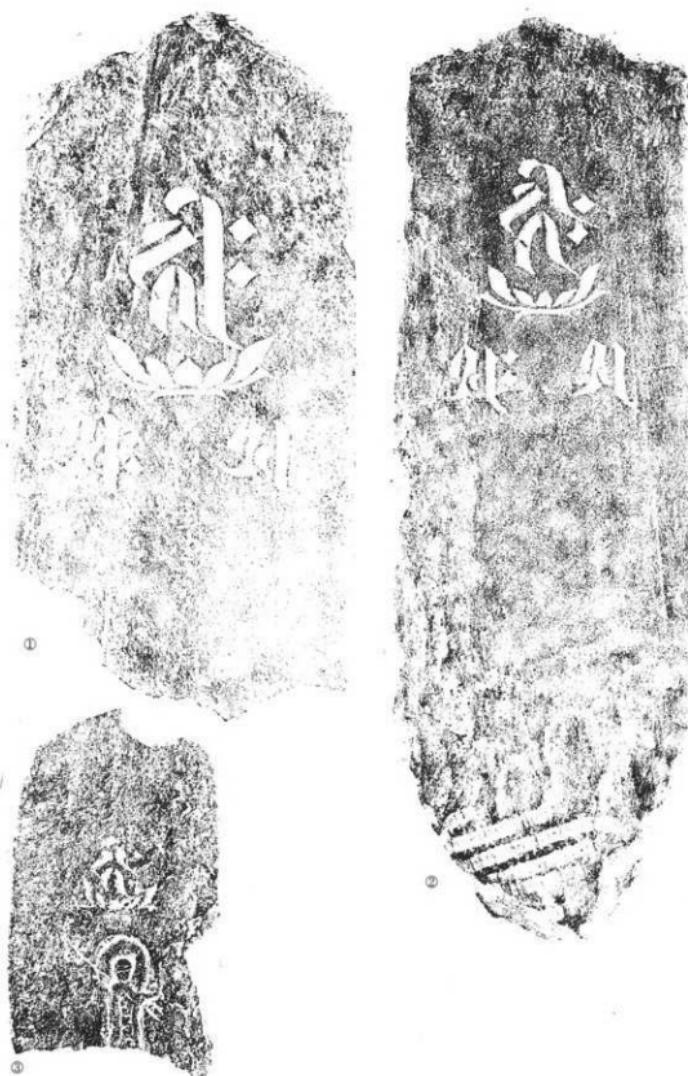


図159 板碑拓影(1) 1/4 ①・②:SE15、③:第25次調査区

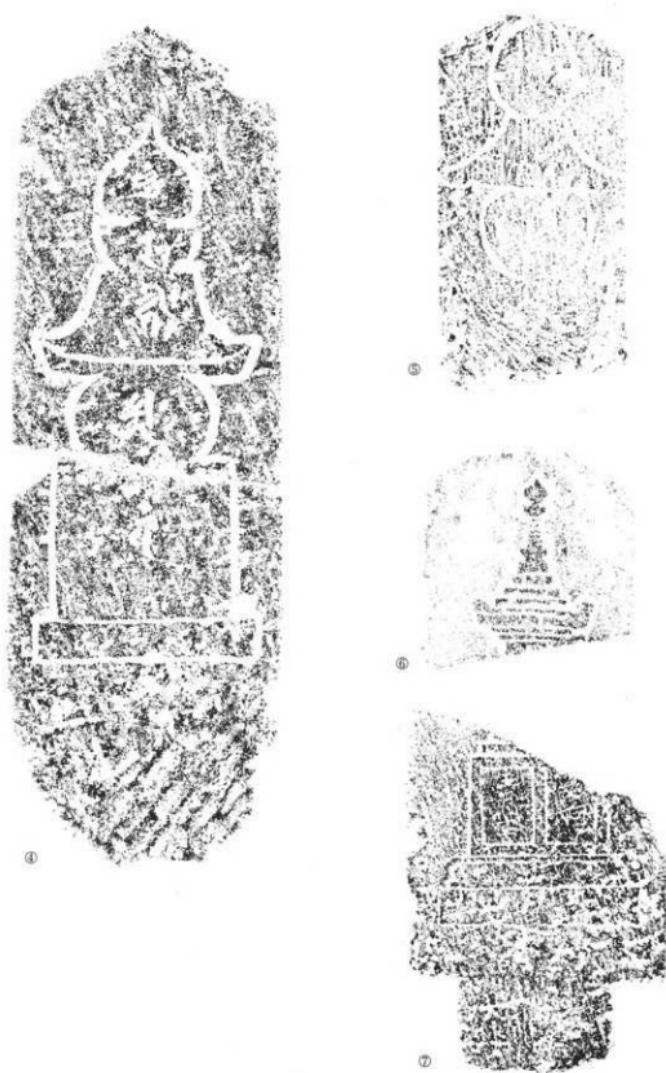


図160 板碑拓影(2) 1/4 ④:SK02、⑤~⑦:第25次調査区

3 石造物銘文

出土した五輪塔・宝篋印塔・板碑の中には銘文が刻まれたものがあり、確認されているものは宝篋印塔基礎・7、五輪塔地輪・5、板碑1である。

至徳2年銘 これらの中には日付をもつものがある。宝篋印塔で最も古いものは、S K02から出土した「至徳二年二月八日」(1385)で、最も新しいものは出土位置が明確ではないが「永禄八年八月」(1565)であり、これ以外は応永年間(1394~1427)のものである。寺域内から出土したと見られるもので、かっては史跡地内の墓地に在り、現在はその移転に伴って他所に移っているものの中にも「応永」の銘をもつものがいくつか在る。五輪塔では最も古いものがS E 15埋土から出土した「永享八年十月十四日」(1436)で、最も新しいものがS E 10出土の「嘉吉元歳十月廿三日」(1441)であり、永享年間(1429~1440)の銘が多い。宝篋印塔と同様にかって史跡地内に在ったものの中にも「永享七年」(1435)の銘のものが在ることが確認されている。板碑では図159-①で取り上げた「至徳二年」(1387)の銘が刻まれたものがある。銘文全体を見ると、宝篋印塔のものが例外的に新しい永禄のものを除くと、いずれも五輪塔のものより古い。原状をとどめる状態で残っているものが無いため確証を得ることはできないが、このことと2種類が混在して出土していることを考慮すると、これらは区域を分けて建立されていたのではなく、宝篋印塔が先行し五輪塔が後出するといった建立時期のずれがあったと推察できる。

宝篋印塔が先行

五輪塔が後出

銘文の記載形式 次に銘文の記載形式についてみてみる。宝篋印塔は向かって右側に法名または法名と願文、左側に紀年を書くものがほとんどで、永禄8年のものののみ法名を中央にしその左右に紀年を割書する形式をとっている。またほとんどは銘文は正面とみられる一面のみに刻まれているが、図161-③は正面と両側面の3面に書かれている。この形式のものは、確認されているものの中ではこの1点のみである。これは願文から、納経あるいは經典供養の目的で造られたものとみられる。五輪塔は向かって右側から願文・法名・紀年の順に書くもの、願文と法名・種子・紀年の順のもの、中央が種子でその左右に法名を割書するものがある。板碑は種子の下の中央部に、紀年が1行で書かれているがその下部が欠失しているため全体の形式は不明である。

金堂の廃絶を示す 以上の出土した石造物の銘文から、14世紀後期には金堂基壇上と周辺に宝篋印塔が建てられる状態となっていたのを知ることができた。このことはその時には既に金堂が廃絶していたことを意味する。そして国分寺の根本建造物の1つで、維持と修造に力が注がれていた金堂がその様な状態となっていたことは、とりもなおさず国分寺全体の荒廃が進行しており、本来の機能が果たせない状況に至っていたと判断してよい。そして銘文の紀年からみて、墓域化は相当長期間にわたっており、その後もこれらが完全に撤去された様子は窺えない。従って国分寺のこの廃絶状態が一時的なものではないことは明かであり、またその後にも伽藍が再建されることはないとしたとみて間違いない。つまり文献史料には記録されておらず、また出土遺物のみからでも判断し難い国分寺の廃絶時期について、これらの銘文によってその下限を押さえることができた訳である。

表55 石造物銘文（図161）

番号	種別	出土位置	遺存部位	法 量(cm) 幅×奥行×高さ	材 質	色 調	器形・技法等の特徴	銘 文	PL番号
①	宝鏡印塔 基 礎 石 SK02	5トレン チ 表土	完形	27.0×27.0×20.5	安山岩	暗灰色	前面は2区に分けられ、各區に2行ずつの計4行、12字が陰刻されている。	「妙義 二 禪尼 月 至德 八 二年 日 (至徳2年は1385年)」	149-1
②	宝鏡印塔 基 礎 表土	15トレン チ 表土	完形	29.0×29.0×21.0	安山岩	暗灰色	前面は2区に分けられ、右区に1行、左区に2行で計15字が陰刻されている。	「實阿禪門 応永五年戊ツ 九月廿三日」 (応永5年は1398年。戊ツは戊寅)」	149-2
③	宝鏡印塔 基 礎 石 SK02	5トレン チ 表土	四隅の角 が欠失	34.0×34.0×20.0	安山岩	暗灰色	各面は2区に分けられ、正面と両側面の3面に各4行ずつの計12行が陰刻されている。欠共部分があるため字数は不明。	(正面) ③-2 「奉□□□□ 五百六十七部 奉真讚誦經□ □□□□是」 (側面) 「□□□□ 伴類結縁道 俗男俗女□ □□□□」 (側面2) ③-1 「□□□□□ 應永六年九月 施主了應 □□□□□□」 (応永6年は1399年)	
④	宝鏡印塔 基 礎 石 SK02	5トレン チ 表土	完形	24.0×24.0×16.0	安山岩	暗灰色	前面は2区に分けられ、右区に1行、左区に2行の計3行で12字が陰刻されている。	「□善禪尼 應永廿年 九月九日」 (応永20年は1413年)」	
⑤	五輪塔 地 輪 埋土	26次 SE15	完形	28.5×28.5×20.0	安山岩	暗灰色	前面は平坦に整えられ、5行で25字が陰刻されている。	「奉造立逆修 石塔一基 阿蘭梨圓了 永享八年丙辰 十月十四日」 (永享8年は1436年)」	149-3
⑥	五輪塔 地 輪 表土	15トレン チ 表土	下部の一 部を欠失 するがほ ぼ完形	30.3×30.3×20.5	安山岩	暗灰色	前面は平坦に整えられ、中央に凡字、その両側に1行ずつの計17字が陰刻されている。	「板息寂慶禪門 (アン) 永享十年正月十八日敬 (永享10年は1438年)」	
⑦	五輪塔 地 輪 埋土	26次 SE10	隅部の一 部を欠失 するがほ ぼ完形	26.0×26.0×17.0	安山岩	暗灰色	前面は平坦に整えられ、4行で16字が陰刻されている。	「逆修 妙祐禪尼 嘉吉元庚酉 十月廿三日」 (嘉吉元年は1441年)」	149-4

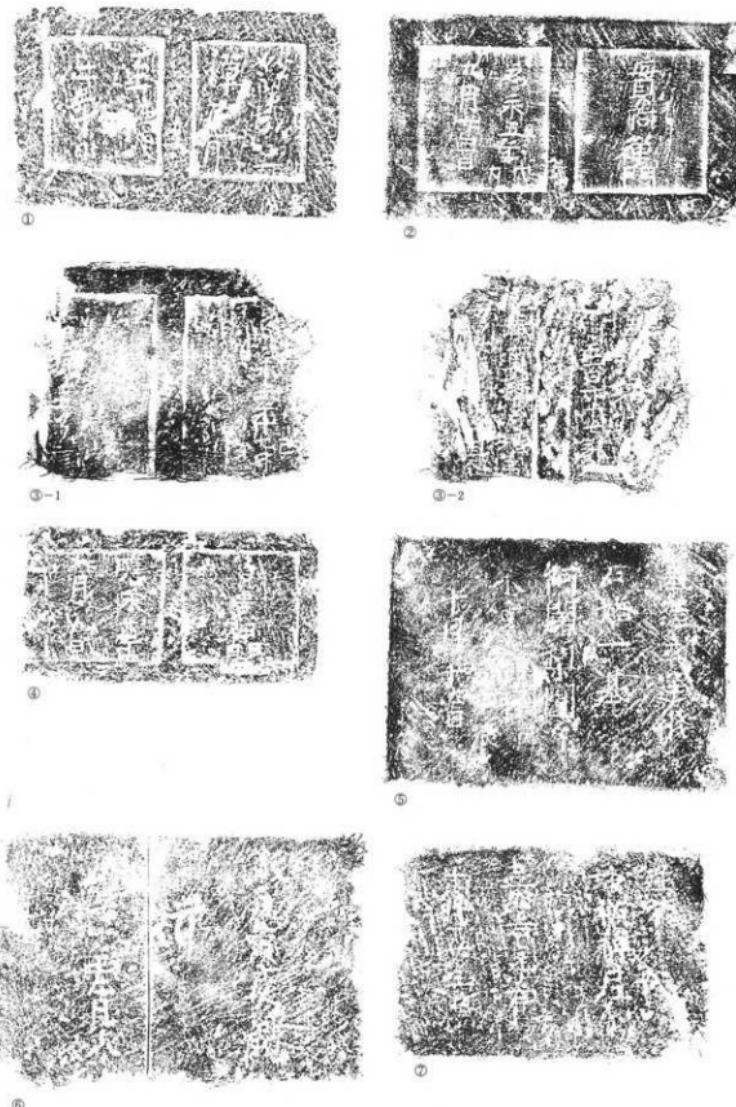


図161 石造物銘文拓影 1/4 ①~④:宝蓋印塔台石、⑤~⑦:五輪塔地輪

第1節 瓦類註

- (1) これ以前に新田郡笠懸村鹿ノ川窯跡の調査例がある(『日本考古学年報』1 1951年)が、本調査ではなく、出土遺物の詳細も明らかではない。
- (2) 「○○遺跡」「○○廃寺」という名称については、瓦出土遺跡の性格が明確にならない限り慎重でなければならないが、ここでは通用のものを使用した。
- (3) 県内の複弁6・7葉軒丸瓦については、大江正行氏「田端廃寺の推定」(群馬県埋蔵文化財調査事業団「田端遺跡」 1988年)に詳しい。
- (4) 瓦製作に用いる回転台は、基本的にはロクロと呼ぶのは適當ではないと思われるが、ここでは通例にしたがって「ロクロ型挽き」という名称を使用した。
- (5) 「山王廃寺の性格をめぐって」(『群馬県史研究』20 1984年)。
- (6) B-2技法と思われるものの中には、瓦当裏面下半の凸帯の幅が非常に狭いものがいくつか存在し、これらは丸瓦部分が円筒形をなしていなかった可能性がある(B207aの一部など)。その場合、②で円筒の半分まで、つまり丸瓦部として必要な部分だけしか粘土を巻いていなかったことも考えられる。
- (7) 須田茂・高井佳弘「台之原廃寺の瓦について」(戸塚本町教育委員会『台之原廃寺跡II』1985年)。
- (8) 上原真人「仏教」(『岩波講座日本考古学』4 岩波書店 1986年)。
- (9) 望月精司「戸津古窯跡群・二ッ梨古窯跡群」(北陸古瓦研究会『北陸の古代寺院』桂書房 1987年)
- (10) 上植木廃寺の瓦については、須田茂「上植木寺院跡の軒瓦の型式分類」(『伊勢崎市史研究』3 1985年)による型式番号を「須田氏○型」として附記した。
- (11) 同範品の分布には、特に次の文献を参考にした。

群馬県立歴史博物館『群馬県の古代寺院と古瓦』 1981年

関東古瓦研究会『第3回関東古瓦研究会研究資料No.3』 1982年

- (12) 須田氏註 (9) 文献による。

- (13) 松田猛氏の御教示によると、上植木廃寺、寺井廃寺、埼玉県五明廃寺に分布する単弁16葉軒丸瓦も調査で出土していたとのことであるが、今回の整理では所在を確認することができなかった。

- (14) 下野国分寺の瓦については栃木県文化振興事業団大橋泰夫氏の御教示を得た。計測値などについては栃木県教育委員会『下野国分寺V』(1989年)を参照した。

- (15) 須田茂「寺井廃寺」(『群馬県史』資料編2 1986年)

- (16) 註(5)による。